

矢戸上野2・3号窯

宅地開発事業に伴う
埋蔵文化財の発掘調査報告書

岐阜県 可児市教育委員会

1994.3

序 文

古くから先進文化を採り入れ、地方の一拠点として発展してきた可見市は、今や人口8万5千人を突破しました。人口の増減や産業の発展、衰退といった事象は、歴史のそれぞれの段階において、社会の動向を反映し、移り変わってきたことでしょう。永く農業中心であった可見の産業に、新しく窯業が採り入れられたのは、平安時代にまで遡り、それ以来現在に至るまで連綿と受け継がれています。

犬山市や多治見市、土岐市に連なる可見市の南部丘陵には、研究者の調査により、平安時代から江戸時代に至る陶工達の足跡が、窯跡として数多く残っていることが知られていました。その中で、“山茶碗”と呼ばれて親しまれてきた陶器は、近年、白瓷や白瓷系陶器として編年作業が進み、細かく時期区分されています。

このたび、この丘陵の一角に住宅団地が造成されることになり、現状保存不可能な窯跡を発掘調査いたしました。この窯跡は、平安時代の終わり頃のもので、陶器の大量生産を試みた時期のものだと言われます。本書がその過程を解明する一助となれば幸いに存じます。

本調査及び本書の刊行に当たり、多くの方々にご指導やご協力を得ました。末筆ながら深く感謝する次第です。

平成6年3月

可見市教育委員会

教育長 渡邊 春光

例 言

1. 本報告書は、岐阜県^{カニ}可^{キト}見^{ツノ}市矢戸字上野1458番地の1に所在した、矢戸上野2・3号窟（遺跡番号G34K07489）の発掘調査に係るものである。
2. 発掘調査は、住宅団地の造成工事に伴う緊急調査で、事業主体者であるイワクラゴールデンホーム㈱と緑新㈱から可見市が委託を受け、可見市教育委員会が主体となって実施した。
3. 発掘調査の体制は次のとおりである。

可見市教育長	渡邊 春光	現場作業員（順不同）					
教育(総務)次長	可見 征治	相木 大藏	須 潤	巖 富成	正秋	高木 昭夫	
社会教育課長	前田 正光	東 良平	後 藤 弘	濱 島 勲	松川 一雄		
同 課長補佐	奥村 幸彦	田中 正三	荒 川 博	古 賀 次夫	水野テツ子		
同 文化係長	中島 繁昇	浜地 清美	高 島 博子	玉 越 真司	田中 弘志		
同 調査担当	長瀬 治義	整理作業員（順不同）					
同 庶務担当	水野 真季	加藤 基弥	岡 田 智子	及び上記現場作業員			

4. 考古地磁気の測定は、富山大学理学部教授 廣岡公夫先生他に、出土遺物の胎土分析は、岐阜県陶磁器試験場に依頼した。第3節にその結果をご執筆いただいている。
5. 本書の編集、その他の部分の執筆は、長瀬治義が担当した。遺物の実測は、主に加藤基弥と岡田智子、水野テツ子、浜地清美が行った。遺物の計測、トレースは、主に水野と浜地が担当し、遺構のトレースと写真は、長瀬が担当した。
6. 発掘作業、整理作業、報告書作成作業に要した経費は、総額6,464,000円であり、全額を事業主体者であるイワクラゴールデンホーム㈱と緑新㈱からの委託料でまかなった。
7. 発掘調査の関係資料は、可見市教育委員会（可見郷土歴史館）が保管している。
8. 本報告書作成にあたり、多治見市文化財保護センター山内伸浩氏にご教示を賜わった。

凡 例

1. 方位は磁北である。
2. 遺構の長さや幅、深さ等の計測値は、水平若しくは垂直方向の値である。
3. 本文中の右、左の呼称は、窟体に向かっての方向である。
4. 遺物の図化は、原則として口縁部残存率が、楕40%以上（3号窟は50%以上）小皿70%以上の個体について行っている。ただし、計測表とグラフへの掲載はこの限りではない。
5. 使用したレベルの仮原点（±0 m）の標高は、2号窟121.796m、3号窟124.283mである。

目 次

序 文	
例 言 凡 例	
目次 挿図目次 表目次	
第1章 発掘調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第3章 矢戸上野2・3号・未完窯	6
第1節 矢戸上野2号窯	6
第1項 遺 構	6
第2項 遺 物	12
第2節 矢戸上野3号・未完窯	33
第1項 遺 構	33
第2項 遺 物	39
第3節 自然科学的調査	66
第1項 遺物の胎土分析	66
第2項 矢戸上野2・3号窯の 考古地磁気測定	68
第4章 考察とまとめ	74
付表 出土遺物計測表	83
図 版	105

挿 図 目 次

第1図 可見市を中心にした白瓷・山茶碗窯	4
第2図 矢戸上野古窯址群付近地形図	5
第3図 矢戸上野2号窯調査前・後測量図	8
第4図 矢戸上野2号窯実測図	9
第5図 矢戸上野2号窯灰原断面図	10
第6図 2号窯灰原の椀・小皿法量分布	15
第7図 2号窯窯内の椀・小皿法量分布	15
第8図 2号窯出土椀の高台径の分布	16
第9図 2号窯出土小皿の高台径の分布	16
第10図 2号窯出土遺物実測図(1)	20
第11図 2号窯出土遺物実測図(2)	21
第12図 2号窯出土遺物実測図(3)	22
第13図 2号窯出土遺物実測図(4)	23
第14図 2号窯出土遺物実測図(5)	24
第15図 2号窯出土遺物実測図(6)	25
第16図 2号窯出土遺物実測図(7)	26
第17図 2号窯出土遺物実測図(8)	27
第18図 2号窯出土遺物実測図(9)	28
第19図 2号窯出土遺物実測図00	29
第20図 2号窯出土遺物実測図01	30
第21図 2号窯出土遺物実測図02	31
第22図 2号窯出土遺物実測図03	32
第23図 矢戸上野3号・未完窯測量図	35
第24図 矢戸上野3号・未完窯実測図	36
第25図 矢戸上野3号窯灰原断面図	37
第26図 3号窯出土椀・小皿類の法量分布	41

第27図 3号窯出土椀の高台径の分布	42
第28図 3号窯出土小皿等の高台径の分布	45
第29図 3号窯出土遺物実測図(1)	48
第30図 3号窯出土遺物実測図(2)	49
第31図 3号窯出土遺物実測図(3)	50
第32図 3号窯出土遺物実測図(4)	51
第33図 3号窯出土遺物実測図(5)	52
第34図 3号窯出土遺物実測図(6)	53
第35図 3号窯出土遺物実測図(7)	54
第36図 3号窯出土遺物実測図(8)	55
第37図 3号窯出土遺物実測図(9)	56
第38図 3号窯出土遺物実測図00	57
第39図 3号窯出土遺物実測図01	58
第40図 3号窯出土遺物実測図02	59
第41図 3号窯出土遺物実測図03	60
第42図 3号窯出土遺物実測図04	61
第43図 3号窯出土遺物実測図05	62
第44図 3号窯出土遺物実測図06	63
第45図 3号窯出土遺物実測図07	64
第46図 3号窯出土遺物実測図08	65
第47図 X線回折グラフ	67
第48図 考古地磁気測定結果	71
第49図 谷迫間2号窯期の椀と小皿の法量	74
第50図 2号窯の焼台配置復原図	75
第51図 谷迫間2号窯期の窯体構造	78
第52図 谷迫間2号窯期の器構構成	80

表 目 次

第1表 矢戸上野2号窯の窯体法量	11
第2表 2号窯出土椀・小皿の法量平均値	12
第3表 2号窯出土遺物集計表	13
第4表 矢戸上野3号窯の窯体法量	34
第5表 矢戸上野未完窯の窯体法量	38
第6表 3号窯出土遺物集計表	40
第7表 3号窯出土椀・小皿類の法量平均値	41
第8表 定量分析の結果	
第9表 2号窯、NRMの磁化測定結果	72
第10表 2号窯、25 Oe消磁後の測定結果	72
第11表 2号窯、50 Oe消磁後の測定結果	72
第12表 2号窯、75 Oe消磁後の測定結果	72
第13表 3号窯、NRMの磁化測定結果	73
第14表 3号窯、25 Oe消磁後の測定結果	73
第15表 3号窯、50 Oe消磁後の測定結果	73
第16表 3号窯、75 Oe消磁後の測定結果	73
第17表 2・3号窯、考古地磁気測定結果	73
第18表 谷迫間2号窯期の窯構造一覽	77
第19表 美濃白瓷・山茶碗編年表	81

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

経緯

かねてより計画のあった可見市矢戸地内の住宅団地開発事業が、平成2年に具体化し、4月に事前協議書が提出された。市教育委員会は、区域内に矢戸上野2号窯（G34 K07489）が所在すること、計画区域全域の分布調査が必要である旨の意見を回答した。

その後、平成3年8月26日に「埋蔵文化財の取扱い協議書」が提出される段となり、市教委は全域の現地踏査を実施した。開発面積は、可見市矢戸字上野1458-1など65,857㎡余に亘り、新たに窯跡1基（3号窯と命名）を確認し、その保存を要望した。これを受けて事業者との間で保存協議に入り、古窯2基の位置確認を行ったが、窯跡の立地する斜面の現状保存は、事業自体に大きく影響を及ぼすため、事前に発掘調査を行なって記録保存を図ることは、やむを得ないとの結論に至った。

この後、開発許可の見通しが立ち、文化財保護法（以下「法」）に係る届出が、事業者（イワクラゴールデンホーム㈱代表取締役と緑新㈱代表取締役）から提出され、これを進捗するとともに、開発許可の下りた後、法に係る通知をした。

平成5年6月3日からの発掘作業に先立ち、事業者からの「発掘調査委託申込書」を受けて、可見市長との間で「埋蔵文化財取扱い協定書」（5月7日付）と、これに基づいた「発掘調査委託契約書」（5月10日付）を結んでいる。関係法令の手続きは、以下の通りである。

法57条の2第1項の手続き

市教委発 平成4年4月8日付 可教社第15号（届出書の到達）

県教委発 平成4年4月13日付 教文第114号（指示書の伝達）

法98条の2第1項の手続き

市教委発 平成5年4月28日付 可教社第57号（発掘調査の通知）

文化庁発 平成5年11月22日付 5保記第48号（通知書受理の通知）

県教委発 平成5年12月8日付 教文第850号（通知書受理の伝達）

遺失物法第1条第1項の手続き

市教委発 平成5年9月14日付 可教社第236号（発見届、保管証の提出）

経過

発掘調査の現場作業は、平成5年6月3日から9月10日までの間、冷害をもたらした長梅雨に悩まされながら、一部水洗作業も平行して行い、実働38日間を要した。その後の整理、報告書作成作業は、年度末までの期間をこれに充てた。

発掘区の立木伐採は事業者にお願ひし、調査は下草刈りと平行して、まず2号窯（1号窯は隣

接する住宅団地内に以前立地したという)の現況測量から始めた。窯体と推定される部分は、等高線とはほぼ垂直に一部が溝状に窪んでいることが、着手以前にも観察でき、窯体天井部の崩落が予想できた。また、窯体の前庭部と考えられる部分は、扇状に平坦面となっており、窯の規模や位置の推定は容易であった。灰原の遺存状況も比較的良好で、一部が攪乱を受け、遺物が露出していたに過ぎない。ただし、灰原部分からはかなりの湧水が見受けられ、後に難を極めた。

発掘作業は、まず窯体と考えられる場所に発掘区を設定し、窯体天井部の崩落に伴う窯体小口の焼土から、窯体上面のプランを検出するため、その部分の表土と流土剥ぎを進めた。窯体上部の天井はやはり崩落しており、プランは首尾よく捉えられたが、分焰柱部分では天井の遺存が確認され、慎重を極めた。ここに至り、煙道部の先端と分焰柱中央を結ぶ線を窯体の中軸として決定し、M列とし、一辺2mのグリッドを調査区の全域に設定した。6月21日のことである。

窯体の掘り下げを行う一方で、前庭部及び灰原の調査も開始し、数本の土手を残して遺物を取り上げていった。灰原の掘り下げに際し、遺物の分布に片寄りが認められた他、輪花碗の破片が数多くみられた。残存する窯体の天井部もかろうじて持ちこたえ、写真撮影と実測作業を進めたが、ひびが入り出したため、その後分焰柱を残して架構部分はとり去ることになる。床面に原位置を保つ焼台の遺存も比較的良好だった。

2号窯の調査に一応の目度がついたところで、同様の手法により3号窯の調査に取りかかった。3号窯も、やはり窯体の位置推定は容易であり、かつ分焰柱部分の天井も残存していた。更に、窯体の左に接して、窯状に掘り込んだ遺構が検出され、後に掘削途上で放棄した未完の窯であることが判明する。灰原の遺存状況は極めて良く、遺物量も2号窯のほぼ倍であった。

2号窯同様に、窯体等のプランと灰原等のセクションを実測した後、それぞれの断ち割りをを行うとともに、考古地磁気測定のためのサンプリングを行い、調査区の最終測量を経て、現場作業を終了した。尚、8月5日と7日の両日には、市立中部中学校の生徒3グループ、19人が、勤労体験学習として分かれて参加した。各実測図は $\frac{1}{500}$ で、平板測量は $\frac{1}{500}$ のスケールで行った。



第2章 遺跡の立地と環境

自然的条件 (第1図)

可見市は、岐阜市の東方約30kmのところ position し、東・南・西・北をそれぞれ御嵩町・多治見市・愛知県犬山市・美濃加茂市などと接している。近年、名古屋市のベッドタウンとしての機能を発揮し、急速に宅地開発が進み、人口急増を遂げた街である。これに伴い、現在までに11基の中世窯が発掘調査され、今回の調査で13基目となった。しかしなお自然に恵まれ、国指定天然記念物のサクライ草の自生地や、国指定名勝木曾川などでよく知られている。

地質的には、中・古生層が陥没してできた可見・美濃加茂盆地の南部に当たり、その中を木曾川や可見川が西流し、市北部一帯ではよく河岸段丘が発達している。木曾川の段丘は、低・中・高位の3段を数える。市域の西端には標高335mの鳩吹山が、東端には372mの浅間山が、中古生層により形成されているが、中・南部一帯は低丘陵を成している。中央の低丘陵は、哺乳動物の化石を産することで有名な、第三紀中新世の中村層と平牧層で、南部丘陵はこの上に古木曾川の運搬による土岐砂礫層が堆積している。

土岐砂礫層は、この付近から土岐市、多治見市、瀬戸市等、広範囲に堆積がみられ、瀬戸窯や美濃窯の発展と大きく関わっている。即ち、白瓷や山茶碗窯のほぼ全ては、この堆積層に対して掘り込まれ、構築されたものであり、この中や下位には良質の灰白色粘土を有し、やせた土地は松等の植生を促している。茶碗の制作や窯焚きの原材料は、全て現地調達が可能場所と言うことができよう。尚、この起伏ゆるやかな丘陵の谷間では、下位の粘土層によってもたらされた湿地帯が、しばしば認められる。学術的にも貴重な、シデコブシ、サギソウ、ミカワバイケイソウ、モウセンゴケやハッコウトンボ等の動植物が生息することでもよく知られている。

歴史的条件 (第1・2図)

古墳時代(7C)に遡る須恵器窯は、市内では柿田馬乗洞古窯が知られるのみである。時を置いて平安時代には、多治見市から連なる南西部の丘陵を中心として窯業活動が始まり、20基程の白瓷窯を残している。その後、平安時代末～室町時代にかけては、徐々にその活動の場所が東へ移動し、その結果南部丘陵一帯に70基程の(おそらく100基を超える)群を形成している。東端の久々利大萱・大平地区においては、これに続く桃山時代に、志野、黄瀬戸、瀬戸黒、織部等の茶陶に大きな花を咲かせ、これ以後連続と繰業がなされてきた。

矢戸上野2・3号窯は、南部丘陵の中央やや西寄りに相接して位置する。第1図にも示すように、平安時代末期(谷迫間2号窯期)には、この一帯にほぼ限定された窯址の分布状況のみ、大量生産への移行(白瓷から山茶碗へ)過程における試行錯誤をみるようである。窯は、北西に開く谷の最奥部北西斜面にあり、横市川が開折した平地へ下るにはほど近い場所である。

岐阜県 可児市全図

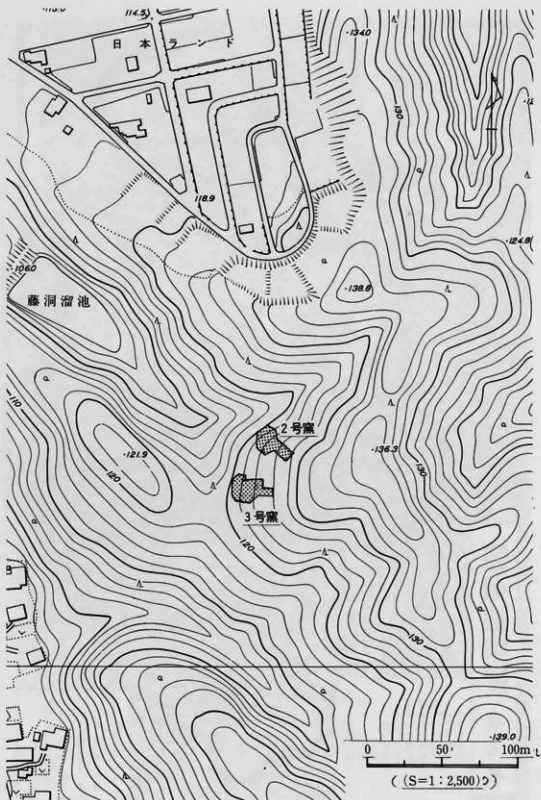


1. 谷迫間2号深
2. 下切鬼田古深
3. 下切香ヶ洞古深
4. 矢戸上野2号深
5. 矢戸上野3号深
6. 寺三反田古深
7. 吹ヶ洞古深
8. (滅失)
9. 神林寺裏2号深
10. 大蔵迫間洞4号深

凡 例	
▲	白 婆 深
●	山 茶 洞 深
○	番号を付した深は、谷迫間2号深洞に該当するもの



第1図 可児市を中心とした白婆・山茶洞深



第2図 矢戸上野2・3号窟付近地形図

第3章 矢戸上野2・3号・未完窯

第1節 矢戸上野2号窯

第1項 遺構 (第3～5図、第1表)

本窯は、3号窯、未完窯と隣接して北西に開く支谷の最奥部北西斜面に立地する。この斜面の傾斜は約22度、焚口付近では標高約115mを測る。窯体は、等高線に対してほぼ直角に築かれ、現況では、一部が溝状を呈し天井部の崩落がみられたものの、分焰柱に架かる部分ではなおも残存し、灰原を含めて保存状況は良好であった。

窯体の規模等は、主軸長9.2m、床面最大幅2.8m、焼成室斜面部の床面平均傾斜角41度、主軸方位N-140°-Eを測る。以下、窯体構造、灰原等を、焚口、燃焼室、分焰柱、焼成室、煙道部、前庭部、灰原の順に記述する。

焚口

焚口の床面幅は、2.1mを測る。床面の被熱部分は、燃焼室奥へ向かって傾斜する位置から、10cm手前まで検出された。最終焼成品の遺棄された遺物は、燃焼室とこの部分から推定224個体出土しており、後述の焚口右袖部へ移動された遺物とも合わせると、焼台を除き推定604個体にも上る。

燃焼室

床が被熱しているその境から、便宜上分焰柱の最奥までとする。主軸長2.6m、分焰柱の手前で床面幅2.0mを測る。床は、焚口から19度の傾斜で一旦下った後、僅かに分焰柱に向かって傾斜している。窯焚き後の灰は概ね片付けられており、薄く黒色灰層がその痕跡をとどめていた。床は、厚い所で5cmの敷土がなされ、赤く被熱硬化している。壁面の立ち上りは、分焰柱手前の右側でほぼ垂直に、左側ではやや内傾して立ち上り天井へ向かう。

分焰柱

分焰柱は、窯体床面が平坦な部分のほぼ中央に位置し、焚口からは約2mの距離にある。表面はよく被熱し、灰色を呈するがもろい。平面形は楕円形を呈し、床面では長径0.95m、短径0.8mを測る。この部分に架かる天井は、奥側約半分が遺存し、分焰柱奥の根元からの天井高は約85cmである。分焰柱中央での床面幅は、右側70cm、左側65cm、天井高は、推定右側70cm、左側60cmと、右がやや高めに作られている。燃焼室からしだいに床面の幅を広げてゆく平面形は、分焰柱の奥で更にその幅を広げ、舟形を呈してゆく。

分焰柱は、概ね地山をそのまま掘り残して作出されているが、表面には厚さ7～8cmのスサ入粘土の貼付が認められ、焚口側では2面(回)の補修面を確認し得た。この貼付粘土中の両側、アーチ部分においては、直径2cm程度の空洞がよく観察でき、その空洞は表面の剥げ落ちた天井

部を通り、左側の壁においても検出された。その位置と状況からみて、おそらく分焰柱の両側天井部に粘土を貼り付け補修を加える際、その骨組みを雑木等で編んだのであろう。この空洞は、この骨組みの本芯痕と考えられる。焼成室天井部においても、同様の手法が採られたことは想像に難くない。

分焰柱部分（E断面）での両壁の立ち上りは、内傾して天井へ向かう。

焼成室

焼成室は、分焰柱奥から床面が急激に下る煙道部までである。平均斜度41度を測る斜面部と分焰柱のすぐ奥の平坦部から成り、主軸長は5.55mを測る。床面の面積は約13㎡、斜面部は上部と下部で傾斜に違いがあり、上部で44度、下部で36度となっている。焼成室の最大幅値は、斜面部と平坦部のほぼ境でとり、2.8mを測る。この部分から煙道へ向かっては、徐々に幅を狭くしてゆき、最上部では最小値1.25mとなっている。

窯内からは焼台が294個出土している。その多くは焼成室の平坦部に転げ落ちていたが、原位置を保つものもその内77個を数えた。焼台は互いにほとんど接して置かれ、床面全体に密に配されていたようである。特に最上部においては、煙道との境にまで並べられており、更に煙道内においても、ひときわ大きい焼台が一つ置かれ、特異なポジションを占めていた。この焼台は、高台の痕跡からみる製品の法量、及び伴出した破片からみて、大型の片口鉢を乗せたものであったことは間違いない。大型の片口鉢は、窯内から少なくとも3個体出土しているが、おそらくこの位置においてのみ重ね焼かれたのであろう。但し、3個体のうち2個体は良く焼けているが、1個体は半焼けの状態である。

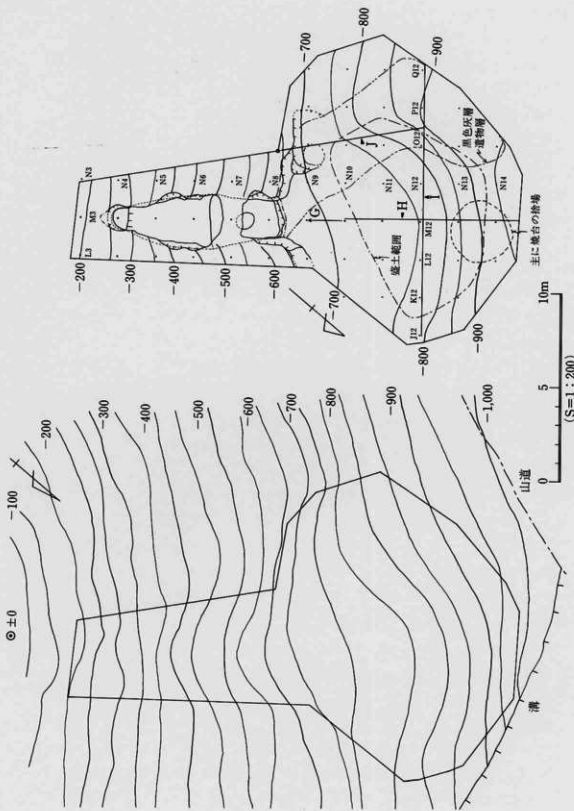
床や壁面には補修用粘土の貼付が認められ、床面の至るところに手指の痕跡が観察された。貼床は、平坦部と斜面部の下部で厚さ5cm前後、上部ほど厚くなり10cmを超える部分もある。この斜面部の上部においては、2-3面の床が検出された。いずれも分焰柱の壁材と同じくスサ入りの粘土を用いている。床面下の地山部分の被熱による変色は、10-15cmの深さに達する。

焼成室の横断面は、半月形を描くようであるが、厳密には壁際で若干レベルアップしている。天井部は、少なくともB断面まではトンネル状に地山を掘り抜く方法を採用しているものと考えられ、地下式窯と呼んでよい。

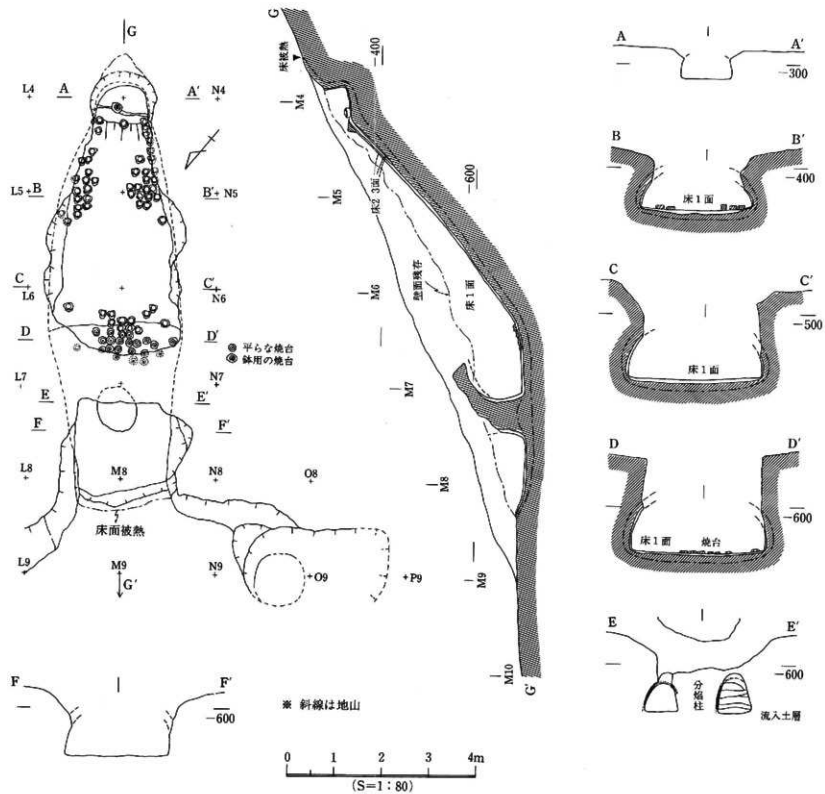
床面に遺存する焼台の形状は、当然その配置された場所の傾斜を反映しており、焼成室平坦部においてはアンパン状の形態である。

煙道部

煙道部は、主軸長1.05mを測る。床面の補修粘土貼付は極めて薄く、地山の凹凸を覆う程度のものである。横断面は垂直の立ち上がりに近いが、若干内傾、床面は縦横断ともにほぼフラットである。煙道端部の立ち上がりは、オーバーハングし、その先はゆるやかに自然地形へと連なる。



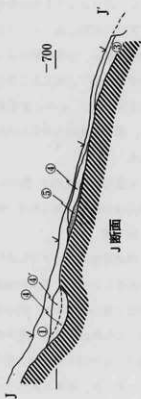
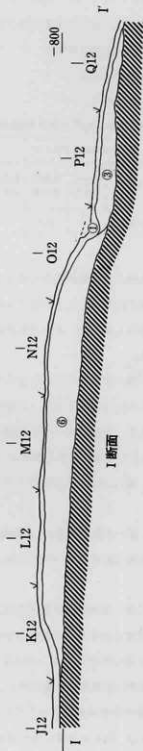
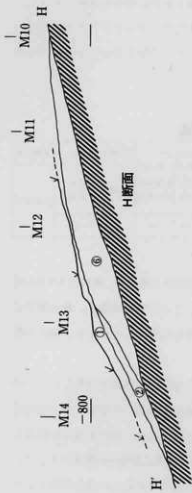
第3図 矢上野2号窯調査前・後測量図



第4図 矢戸上野2号窯実測図

層序

- ① 表土・流土・泥乱層
- ② 暗褐色土 (遺物多含)
- ③ 黑色灰層 (遺物多含)
- ④ 純遺物層 (黒灰色土)
- ④' 純遺物層 (黄褐色土)
- ⑤ 黒灰色灰層 (遺物不含)
- ⑥ 黄褐色土 (腐体混雜粘土)



* 斜線は、旧地表面もしくは地山を表わす。



第5図 矢野上野2号竊灰原断面図 (S=1:80)

煙道部の先端より上方、0.35mに亘っては、被熱により地山面が赤色に変色し硬化していた。この状態から察するに、煙道部は特に地上には煙突状の施設をもち、ぼっかりと穴をあけていただけのようだ。すなわち、穴から出た焰や煙は、オーバーハングした壁を登ってもなお、その先の地をはい、地山面を焼いたのであろう。

窯体各所の計測値は、下表にまとめた。

第1表 矢戸上野2号窯の窯体法量

主軸長 (m)				窯体幅 (床面: m)				傾斜角 (°)		床面積 (㎡)	比高 (m)	主軸方位
全長	燃焼室	焼成室	煙道部	焚口	分焰柱の中央	焼成室最大幅	煙道部の中央	焼成室斜面部	焼成室斜面の平均	焼成室	焚口～煙道部	N-140°-E
9.2	2.6	5.55	1.05	2.1	2.2	2.8	1.1	36~44	41	13	4.5	

前庭部

窯体の前面に広がる窯体掘抜排土の堆積状況から考えて、前庭部は主軸長で、焚口から9.0m程を測る。かなり広い面積が確保されていたことが見てとれよう。この平坦面確保は、地山削平による部分と排土による盛土部分から成るが、それぞれの面積割合は約半々とみてよい。盛土の厚さは、厚いところで70cmを測る。

焚口の右側には、レンズ状に浅く掘られたピットがあり、これを焚口右袖部と呼称した。この種の施設は、山茶碗窯によくみられるものであり、以前に「焼成後の製品の仮置場」や「焼成時の焚口置場」と考えたことがある。本窯においても同様の機能が推定され、最終焼成時に窯出し後仮置きされ、そのまま遺棄されたと考えられる製品が、炭や灰とともに推定380個体出土している。最終焼成産品と考えたのは、窯内出土の片口鉢等と焚口右袖部出土のそれとの接合関係からである。

前庭部の右側では、焚口から発する黒色灰層が、右袖部をも包み込み灰原へと続いていた。この状況は左側ではみられず、燃焼後の灰や炭は、片側方向へのみ廃棄されていた様子がうかがえる。

灰原

前庭部からこの下方にかけては、窯体掘抜き排土や灰、焼土、焼台、失敗品が廃棄され、灰原を形成していた。各々の廃棄位置にはかなりの片寄りが認められる。窯体掘抜き排土は窯体前面に広く盛られており、灰や炭を含む黒色土層は、先に述べたように窯の右下方にのみ広がっていた。この黒色灰層は、碗や皿類等の廃棄品を多量に伴い、灰原から出土した推定3,267個体の失敗品は、そのほとんどがこの灰層の分布域から出土している。窯体の左下方への廃棄は極めて少なかった。尚、窯体の正面下方には、焼土を多量に含む焼台の捨場があり、灰原出土の422個体の焼台の大半がここに集中していた。遺物包含層は、厚いところで40cmを測るが、分層は不能であった。

第2項 遺物 (第6～22図、第2・3表、付表1・2)

窯内、灰原等から碗・小皿・鉢類などの他、窯道具の焼台が多数出土した。胎土は緻密ではあるものの、山茶碗編年の新しい段階に比べると気持ちザラツとした感がある。但し、谷迫間2号窯ほどではない。通常に焼き上がったものは、硬質で灰白色を呈し、自然釉や降灰の焙着をみる。焼きのあまいものは、破断面では乳白色を呈している。

出土遺物の個体数の集計は、出土位置ごとに第3表にまとめた。

碗類

碗、輪花碗、片口碗などがある。いずれもロクロ水挽き成形によるもので、全てに付け高台を有し、高台内には高台装着の際の回転ナデ痕が認められる。体部成形の際の回転糸切り痕も観察できるが、多くはこのナデによりほぼその姿を失っている。拓影で示したものは、比較的回転糸切痕を残すものを厳選している。

碗 (1～56灰原等、57～150窯内等)

灰原と前庭部出土のものを「灰原等」、窯内と焚口、焚口右袖部出土のものを「窯内等」として、一括説明する。

灰原等出土の碗は、そのほとんどが最終焼成品ではないと推定され、2,509個体を算出した。その作りは、大型かつ厚手ではあるが、同じ窯期に属する下切香ヶ洞古窯や下切兎田古窯、谷迫間2号窯の品と比べると、平均的にやや薄く、大きさの割に重量感が薄い。法量は口径15.6～18.0cm、器高5.1～6.2cm、高台径7.4～8.6cmにそのほとんどのものが分布する(第6・8図)。それぞれの中心値を求めれば、口径16.7cm、器高5.7cm、高台径7.9cmになる(第2表)。尚、底部器厚は0.6～0.8cmが一般的で、中心値は0.7cmである。

底部は扁平であるが、内面にはロクロの回転痕が残り、中央の“へソ”に対する指頭での軽いナデは全く見受けられない。外面には、糸切りの後に高台が付けられるが、径が大きく安定感がある。高台は、断面の形状が三角形を呈し、稀に台形状を呈するものもある。その装着は、高台内側を中心としたロクロナデによる。外側ではナデが行き届かず、つぎ目が明瞭であり、直立するものが多い。高台内側に回転糸切痕が残るものには、板目状圧痕を観察できるものもある。

体部は、高台脇から僅かに張りをもって立ち上がり、ゆるやかな丸みを有する。その後、口縁部近くで軽く外反するものがほとんどであるが、丸みをもたず直線的に開くものや、外反しないもの

第2表 2号窯出土碗と小皿の法量平均値(cm)

	出土位置	器高	口径	高台径 (底径)	個体数
碗	灰原等	5.7	16.7	7.9	234
	窯内等	6.0	16.7	8.0	219
小皿 I	灰原等	3.3	9.8	5.1	150
	窯内等	3.2	9.7	5.1	38
小皿 II	灰原等	2.9	10.1	5.1	27
	窯内等	3.0	9.7	5.2	4
無高台	灰原	2.1	9.2	4.3	2

※ 出土位置「等」の区分は、グラフや個体数表の「小計」区分と一致する。

第3表 2号窯出土遺物集計表

遺物	位置	高台完形	片以上	片以上	片以上	片以上	位置	高台完形	片以上	片以上	片以上	遺物	位置	個体数	個体数
焼	窯内	82 (20.5)	43 (6.0)	39 (0.0)	42 (8.0)	136 (27.5)	窯内	25 (9)	6 (4)	6 (3)	2 (1)	焼	窯内	32 (13)	294
	突口	10 (6.0)	10 (2.0)	17 (2.0)	28 (5.0)	29 (9.0)	突口	25 (7)	0	5 (2)	6 (3)	台	灰原	27 (8)	422
	突口 右袖部	159 (28.0)	137 (13.0)	143 (16.0)	173 (26.0)	345 (47.0)	突口 右袖部	27 (10)	8 (3)	2 (0)	0	合計	合計	35 (13)	716
皿	小計	251 (54.5)	190 (21.0)	199 (18.0)	243 (39.0)	510 (83.5)	小計	77 (26)	14 (7)	13 (5)	8 (4)	その他	その他	94 (34)	
	灰原	681 (103.2)	857 (107.2)	1,707 (140.1)	2,173 (172.2)	2,344 (266.4)	灰原	730 (205)	168 (7)	121 (8)	126 (13)	輪花瓶	86以内	4	
	前庭部	33 (5.0)	58 (7.0)	114 (8.0)	257 (30.0)	165 (18.0)	前庭部	40 (16)	18 (7)	26 (15)	18 (0)	片口鉢	4		
具	小計	714 (106.2)	915 (114.2)	1,821 (148.1)	2,430 (202.2)	2,509 (284.4)	小計	770 (221)	186 (14)	147 (23)	144 (13)	高杯	1		
	合計	965 (162.7)	1,105 (135.2)	2,020 (166.1)	2,673 (241.2)	3,019 (367.9)	合計	847 (247)	200 (21)	160 (26)	152 (17)	盤(?)	1		
												仏具	4		

※ 「瓶」欄の()内数字は、(最上段焼成品、窯の可能性のある品)であり、内数である。

※ 「小皿類」欄の()内数字は、最上段焼成品の内数である。

※ 遺物の推定個体数算出は、以下のように行なった。

これは高台残存率をもとにして計算し、小数点第一位を四捨五入するものとする。

以上、片以上、片未満の分類は目分量で行ない、計算上は高台残存率10%を単位として、推定最大個体数、推定最小個体数を算出し、その中点をもちて推定個体数とする。

推定最大個体数の算出方法

片以上の高台残存率の物を、その多数が75%以上の残存率を有すると考え、分母4をもちて残りを除き、個体数を算出し、片以上の物は分母2をもちて除すことにより個体数を算出する。

残りを除くのは、25%近くの高台残存率を有すると考え、分母4をもちて残りを除き、個体数を算出し、片以上の物は分母2をもちて除すことにより個体数を算出する。

推定最小個体数の算出方法

片以上の高台残存率の物を、その多数が75%未満の残存率を有すると考え、分母2をもちて残りを除き、個体数を算出し、片以上の物は分母2をもちて除すことにより個体数を算出する。

また、片以上の物が残る場合は、10%の高台残存率を有すると考え、分母10をもちて除し、個体数とし、片以上の物は分母4をもちて除す個体数とする。

最大個体数

高台完形+高台片以上 + $\frac{-(高台片未満-高台片以上)}{4}$ + $\frac{-(高台片以上)}{2}$

最小個体数

高台完形+高台片以上 + $\frac{-(高台片以上-高台片以上)}{4}$ + $\frac{-(高台片未満)}{10}$

推定個体数

推定最大個体数+推定最小個体数

$\frac{推定最大個体数+推定最小個体数}{2}$

も少数見受けられる。体部の器厚は、口縁端部を除けばほぼ一定であり、下切香ヶ洞古窯等のように口縁部へ向かって急激に薄くなることはない。

窯内等出土のもの（最終焼成品）は、口径16.0～17.7cm、器高5.6～6.4cm、高台径7.6～8.3cmにその大半が分布する（第7・9図）。その中心値を求めれば、口径16.7cm、器高6.0cm、高台径8.0cmになる（第2表）。底部器厚は灰原等のものと変わらない。最終焼成品のうち遺棄された碗は、510個体を算出した。器高の値が特によままとまっている。

全体のプロポーションや調整、圧痕等は、基本的に灰原等出土のものと同じだが、高台装着におけるナデに若干の相違が認められる。灰原等出土のものは、高台外側の回転ナデが付け根まで行き届かないものがほとんどであったが、窯内等出土のものは、高台の両側ともにナデが行き届き、糸切底の縁部にしっかりと装着されている。

碗全体を通して、やや深みのある印象を受け、器厚の均一さや高台内側のナデなどに、丁寧な調整の名残をみるようである。高台には全てのものにモミガラ圧痕が認められる。

尚、148は、底部に串状のもので穿った小孔が2ヶ所に認められ、うち1つは未貫通である。149は、口縁部内外面の成形が他と異なり、外面は内側へ屈曲し、内面にはゆるやかな段を有する。高台の整形も、断面が二等辺三角形を呈し、つぶれていない。モミガラ圧痕もほとんど認められない。150は通常の碗であるが、内面には後述の小型仏器を入れて焼成したと思われる痕跡がある。同様の痕跡は、4個体の碗で確認できた。150は焚口右袖部出土、他は灰原出土である。

輪花碗（152～161灰原、162・163窯内等）

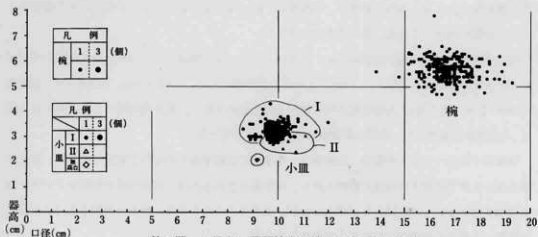
多くて86個体が出土しているが、図示できたものは12個体に止まる。体部の形状や仕上げは通常の碗と変わらないが、155と158を含む4個体は、高台の調整が極めて丁寧であり、内側と外側をきれいにナデている。しかも、モミガラ圧痕はこれらには認められない。高台の断面形は、台形を呈する。窯内出土の163は、焼成時に最上段に置かれたことがわかる唯一のものであり、内面全体に降灰が認められる。推定も含め、5輪花と判断されるものばかりである。

輪花は、幅1cm程度で、ユビでナデ上げて作出される。胎土は、通常の碗と同じである。

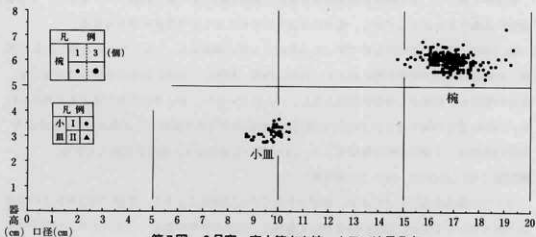
（片口）碗（151）

焚口右袖部と前庭部、及び灰原から4個体出土しているが、接合関係や焼き上り具合から、同時焼成品かつ一括で積まれたものと考えている。いずれも片口部分を欠するが、大ぶりな口径や器壁が厚いこと、高台の調整が至極丁寧でモミガラ圧痕を残さず、高台径も大きく安定感のあるものであること、の理由から、下切兎田古窯出土品に類例を見出し、片口碗と考えている。

151は、口径19.3cm、器高6.5cm、高台径8.7cmを測る。重ね焼きの際には、最上段に置かれたことが、降灰の状態からわかる。また、回転糸切痕は、ナデによりすっかり消されている。



第6図 2号窯 灰原等出土椀・小皿の法量分布



第7図 2号窯 窯内等出土椀・小皿の法量分布

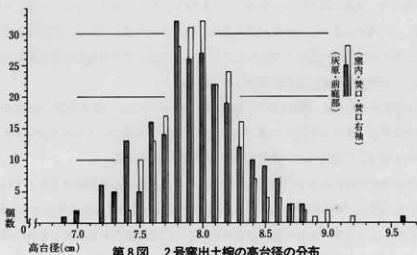
皿類

有高台の小皿と無高台の小皿があるが、有高台のものは、その形状から小皿Ⅰと小皿Ⅱ、及び有稜小皿に分類した。いずれもクロク水挽き成形によるもので、胎土は通常の椀と同じである。推定1,083個体の出土をみる。

小皿Ⅰ（165～201灰原等、202～225窯内等、但し168を除く）

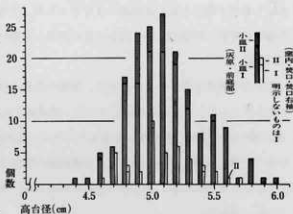
山茶椀編年西坂1号窯期の小椀から系統を引くものであり、同期の多治見市赤坂1号窯や次期の大森迫間洞4号窯では、椀Ⅱとか小椀と呼称されているが、小皿Ⅱとの区別が厳密には不明確なため、ここでは小皿の呼称を用いる。なお、下切兎田古窯における小皿や、下切香ヶ洞古窯における小皿Ⅰもこれと同種である。

小皿Ⅰは、皿類全体の中で約85%を占める。灰原と窯内出土のものでは大差はないので、一括して記述する。法量は、口径9.5～10.3cm、器高2.9～3.5cm、高台径4.8～5.6cm、底部器厚0.6～



第8図 2号窟出土椀の高台径の分布

0.9cmに大半のものが分布する(第6～9図)。その中心値は、それぞれ口径9.8cm、器高3.3cm、高台径5.1cm、底部器厚0.75cmであり(第2表)、下切香ヶ洞古窯の同品と比べて、大ぶりと言える。内面底部には、指頭により軽くユビナデされるものもある。輪花はない。



第9図 2号窟出土小皿の高台径の分布

付け高台には、全てのものにモミガラ圧痕が認められ、重ね焼きのための重みで変形したものや、焙着により一部が欠けたものが多い。高台の装着は、どちらかと言えば内側のナデに重きが置かれており、これに伴い回転糸切痕が消されているものが一般的である。体部の調整に比べ、雑な感否めない。高台は、糸切底の外縁をまたいで装着されるものが目立ち、つぶれているものを除けば、その断面は三角形を呈し、外側はほぼ直立する。

体部は、高台脇からやや丸みをもって立ち上がり、口縁部近くで僅かに外反するものが一般的であり、口縁端部は尖らない。但し、灰原出土のものの中には、胴部外面に稜に近い屈曲を示すものが、ごく稀ではあるが存在する。下切香ヶ洞古窯では両者の共存がみられたが、本窯における小皿Iは、ほぼ一率のようである。

小皿II (226・227灰原等)

山茶碗編年西坂1号窯期の皿から系統を引くものと考えている。下切兎田古窯では認められず、

下切香ヶ洞窯では、皿類の約20%が小皿Ⅱとして区別できた。小皿Ⅰよりも、一見して器高が低く、かつ開く（口径が大きい）ような印象を受け、いかにも「皿」である。窯内等と灰原等の両方から抽出し得たが、計測の後グラフに示してみると、小皿Ⅰとの分布領域は明確には線引きが困難であった。皿類の中では、全体の約13%を占める。

法量は、口径9.6～10.6cm、器高2.6～3.1cm、高台径4.9～5.3cm、底部器厚0.4cmにそのほとんどのものが分布する（第6～9図）。口径と高台径は小皿Ⅰと大差ないが、灰原出土品におけるそれぞれの中心値は、口径10.1cm、器高2.9cm、高台径5.1cmである。

本類の典型は226や227にみるが、断面三角形を呈する高台脇からの体部の立ち上りは、直線的に逆「ハ」字状に開き、胴部中央付近からは口縁端部へ向かってゆるやかに外反する。何よりも、小皿Ⅰにみられるような腰の丸みや張りとは認められない。ほぼ直立する高台と装着の技法はⅠと変わらないが、内側と外側の回転ナデ調整は、やや丁寧な感がある。

このタイプにも輪花を施したものは確認できなかったが、この小皿Ⅱの存在の中にも、白瓷から山茶碗への過渡的要素（初期山茶碗に残る白瓷の要素）を見出したい。

有稜小皿（168灰原）

小皿Ⅰの「稜に近い屈曲を有するもの」とは、法量や高台の作り、屈曲の度合いにおいて異なり、これを有稜小皿とした。1点のみ出土しており、特殊品として扱える。法量は、口径8.9cm、器高2.9cm、高台径4.5cmを測る、やや小ぶりなものである。高台脇から逆「ハ」字状に立ち上がった体部は、中央で明確に屈曲し、やや外反して口縁端部へ向かう。高台の装着も、内側と外側を丁寧な回転ナデにより調整される。モミガラ圧痕が認められ、最上段で焼成されている。

無高台小皿（228・229灰原）

2個体出土しており、回転糸切痕を外側底部にそのまま残す他、数条の板目状圧痕も認められる。器形や法量は、他の小皿と明らかに異なり、高台の剥脱した痕もないことから、器種として存在することは疑いない。前段階、西坂1号窯期に所属する多治見市赤坂1号窯でも出土しており、高台を有するものとは用途が異なる可能性が高い。229は、口径9.2cm、器高2.1cm、底径4.0cmを測る。厚い底部に扁平な作りである。

高杯（231灰原）

灰原から1個体出土しているに過ぎない。同窯期では、下切兎田古窯や谷迫間2号窯、大蔵迫間洞4号窯に類例がある。有台杯と言った方がよいのかも知れない。焼きは極めてあまく、乳白色を呈する。台部と杯部の付け根の径は、7.6cmを測る。

鉢類

片口鉢（164窯内～前庭部）

窯内と焚口、焚口に近い前庭部、焚口右袖部から出土した破片を接合したものが164である。4

個体出土しているが、全て最終焼成時における遺棄品と考えられる。窯体の焼成室の項でも述べたように、煙道内の特異な位置に置かれていた大型の焼台(235)は、共存した(片口)鉢の高台片から、また焼台に残る高台の圧痕から、片口鉢用のものであることは疑いなく、これら4個体はこの位置において重ね焼きされたとみるのが自然である。無論、内面に付着する降灰の状況もこれを示している。胎土は、緻密であるが、通常の椀に比べ石粒を多く含む。4個体のうちの1個体は焼きがあまく、乳白色を呈するも、他はよく焼けている。

164は、口径30.5cm、器高12.2cm、高台径13.9cmを測る。山茶碗編年谷迫間2号窯期には、少量ではあるがどの窯にも見受けられる通有のものである。付け高台は、丁寧な作りかつ安定感のあるもので、端部は丸い。高台内側の回転糸切痕もナデ消されている。高台には、モミガラ圧痕の他、竹科の植物のような葉脈痕が認められる。口縁端部で僅かに外反する以外は、ゆるやかな丸みをもつ体部である。調整は、内側と外面上半部が回転ナデ、外面下半部は回転ヘラケズリ調整される。片口部分は、器面に残る指紋から、外面を指頭で押さえ、内面をナデ上げて作出されているようだ。いわゆるカマギレにより破損している。

その他の器種

盤(230窯内)

窯内からおそらく1個体、盤の破片と考えられるものが出土している。推定口径17.6cmを測る。口縁部は薄手に作られ、直線的に立ち上がる。正位にて焼成されている。

小型仏器(232・233灰原、234窯内)

灰原から3個体、窯内から1個体出土している。鼓形に成形された器台部と、これに乗せられたミニチュアの器部分から成る。器台部の底は、回転糸切痕をそのまま残し、器高3.5~4.0cm、台の上面中央が凹むものが3個体ある。ミニチュアの器もロクロ成形されている。椀を模したものの2点と耳皿を模したようなもの1点でセットとなり、台上に配されている。耳皿を模したようなものは、有高台の輪花杯ともみえようが、器の中央には意図的な凹みがあり、容器や杯でないことを示しているように思え、箸置きとしての耳皿と言つてよいであろう。椀の内面に熔着した資料や、いくつかの椀にみられるその痕跡から、積まれた椀の最上部に置かれて焼成されたことがわかる。胎土は、通常の椀と変わりない。総高は、5.0~5.2cmを測る。軸部も中実である。

下切香ヶ洞古窯においても、この子持器台のような品が出土しているが、その剥離痕からみると、器台上には2点が配されていたようだ。

窯道具類

焼台(235~237窯内)

窯内から294個、灰原から422個が出土している。焼台の個体数の推定は、やや湿った状態での完形品(焼成室斜面部で使用されたもの)が、平均約1.5kgを測ったことから、破損品については

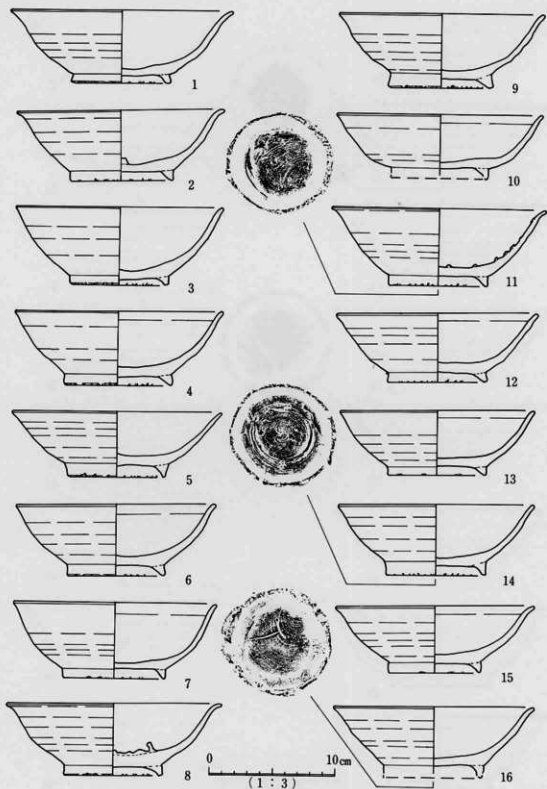
計量により割り出したものである。

図示したものは、いずれも窯内出土の代表的なものである。235は煙道部にただ一つ置かれ、片口鉢の台として使用されたもので、大型品である。鉢の高台痕が顕著であり、なぜか裏側には意図的な凹みが付けられている。236は、焼成室の平坦部に置かれた典型例である。アンパン状を呈している。237は焼成室の斜面部のもので、床面の傾斜を反映し急角度をとっている。山茶碗窯にみられるものの中では大型の部類である。

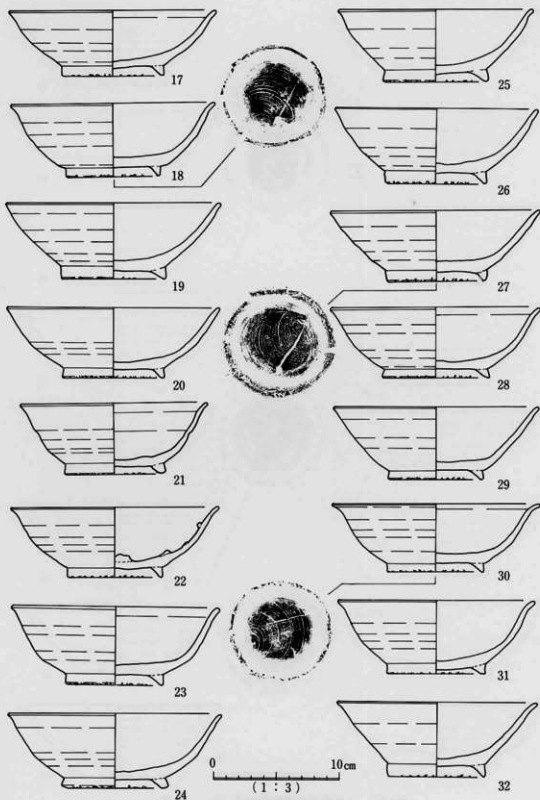
胎土は、大小の礫が混じった砂質粘土にスサが混入されており、被熱硬化しているがもろく、ガサイ。随所に工人の指圧痕が観察され、窯の床面に設置する際に形が整えられたようだ。水平面には、高台の跡とモミガラ圧痕が認められ、床面に設置後すぐにモミガラを敷き、製品が乗せられたことは明白である。また、製品の高台にもモミガラが顕著であることから、窯詰め作業は徐々に進められていったもので、乾燥場も兼ねていたように思える。

蓋(?)

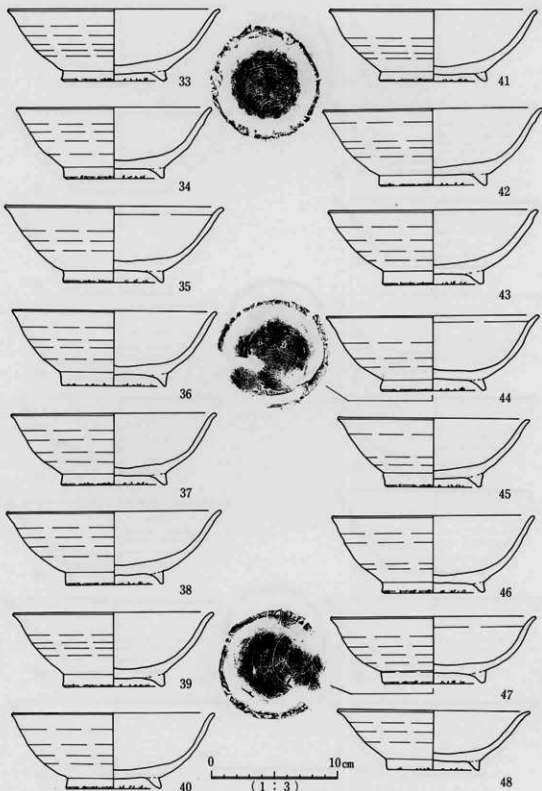
第3表に示した碗の個体数、合計3,019個体のうち、()内に示した9個体に、降灰により外面全体に自然釉や石粒の焙着が認められた。これらの品の内面には自然釉が全くみられず、逆位で焼成されたことは明白である。とすれば、降灰を防ぐための蓋として利用されたのか、或いは焼成中の崩れによる偶然なのか。蓋として利用されたとしても、()内数値で示す最上段焼成品の判別可能数の多さから、ごく稀に利用されたに過ぎない。形状等は、何ら通常の碗と変わらない。



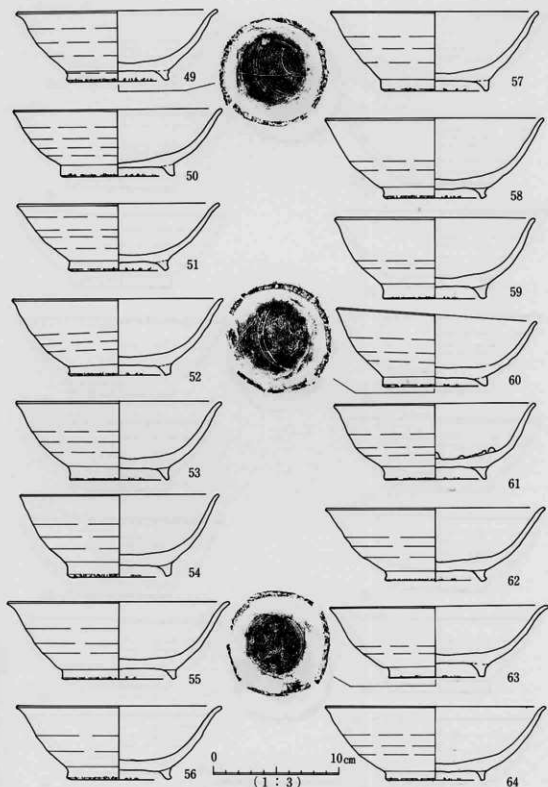
第10图 2号窟出土遗物实测图 (1) <灰原>



第11图 2号窟出土遗物实测图 (2) <灰原>

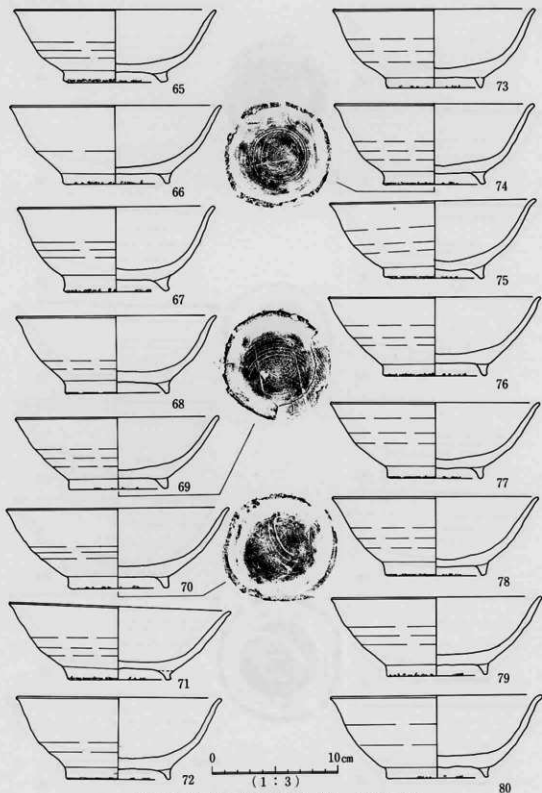


第12图 2号窟出土遺物実測图 (3) <灰原>

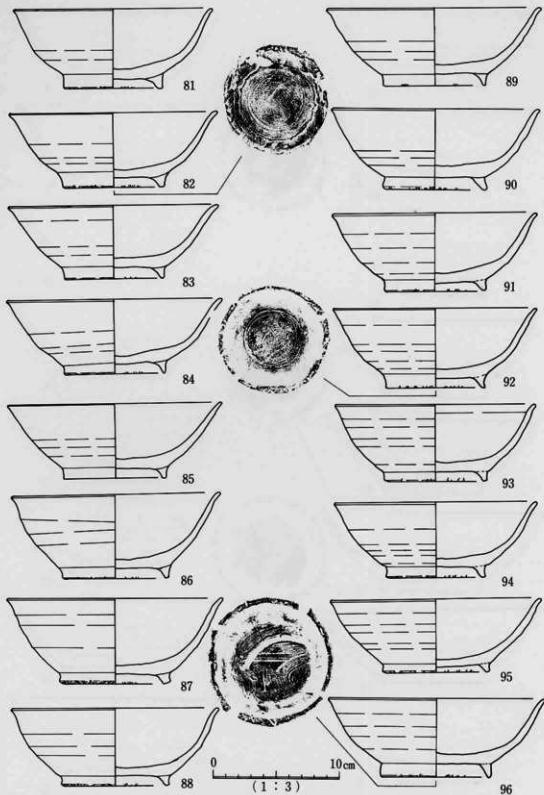


第13图 2号窟出土遗物实测图 (4)

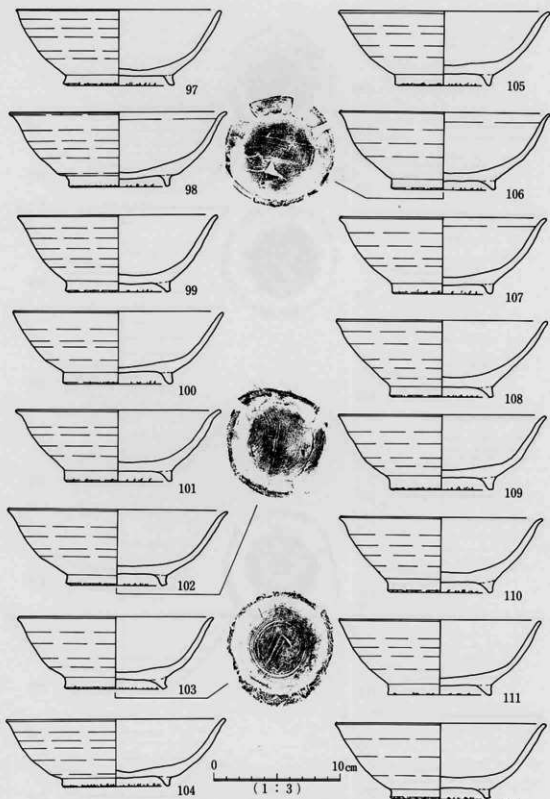
灰原 49~51
 前底部 52~56
 焚口右袖部 57~64



第14图 2号窟出土遗物实测图 (5) < 瓮口右袖部 >

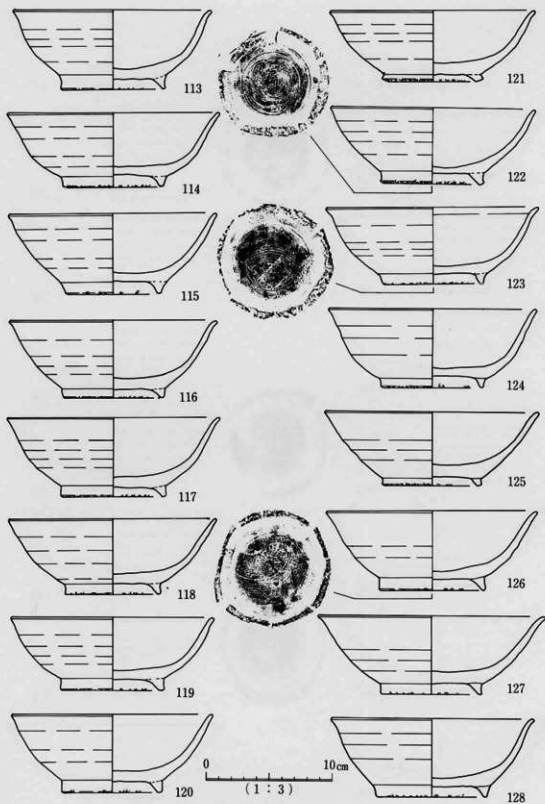


第15图 2号窟出土遗物实测图 (6)
 笑口右袖部 81~87
 笑口 88~90
 窟内 91~96

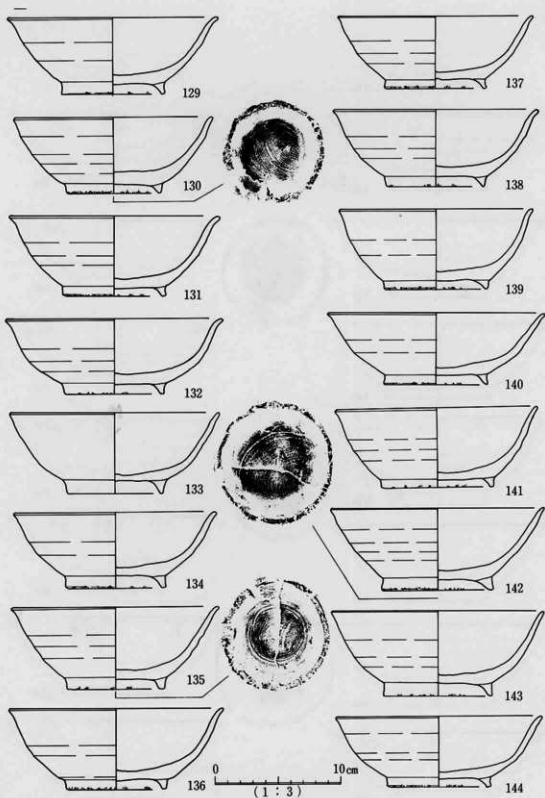


第16图 2号窟出土遗物实测图 (7) <窟内>

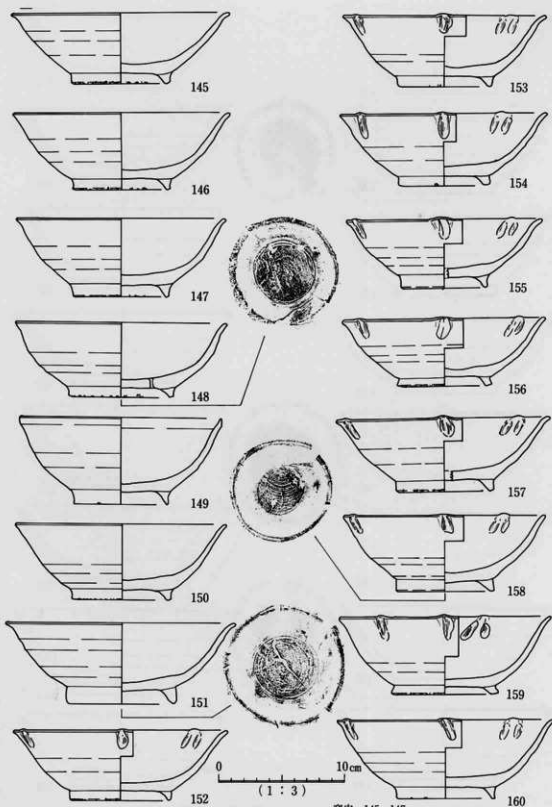
112



第17图 2号窟出土物实测图 (8) <窟内>

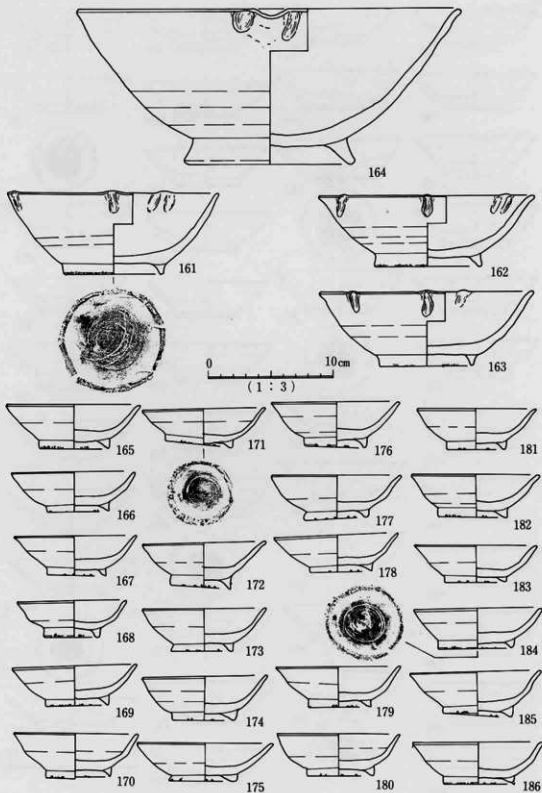


第18图 2号窟出土遗物实测图 (9) <窟内>

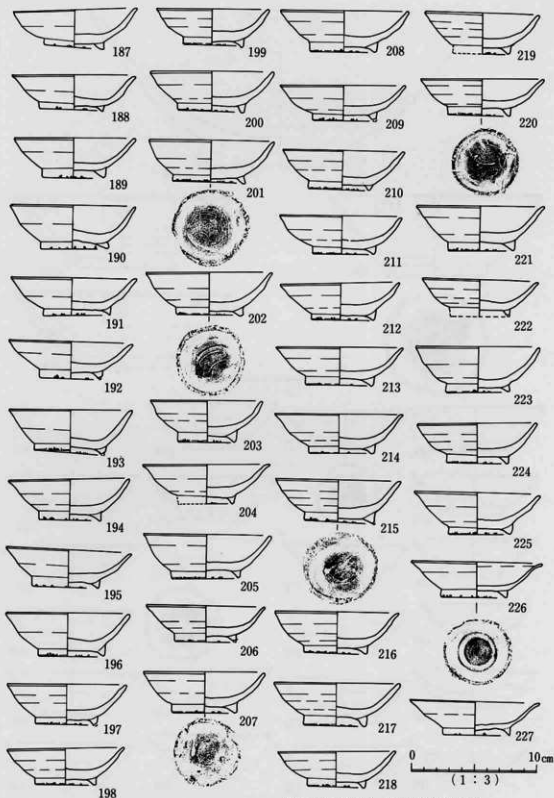


第19图 2号窟出土文物实测图 00

窟内 145~147
 梵口右袖部 148~151
 灰原 152~160

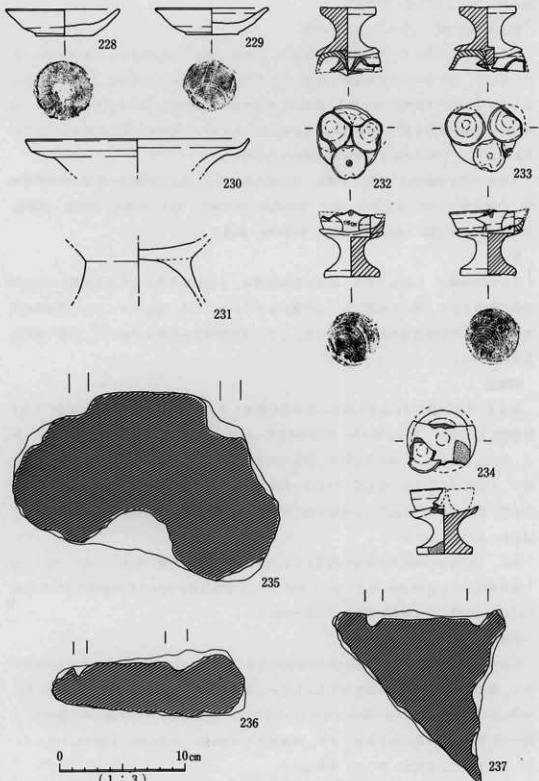


第20图 2号窟出土物实测图 (1) <室内 163-164, 瓮口 162>
 灰原 161·165-186



第21图 2号窟出土遗物实测图 (12)

灰原 187~196·226, 焚口右袖部 202~205
前庭部 197~201·227, 焚口 206~211
窟内 212~225



第22图 2号窟出土文物实测图 (13) < 灰质 228·229·231~233 >
 < 窑内 230·234~237 >

第2節 矢戸上野3号・未完窯

第1項 遺構 (第4表、第23~25図)

3号窯は、2号窯と2-30m程離れて位置し、3号窯に接して窯体掘削途上の遺構が検出されたことから、これを矢戸上野未完窯と命名した。この両窯の立地する西斜面は、23度程の傾斜をもち、焚口付近では標高117mを測る。窯体は、それぞれ等高線に対してほぼ直交して築かれ、現況では一部分が溝状を呈し、天井部の崩落がみられたものの、3号窯の分焰柱に架かる部分ではなおも残存し、灰原を含めて保存状況は極めて良好であった。

3号窯の窯体規模等は、主軸長9.45m、床面最大幅3.05m、焼成室斜面部の床面平均傾斜角40度、主軸方位N-89°-Eを測る。以下、窯体構造、灰原等を、焚口、燃焼室、分焰柱、焼成室、煙道部(以上3号窯)、未完窯、前庭部、灰原の順に記述する。

焚口

焚口の床面幅は、1.95mを測る。床面の被熱部分は、分焰柱側へ向かって下る位置から30cm手前まで検出された。焚口の右側には、2号窯にもみられたように、地山をカットして作出された焚木や窯出しの製品置場が確保されている。ここには黒色灰層の堆積が認められ、少量の遺物も含まれていた。

燃焼室

便宜上、床が被熱しているその境から分焰柱の最奥までとする。主軸長2.6m、分焰柱の手前で床面幅2.3mを測る。床は、焚口から28度の傾斜で一旦下った後、ほぼフラットに分焰柱根元へ続く。窯内出土遺物は、この燃焼室部分と焼成室の平坦部から出土しているが、その数は極めて少量で、13個体のみである。焼台については1個たりとも残されておらず、窯焚きの後の炭や灰も含めて、完全に片付けられている状態であった。当該焼成の後に、即、窯を廃棄する「予定」ではなかったのかも知れない。

床は、ほぼ地山の掘削面を整地し利用しているが、部分的にごく薄い敷土を認めた。床下の赤く被熱硬化している部分は、厚さ10cmにも満たない。分焰柱手前においての両壁面の立ち上りは、ほぼ直立した後、ゆるやかに内傾して天井へ向かう。

分焰柱

分焰柱は、窯体床面が平坦な部分のほぼ中央に位置し、その中心で焚口からは約2.5mの位置にある。表面はよく被熱し、灰色を呈するがもろい。平面形は楕円形を呈し、床面では長径1.0m、短径0.9mを測る。この部分に架かる天井は、ほぼ良好な形で遺存し、分焰柱中央のE断面で、右側の天井高69cm、左側75cmを測る。また、同位置での床面幅は、右側82cm、左側76cmとなっている。正面からの立面形は、逆「八」字形である。

分焰柱は、概ね地山をそのまま掘り残して作出されているが、全体に顕著な粘土の貼付が認

められ、焼成室側では4回(面)の補修面を確認し得た。スサ入粘土の貼付補修は、厚いところで15~20cmもある。尚、2号窯で検出された木芯痕(空洞)は、明確には確認できなかった。

E断面においての壁面の立ち上りは、ほぼ垂直であり、分焰柱奥のD断面では半月形を描くように天井へ向かっている。この部分の床はフラットであるが、奥の根元より90cm行った所で、焼成室の床面傾斜は急激に強くなる。

焼成室

焼成室は、分焰柱奥から床面が急激に下る煙道部までである。平均斜度40度を測る斜面部と分焰柱のすぐ奥の平坦部から成り、主軸長5.4m、床面積は約13㎡を測る。斜面部は、上へ行くほど傾斜が強くなるが、下部の平均35度、上部では44度を測り、梯子なしではとても登れない。焼成室の最大幅は、C断面よりやや下で計測され3.05m、これより上方へはゆるやかに狭くなり、全体の形状は舟形を呈している。焼成室の最上部では、最小幅値1.25mを測る。

床や壁面には、スサ入の粘土による貼付補修が認められる。但しその補修は極めて薄く、床では部分的に2回(面)、壁も2回(面)が確認できたに過ぎない。厚さは、平坦部と最上部の床で5cm程度、通常は2cm程度である。前述のように、床面に残る焼台は皆無であった。床、壁ともに被熱硬化しており、上から灰色→白色→黄色→赤色を呈する。赤色を呈する部分が地山部分に当たり、床面下10~18cmが被熱変色している。

斜面部の横断面は、床はフラットではなく、両壁際へ向かってレベルアップしている。天井部は、B断面付近までがトンネル状に地山を掘り抜く方法を採用したものと考えられ、地下式窯と呼んでよい。

煙道部

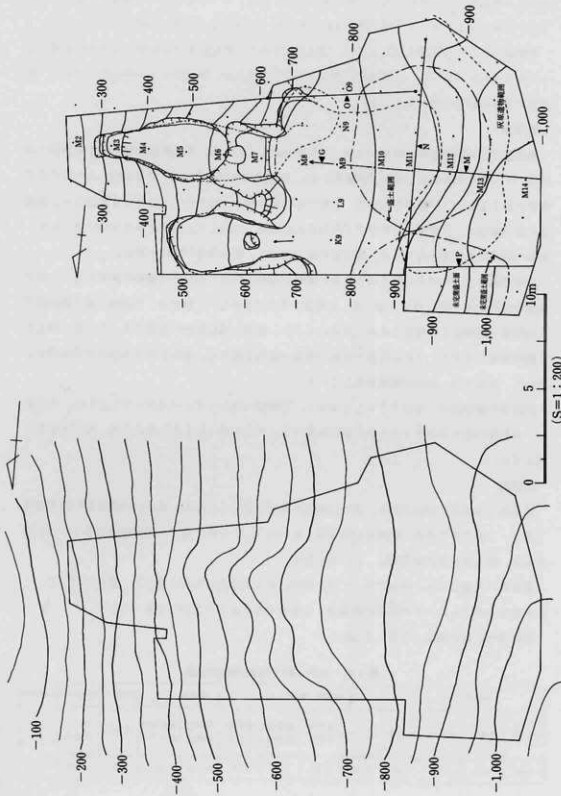
煙道部は主軸長1.45mを測る。床には粘土の貼床が認められたが、地山の凹凸を覆い隠す程度で薄く、1面のみである。横断面は若干開くものの「L」字形に近く、縦断面の立ち上りは74度もある。煙道部中央の床面幅は、1.15mを測る。

煙道部の先端より上、49cmに亘っては、被熱により地山面が赤色に変色し、硬化していた。この状態から察するに、この部分の構造は、2号窯で考えたものと同じであろう。

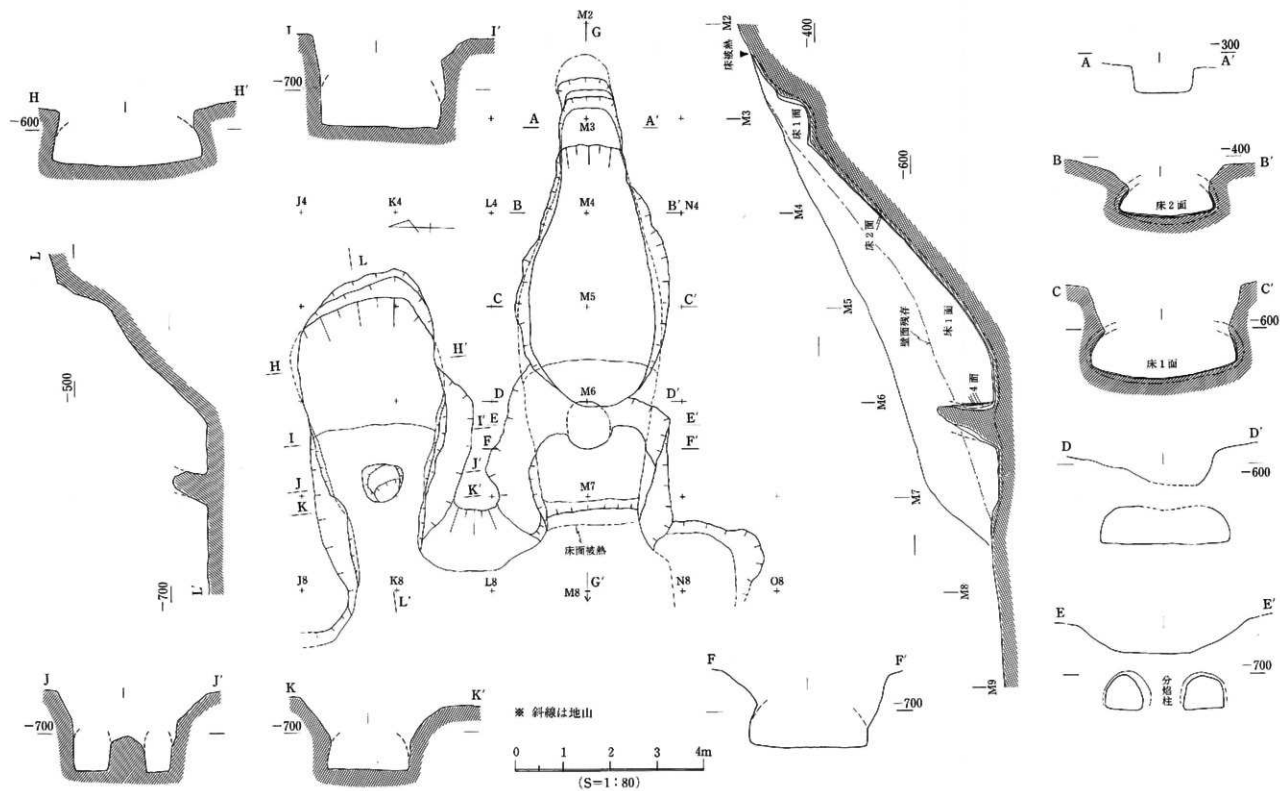
窯体各所の計測値は、下表にまとめた。

第4表 矢戸上野3号窯の窯体法量

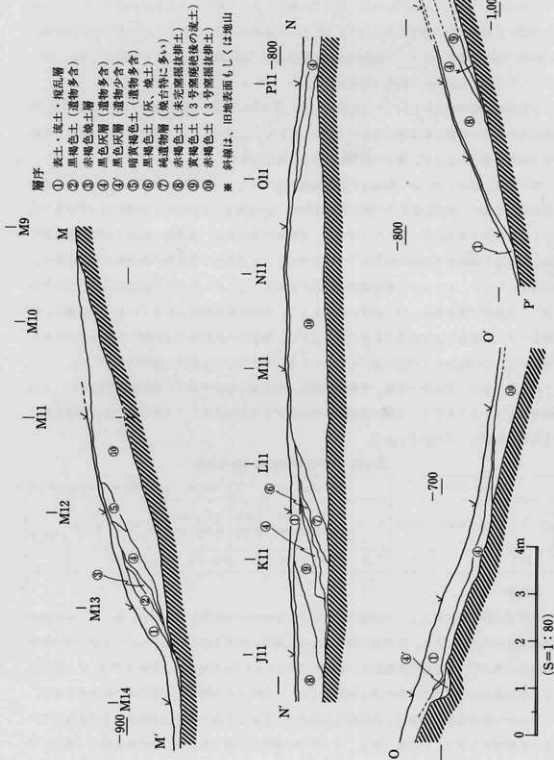
主軸長(m)				窯体幅(床面:m)				傾斜角(°)		床面積(㎡)	比高(m)	主軸方位
全長	熱成室	焼成室	煙道部	焚口	分焰柱の中央	焼成室最大幅	煙道部の中央	焼成室斜面部	焼成室斜面部の平均	焼成室	焚口~煙道部	N-89°-E
9.45	2.6	5.4	1.45	1.95	2.55	3.05	1.15	35~44	40	13	4.75	



第23図 矢野上野3号・未定調査前・後測量図



第24図 矢野上野3号・未完遺跡測図



第25図 矢戸上野3号黒川原断面図

矢戸上野未完窯

3号窯の北(左)側に隣接しては、現況での観察により比較的大きな凹みが認められ、3号窯に付属する施設が別の窯体の存在が予想された。3号窯の調査と併行してこの部分の調査を進めた結果、窯体構築におけるその掘削途上で廃棄された「未完窯」であることが確認できた。従って、この「窯」で焼かれた製品は存在しない。

未完窯の掘削中絶時におけるの主軸長は5.8m、最大幅3.15m、主軸方位N-81°-Eを測る。焼成室途中までの掘削で放棄されたものであり、焚口から上方へトンネル状に掘り進む途中、天井部の崩落に会ったことが、覆土の観察から容易に推定できた。

焚口幅は1.35mと狭いが、無論これは完成前の姿である。分焰柱は、やはり地山掘り残しの手法を採っており、分焰柱奥までの燃焼室主軸長は1.9mを測る。2号窯や3号窯に比べてかなり短かく、谷迫間2号窯に近い値となっている。分焰柱の基底部は、直径80~90cmの不整円形を呈する。燃焼室と焼成室平坦部の床面はフラットであり、2号窯や3号窯等の同窯期のものに比べ、傾斜をもたない。おそらく、窯体構築の仕上げ段階に、こういった部分の調整が行われたのであろう。焼成室の傾斜部は、31~45度の傾斜をとり、平均斜度は40度となっている。横断面は、燃焼室のJ・K断面ではほぼ直立する壁の立ち上がり、焼成室のH断面では内傾した立ち上りをみせている。ほぼ仕上りに近いものと考えられる。覆土中からも若干の遺物が出土した。

以上みてきた、分焰柱の位置、燃焼室の構造、焼成室の傾斜角等は、未完窯ではあるが、その焼成品をみるまでもなく、美濃山茶碗編年の谷迫間2号窯期のそれにほぼ一致する。本未完窯の各所の計測値は、下表にまとめた。

第5表 矢戸上野未完窯の窯体法量

主軸長 (m)			窯体幅 (床面 : m)				傾斜角 (°)		床面積(m ²)	比高(m)	主軸方位	
全長	燃焼室	焼成室	煙道部	焚口	分焰柱の中央	焼成室最大幅	焼成室最大幅	焼成室斜面部	焼成室斜面の平均	焚口~煙道部		
(5.8)	1.9	-	-	1.35	1.95	3.15	-	(31~45)	40	-	-	N-81°-E

前庭部

3号窯の窯体掘抜排土と、未完窯のそれとは、平面的には重複していない。従って、3号窯の前庭部復原は可能である。3号窯の掘抜排土は、窯体の前面を中心に広がっているが、その堆積状況から考えて、3号窯の前庭部は、主軸長で焚口から8.8m程を測る。主軸上では、M9杭付近から掘抜排土による盛土で平坦面を作出しており、削平による部分とは面積的に約半々である。

焚口から発する黒色灰層は、前庭部の右側のみへ広がっており、焚口右袖部へと行き着いている。前庭部から出土した遺物(製品)は、推定41個体と少量であるが、最終焼成品の一部として考えておきたい。焼台の出土はなかった。

未完窯の掘抜排土は、窯体の前面より左側に堆積の中心があり、既に作出されている3号窯の前庭部を利用し、更に左側へ平坦面を広げて面積確保を行おうと意図した節がある。

灰原

前庭部からこの下方にかけては、両窯の掘抜排土や灰、焼土、焼台、失敗品が廃棄され、灰原を形成していた。11列における灰原横断面の土層観察によれば、下から地山→3号窯排土→3号窯遺物層→自然堆積土→未完窯排土→表土、の順に認められ、未完窯は3号窯の廃絶後に築かれようとしたことが明瞭である。しかも、遺物層と未完窯排土の間に、雨水による自然堆積土が厚さ30～40cmも認められ、未完窯の掘削が3号窯廃絶後かなりの時間を置いていることが推定できる。自然堆積土（9層）と判断したのは、この土層が黄かっ色を呈し、きめ細かくやわらかい土質で、遺物や灰、焼土を含まない事実からであり、表土直下の流土層と同様の状態が認められることに基づいている。厚さ30～40cmという自然堆積の時間は、想像では数年分というよりも、10年以上のような気がする。窯焚きのための立木伐採後、自然にまかせた植生の回復（窯焚きに利用できるよう雑木の成長）を待って同所に築窯を試みたと仮定すれば、やはり10～30年の時間を考えたほうが良さそうである。

灰原の保存状況も極めて良好であったため、焼台や失敗品の出土量は膨大なものであった。その内訳は、椀や小皿の失敗品が推定5,885個体、焼台1,337個である。3号窯の遺物を含む土層は、M列の中軸断面において4層に分層できた。

第2項 遺物（第26～46図、第6・7表、付表3・4）

灰原、窯内等から、椀・小皿・鉢類などの他、窯道具の焼台が多数出土した。胎土は緻密ではあるものの、山茶碗編年の新しい段階や、白瓷に比べると気持ちザラッとした感がある。但し、谷迫間2号窯の遺物ほどではない。通常に焼き上がったものは、硬質で灰白色を呈するが、鼠色に焼き上がったものや、焼成不足で赤褐色に焼き上がったものも目立つ。内外面には、自然釉の付着や石粒等の熔着をみる。

出土遺物の個体数の集計は、出土位置ごとに第6表にまとめた。

椀類

椀、輪花椀、片口椀、小椀、片口小椀などがある。いずれもロクロ水挽き成形によるもので、全てが付高台を有し、高台内外には高台装着の際の回転ナデ痕が認められる。体部成形の際の回転糸切痕も観察できるが、多くはこのナデにより消えている。拓影で示したものは、このナデの痕跡と比較的回転糸切痕を残すものであり、合わせて板目状狂痕も示している。

椀（1～84灰原右側、85～208灰原左側、但し206は窯内）

窯内出土の椀は僅少であり、ここでは主に灰原出土のものについて、一括して説明する。

椀は、推定で合計4,659個出土している。その多くは、窯に向かって右側の灰原から出土したものである。但し、この中には最終焼成品も混じているはずである。その作りは大型ではあるが、2号窯の品と同様に、同じ窯期に属する他窯（下切香ヶ洞古窯や下切兎田古窯など）と比べて器厚はやや薄く、大きさの割に重量感を感じない。

法量は、口径15.5～17.3cm、器高5.0～6.1cm、高台径7.4～8.1cmに多くのものが分布する（第26・27図）。それぞれの中心値を求めれば、口径16.4cm、器高5.6cm、高台径7.8cmになる（第7表）。尚、底部器厚は0.6～0.9cmが一般的であり、中心値は0.8cmである。同様に、胴部中央付近の器厚は0.6cm程度を測る。

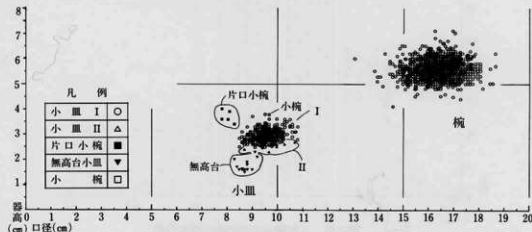
体部は、高台脇から僅かに張りをもって立ち上り、ゆるやかに内湾して上部へ向かう。その後、口縁近くでは軽く外反するものが一般的である。その器形は、2号窯のそれと極めて似かよっており、法量の平均値にもよく示されている。

内外の器面は、ロクロナデによりよく調整されている。体部は、回転糸切りによって切断され、その後、ロクロ回転を利用して高台が装着されるが、特に内側をよくナデている。この調整により、回転糸切痕のかなりの部分が消されることになる。糸切痕が比較的残っているものの多くには、板目状圧痕も観察できる。高台の断面形は、ほとんどが三角形を呈し、外側は直立する。但し、重ね焼きの際の重みでつぶれたものは、当然「ハ」字状に開いている。端部のモミガラ圧痕は顕著である。内面底部は平らであり、ロクロ回転の中心がよくわかる。この中心に対しての軽

第7表
3号窯出土椀類と小皿類の法量平均値 (cm)

	出土位置	器高	口径	高台径 (底径)	個体数
椀	灰原等	5.6	16.4	7.8	936
	窯内等	6.0	16.3	8.2	3
小皿 I	灰原等	3.0	9.6	5.1	310
	窯内、前庭部	3.3	9.0	4.8	2
小皿 II	灰原等	2.7	9.7	5.0	30
無高台	灰原	1.9	8.8	4.3	14
片口小椀	灰原	3.7	8.0	4.1	7

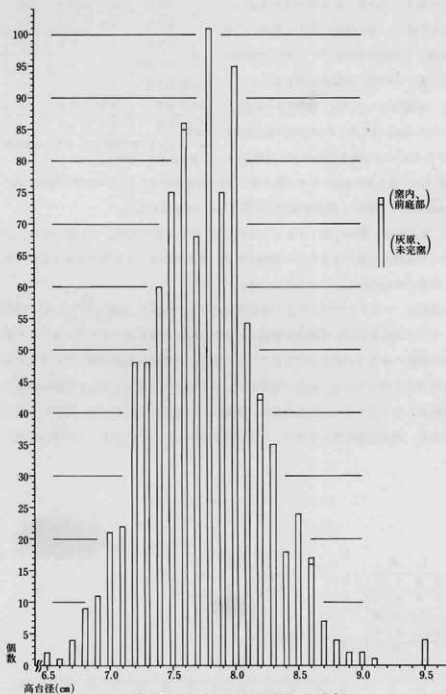
※ 出土位置「等」の区分は、グラフや個体数表の「小計」区分と一致する。



第26図 3号窯灰原出土椀・小皿類の法量分布

いユビナデは、ほとんど見受けられない。

窯内出土のものは、1点しか(206)図示できなかったが、11個体を通じて、特に高台の成形、装着に丁寧さを欠いている。



第27図 3号窯出土土椀の高台径の分布

また、碗の内面底部に、後述する小型仏器等を置いて焼成した痕跡を残すものがある。これは、自然釉の付着によって明瞭にそれとわかり、図に示す32～34、81、207～210の碗にはこれが確認できる。12個体の碗においてこの痕跡がみつかった。小型仏器等の「等」は、平高台の小皿や小型の特殊品を指す。尚、灰原からは11段の重ね焼きを示す熔着資料が、窯内からは少なくとも8段の重ね焼きを示す熔着資料が出土している。

輪花碗 (212・213灰原右側、214～217灰原左側)

灰原の右側と左側からそれぞれ5個体、合計10個体以内が出土している。全て5輪花、もしくは5輪花と推定される。これらの輪花碗は、輪花の施文法的には2種類、高台の成形・調整からも2種類に分類できる。

1つは、幅0.8cm、長さ1.8cm程度の比較的是っきりとした輪花を施すもので、8個体ある。8個体中4個体が、口縁部から高台までを残すものであるが、そのうち3個体は、高台の装着、調整が極めて丁寧であり、モミガラ痕は全く認められない(213、216、217)。他の1つは、幅0.8cm、長さ1.2cm程度の短い輪花を施すもので、その輪郭は明瞭でなく、指頭で押さえた程度のものである。前者との手法の違いははっきりしている。2個体にみられるが、いずれも高台の装着、調整は雑で、モミガラ圧痕が著しい(214、215)。214は、最も大ぶりであり、口径17.9cm、器高6.2cmを測るが、他は通常の碗と器形、胎土も含めて変わらない。2号窯に比べて出土量は少ないが、前者の手法は2号窯のものに酷似する。

片口碗 (218・219灰原左側)

やや大きめのもの(218)と大ぶりのもの(219)が2個体出土している。219は、重ね焼きの最上段で焼成されたことを示す降灰が内面全体に認められるが、218には内面に小物(小皿か)を置いた痕跡が認められる。いずれも胎土は通常の碗と変わらない。

218は、口径17.1cm、7.0cm、高台径8.5cmを測る。高台の調整は丁寧で、モミガラ痕は認められず、「ハ」字状に立つ。高台脇からの体部の立ち上がりは直線的で、逆「ハ」字状に開く。高台に比べ、体部外面の仕上げは雑であり、回転ナデの痕が著しく残る。片口部は、僅かにつまみ出しただけであり、突出度は小さく雑である。高台内側には、回転糸切痕とスノコ(板目)状圧痕が残っている。この種の器形は初見である。

219は、口径21.0cm、器高8.7cm、高台径9.7cmを測る。付高台は丁寧で安定感があり、「ハ」字状に開く。体部の立ち上りは、218とは異なり、丸味を有する。胴部外面の下半部には、ヘラケズリが施されている。高台内側は、高台装着時の回転ナデにより、回転糸切痕等はすっかり消されている。片口部分は、幅3.5cm程度を約1cm突出させる。突出の方法は、右手の親指の腹と中指の背を外側に当て、人差指の腹で内側から押し出したものと考えている。同時期の窯址では一般的にみられる器形である。

小碗 (223灰原左側)

1個体のみ出土している。いかにも小椀であり、小皿Ⅰとは明瞭に区別できる。口径9.7cm、器高3.8cm、高台径5.4cmを測る。重ね焼きの際に最上段に置かれたものであり、内面全体に降灰等の焙着が見られる。高台の装着は丁寧で、内外を回転ナデする。端部は丸みがあり、モミガラ圧痕はない。高台内には、僅かに回転糸切痕が残る。胴下部は張りもち、大ききの割に深みを感じさせる。器形的には、美濃白瓷編年の最末期、明和27号窯期の深椀の系統とも考えられるが、山茶椀最初期の西坂1号窯期には見当らず、その出土数1個体からみても、おそらくは特殊品と考えてよいであろう。胎土に異なった点は気づかない。

片口小椀（220灰原右側、221・222灰原左側）

灰原から8個体出土しているが、図示できたものは3個体のみである。第26図に5個体の法量分布を示したが、それぞれゆがみがあるものの、ほぼまとまりをみせた。法量の平均値は、口径8.0cm、器高3.7cm、高台径4.1cmである。付け高台と体部の調整は丁寧である。高台は高めに作られ、上げ底の感がする。モミガラ圧痕は認められず、回転糸切痕は、高台の剥がれた部分以外全く見えない。体部はやや丸みをもち内弯気味であるが、口縁部では外反する。鼠色に焼き上がったものが多く、胎土はより緻密な感じがする。ちょうど片口部分で破損しているものばかりで、全体はつかめないが、幅1.2cmを0.5cm程突出させている。白瓷末期から山茶椀初期には類例は見当らないが、小椀と同様に深椀の器形に似る。

皿類

有高台の小皿と無高台の小皿、及び耳皿がある。有高台の小皿は、その形状から小皿Ⅰと小皿Ⅱに分類した。いずれもロクロ木挽き成形によるもので、胎土は通常の椀と同じである。有高台の小皿は、推定1,280個体の出土をみる。小皿ⅠとⅡの分類基準は、2号窯と同じである。

小皿Ⅰ（225～264灰原右側、265～329灰原左側、330前庭部、331窯内）

山茶椀編年西坂1号窯期の小椀の系統を引くものと考えられる。2号窯同様の理由から、ここでは小皿の呼称を用いる。

小皿Ⅰは、皿類全体の中で約90%を占める。ほとんどが灰原出土のものであるので、まとめて記述する。法量は、口径9.0～10.2cm、器高2.7～3.3cm、高台径4.7～5.5cm、底部器厚0.6～0.9cmに大半のものが分布する（第26・28図）。それぞれの中心値（平均値）を求めれば、口径9.6cm、器高3.0cm、高台径5.1cm、底部器厚0.75cmであり（第7表）、下切香ヶ洞古窯の同品と比べて大ぶり、前節の2号窯のものに比べてやや小ぶりと言える。輪花を施すものは皆無であり、小皿Ⅰの中には、外面胴部中央付近に稜に近い屈曲を示すものも、ごく少数（約4%）含まれる。

器形は、2号窯の小皿Ⅰによく似ており、高台脇からやや内弯して立ち上がった体部は、中央付近より上で僅かに外反するものが多い。口縁端部は丸みをもつ。内外面ともにロクロナデ調整され、いわゆる「スリケシ痕」も内面底部には見当らない。

付け高台は、断面三角形で、外側は直立するものが一般的である。高台装着時における回転ナデにより、その多くは高台内側に回転糸切痕は残らない。かすかにこれを観察できるものにあつては、合わせて板目状圧痕も認められるものがある。全てのものにモミガラ圧痕を残す。

尚、331は唯一窟内出土のものであるが、先述の「稜に近い屈曲を有するもの」の典型である。また、灰原からは、少なくとも10段の重ね焼きを示す焙着資料が出土している。

小皿Ⅱ (332~339灰原右側、340~346灰原左側)

山茶碗編年西坂1号窟期の皿の系統を引くものと考えている。典型例をみればそれとわかるが、厳密には小皿Ⅰとの区分は難を極める。皿類の中で占める割合は、下切香ヶ洞古窯で約20%、前節の2号窟では約13%、本窟においては約9%である。小皿Ⅰよりも一見して器高が低く、浅いような印象を受け、334~337などを典型とする。口径も、小皿Ⅰより大きいような印象を受けたが、グラフ上に法量分布を示してみると、後者は目の錯覚であった。

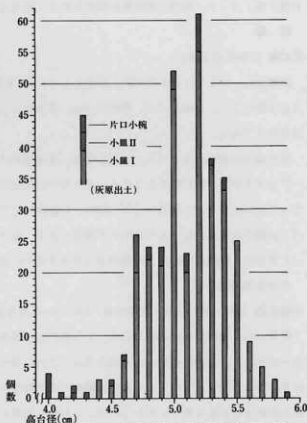
法量は、口径9.0~10.2cm、器高2.5~2.8cmにほとんどのものが分布し、高台径や器厚はⅠと変わりない(第26・28図)。それぞれの平均値は、口径9.7cm、器高2.7cmである(第7表)。

回転糸切底の外縁、もしくは内側に付けられた高台は、断面三角形を呈し、外側はほぼ直立する。体部の立ち上がりは直線的で、逆「ハ」字状に開き、丸みをもたない。多くは、胴部中央より上で僅かに外反する。高台にはモミガラ圧痕が顕著であるが、高台の剥離したところ以外では、回転糸切痕の観察が困難なほど、高台内は回転ナデ調整される。

このタイプにも輪花を施したものは見当たらない。

無高台小皿(347・348灰原右側、349~360灰原左側)

16個体が灰原から出土している。外面底部に回転糸切痕をそのまま残し、板目状圧痕を観察できるものも多い。360は、その形状が小皿Ⅰの体部に似るが、他は、明らかにこれが一つの器種として存在することを示す。扁平な作りであり、いかにも小皿と呼べる。計測可能な14個体の



第28図 3号窟出土小皿等の高台径の分布

平均値は、口径8.8cm、器高1.9cm、底径4.3cmを算出する。

これらの中で、少なくとも10個体は、重ね焼きの際に最上段に置かれたものであり、うち2個体は、伏位に置かれたような砂粒の焙着状況を示している。この種の小皿が一括して重ね焼きされたとすれば、焼成個体数の実数は、10倍以上とみてよいであろう。

底部から逆「ハ」字状に立ち上った体部は、中央付近で、口縁端部に向かって軽く外反する。端部は丸みを有する。348の内面底部には、唯一「×」のへら記号が刻まれている。

この器種が、山茶碗編年浅間窯下1号窯期の小皿（無高台）に直接つながるものであるのかは不明だが、2号窯でもみられたことから、谷迫間2号窯期の器種構成の一員として考えていかなければならぬだろう。

耳 皿 (366灰原右側)

箸置き用と考えられる、いわゆる耳皿が、灰原から1個体出土している。全体の成型を欠するが、口径は長径6.8cm、短径4.7cmに復原できる。ロクロ水挽き成形の後、回転糸切りにより離し、指頭で相対する2ヶ所をつまみ、折り曲げている。やや焼きが甘く、外面底部は糸切痕をそのまま残す他、スノコ（板目）状圧痕が認められる。胎土は通常の碗や小皿と同じである。

鉢 類

片口鉢 (224灰原左側)

灰原から、少なくとも4個体以上が出土している。224は、片口部分を欠するが、片口鉢であることは疑いない。口径31.0cm、器高11.9cm、高台径12.4cmを測る。谷迫間2号窯期における通常の大きさである。

付け高台の端部は丸く「八」字状に開き、安定感がある。高台は丁寧に装着され、回転ナデとヘラケズリが高台内に施されている。モミガラ圧痕は認められない。体部は、下部にやや張りをもって立ち上がるが、中央付近は直線的、口縁部付近ではやや外反する。外面下部に回転ヘラケズリが施される以外は、全て回転ナデ調整である。胎土は特に変わらない。

片口部は、幅約4.5cmを1.5cm程外方へ突出させている。成形直後に指頭で作出されたようだ。

その他の器種

小型仏器 (361・363・365・灰原左側、362・364灰原右側)

灰原から3個体以上出土している。2号窯の出土例から、これと同形の品であることは間違いないであろう。鼓形に成形された器台部と、これに乗せられたミニチュアの器から成る。364は、中央が凹んでおり、ミニチュア品の剥離痕が3ヶ所認められる。363～365の底面は、いずれも回転糸切痕をそのまま残す。361・362は、これから剥離したミニチュア品である。364は、器高3.9cm、底径4.4cmを測り、2号窯でみられたものと同程度の大きさである。碗の項でも述べたように、これらは、積み重ねられた碗の最上部に1点づつ置かれて、焼成されたものである。

窯道具類

焼台(367~369灰原右側)

灰原から推定で1,337個出土している。窯内からは1個たりとも出土しなかった。焼台の個体数の推定は、現場においてやや湿った状態で完形品(焼成室斜面部で使用されたもの)が、1個平均約1.7kgを計ったことから、破損品については計量により割り出したものである。図示したものは、それぞれの典型例である。

367は、焼成室斜面部において椀用に使われたものである。置かれた場所の床の傾斜角度を反映し、急勾配である。368は、同所において小皿Ⅰ・Ⅱ用に使われたものである。各々の高台の痕が顕著に残り、その径から両者の見分けは平易である。369は、焼成室平坦部において椀用に使われたものである。分焰柱付近にまでびっしりと配されたのであろう。それぞれの焼台は、山茶椀窯にみられるものの中では大型の部類に属する。

胎土は、大小の礫が混じった砂質粘土に、スサが混入されており、被熱硬化しているがもろく、ガサイ。おそらく、土岐砂礫層の土をそのまま練り、藁等の植物茎を切って混ぜたのであろう。随所に工人の指圧痕が認められ、窯の床に置くと同時に成形されたようだ。また、水平面には高台の痕に重なって、モミガラ圧痕が顕著である。焼台の配置→モミガラを敷く→製品を重ね置く、の工程は、さほど時間を置かず処理されたようである。

蓋(?)

第6表に示した椀の個体数、合計4,659個中、()内に記した55個体に、外面全体に自然釉等の焙着が認められた。窯道具としての蓋の役割も考え得る。しかし、器形や調整等は、何ら通常の椀と変わらない。

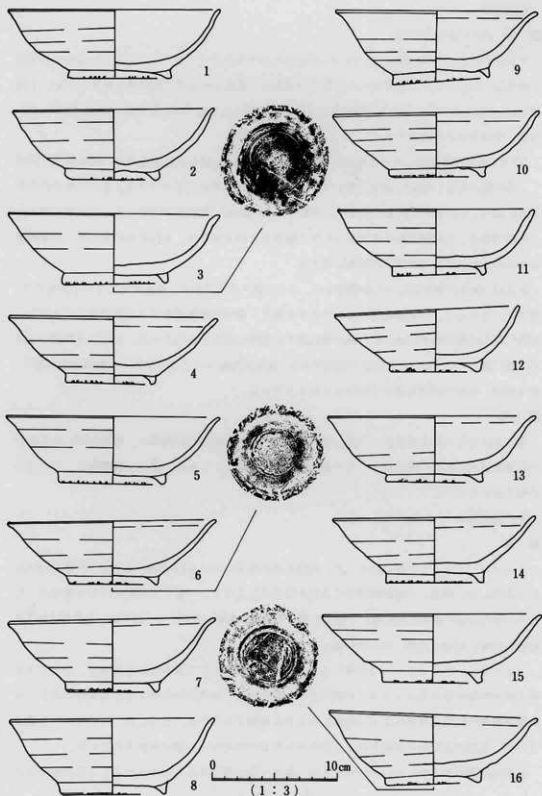
その他の遺物

岩石

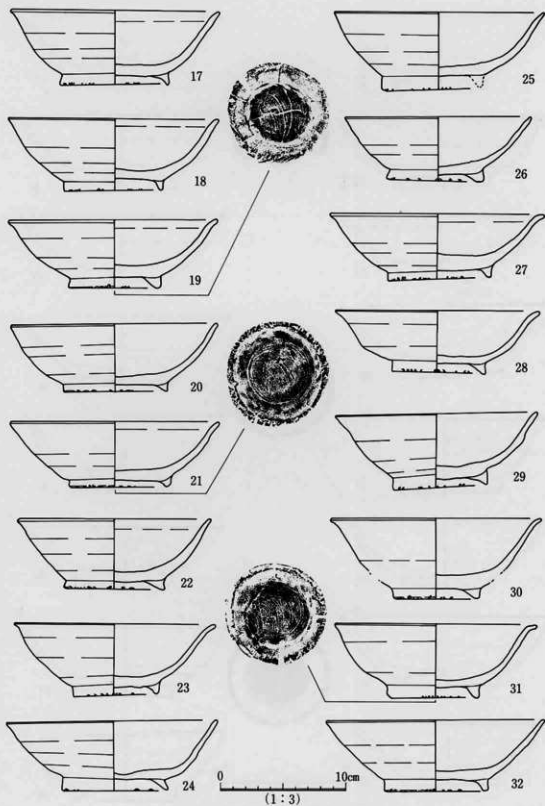
オーソコーツァイトと呼ばれる、よく円磨された礫(8.2×6.0×5.0cm)1点を、灰原付近において表採した。無論、土岐砂礫層中では見かけたこともなく、一見して異和感のある礫であったため、市内在住の東俊之氏を通じて鑑定を頼った結果、名称が判明した。以下は、益富壽之助『原色岩石図鑑』保育社1990からの引用である。

「オーソコーツァイト …(中略)… この岩石は岩層として日本には分布せず、近くでは中国大陸や朝鮮半島の先カンブリアの震旦系の一員をなし、砂漠砂に由来する石英質砂岩のような陸棚堆積物の続成品質化によって生成したものと推察されている。日本には…(中略)…岩層はないが、近接の大陸から供給されたと思われる本岩の円礫が、各地に見られている。」

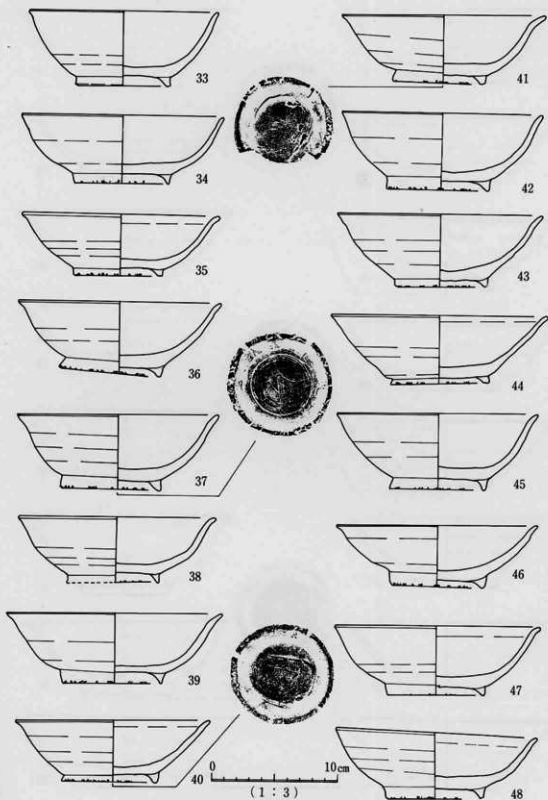
本窯址に関係するかしないかは別として、極めて稀な礫であるとの所見から、ここに記すこととした。



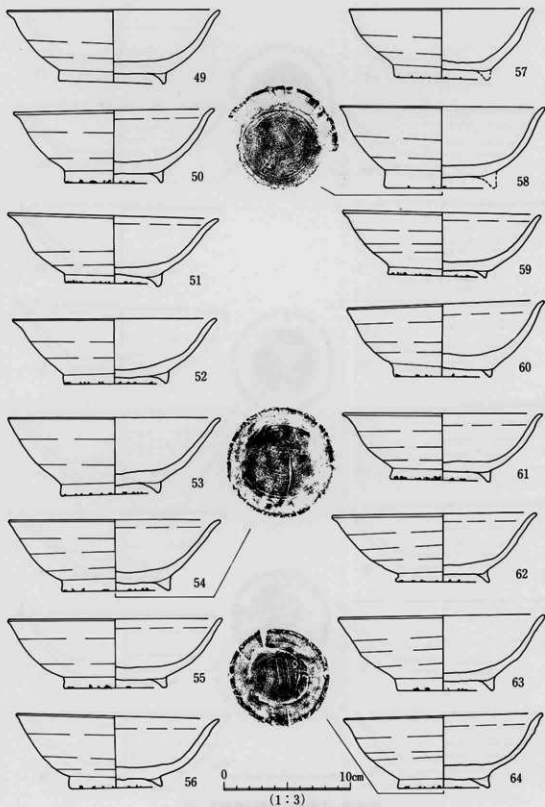
第29图 3号窟出土遗物实测图 (1)



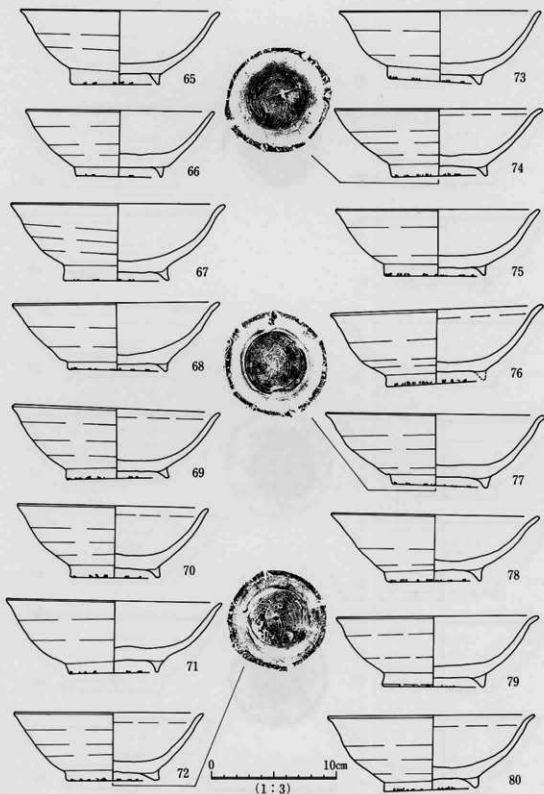
第30图 3号窟出土遗物实测图 (2)



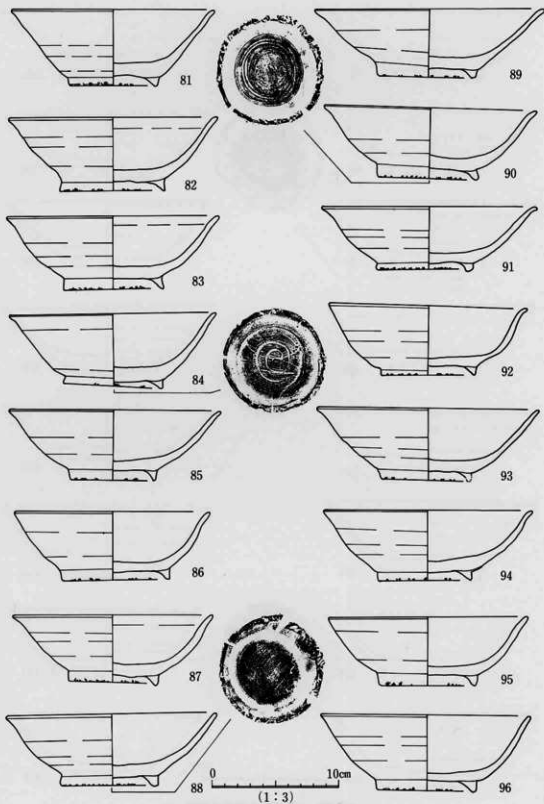
第31图 3号窟出土物实测图 (3)



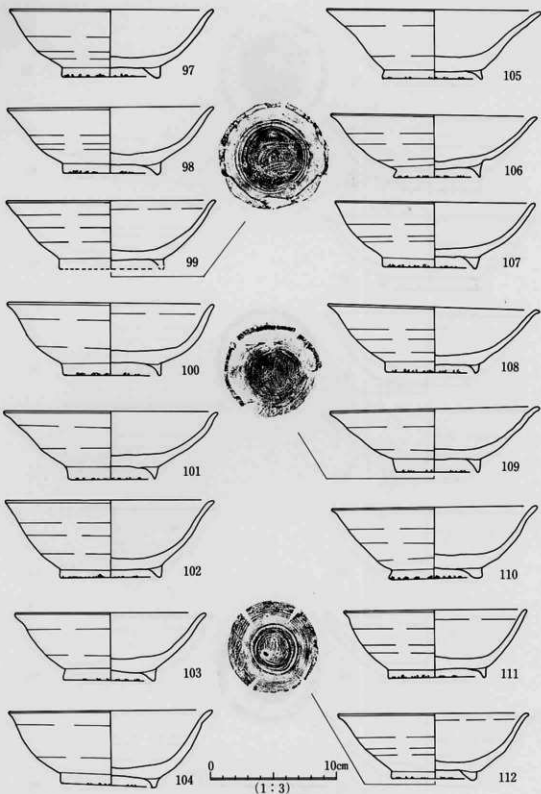
第32图 3号窟出土遗物实测图 (4)



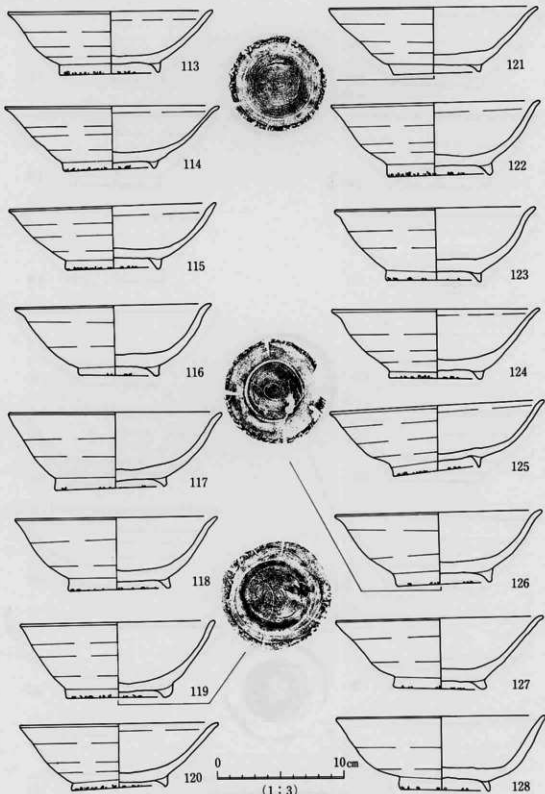
第33图 3号窟出土遗物实测图 (5)



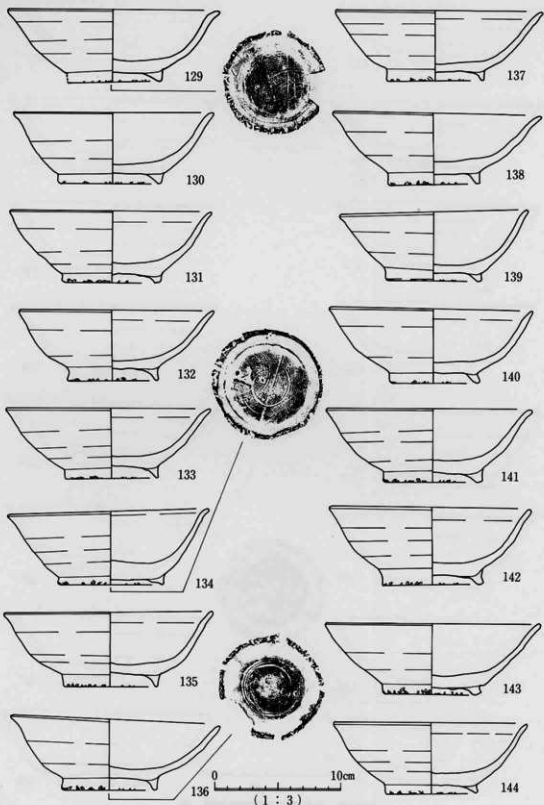
第34图 3号窟出土遗物实测图 (6)



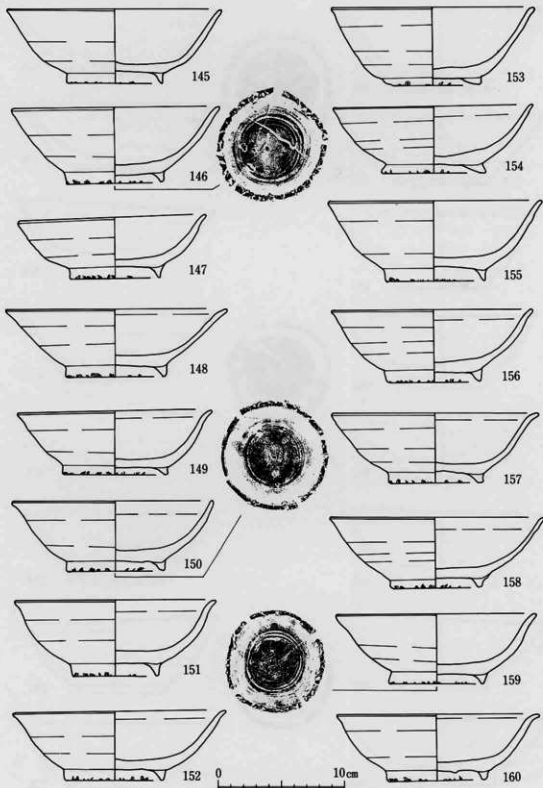
第35图 3号窟出土遗物实测图 (7)



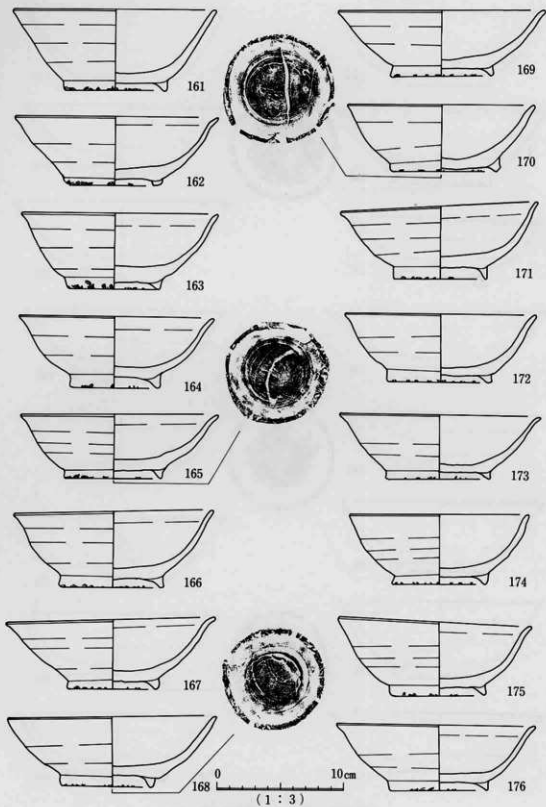
第36图 3号窟出土遗物实测图 (8)



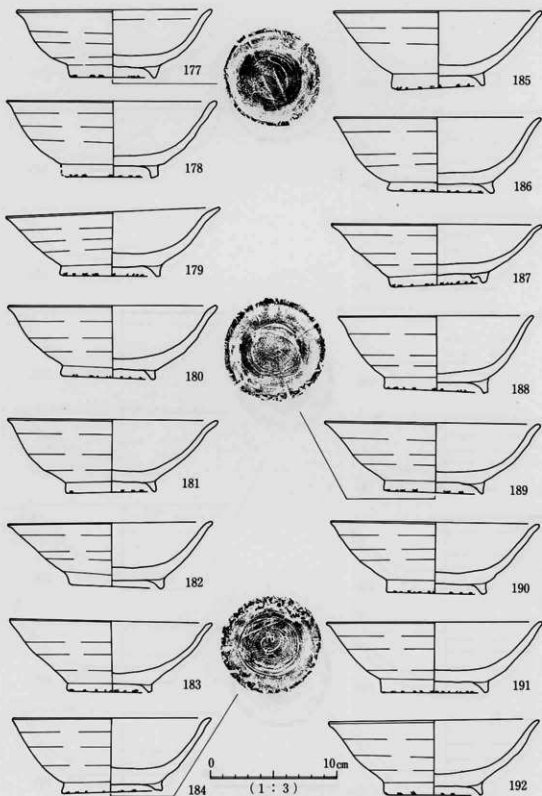
第37图 3号窟出土遗物实测图 (9)



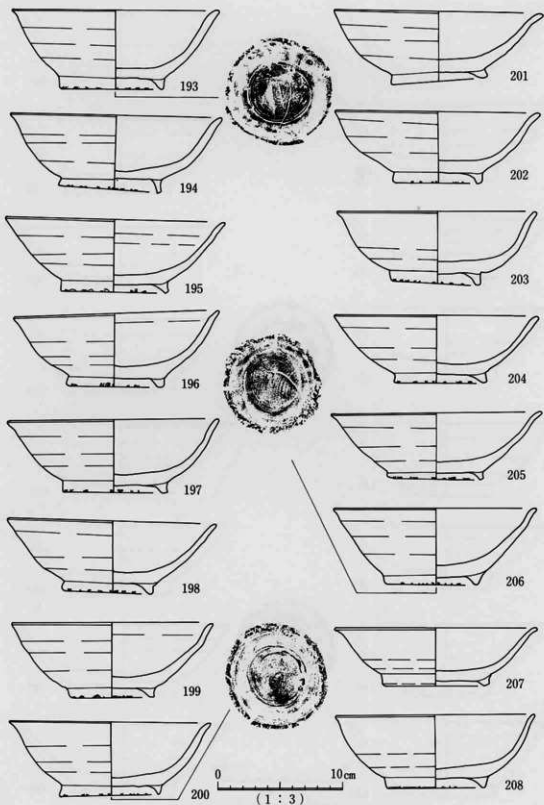
第38图 3号窟出土遗物实测图 (10)



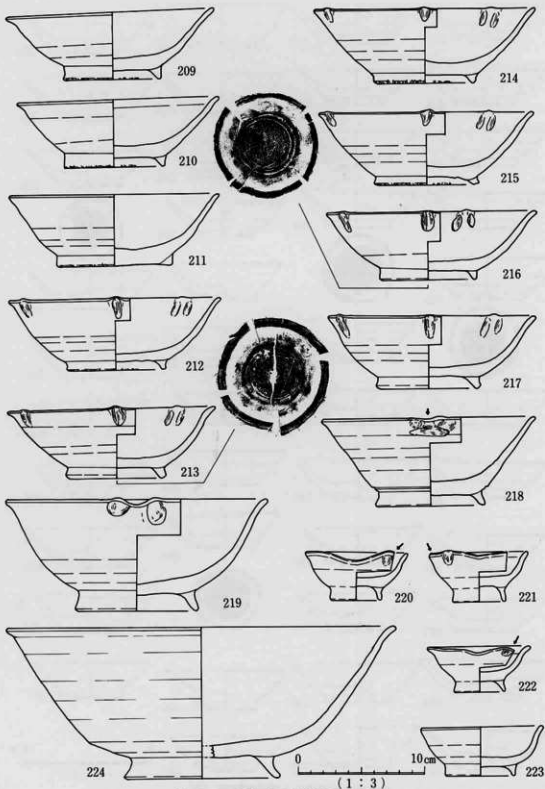
第39图 3号窟出土遗物实测图 (1)



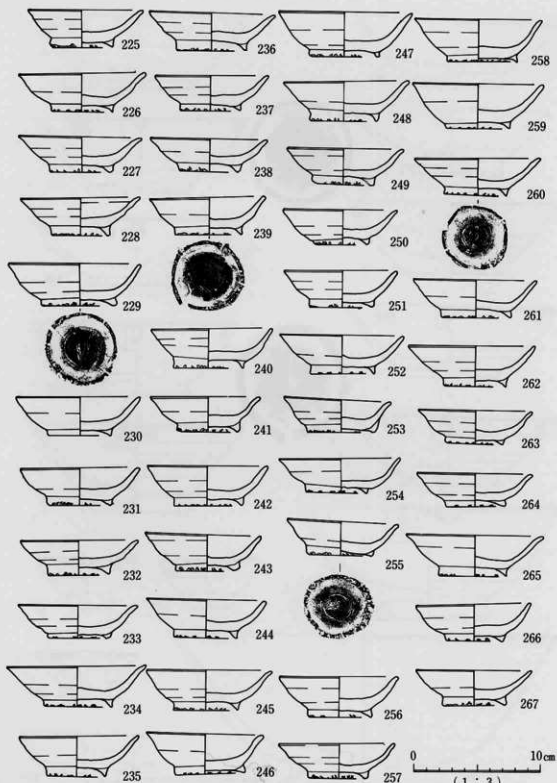
第40图 3号窟出土遗物实测图 (2)



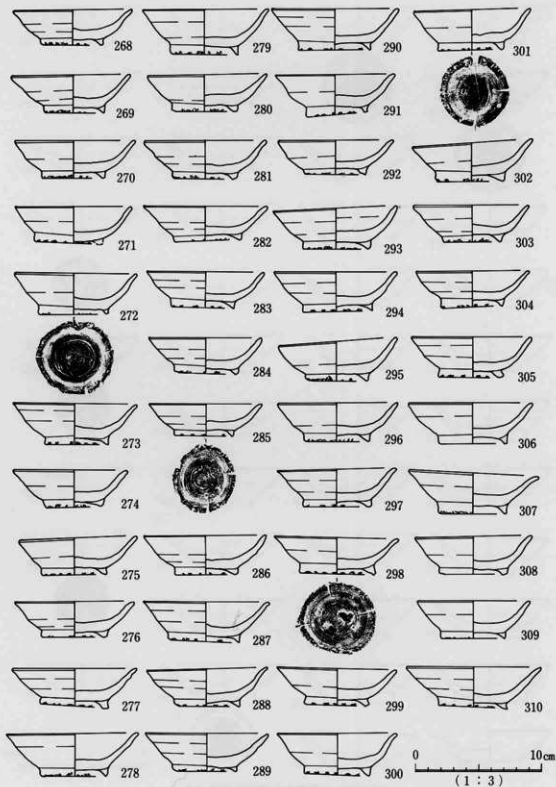
第41图 3号窟出土文物实测图 (13)



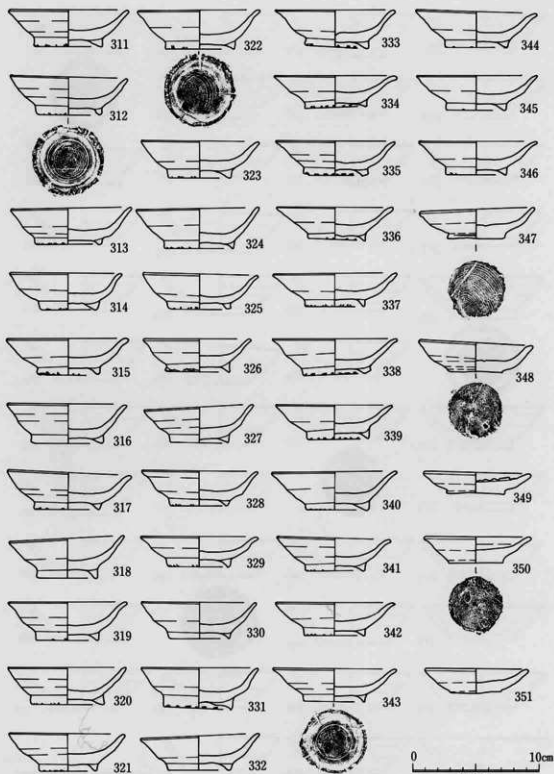
第42图 3号窟出土遗物实测图 04



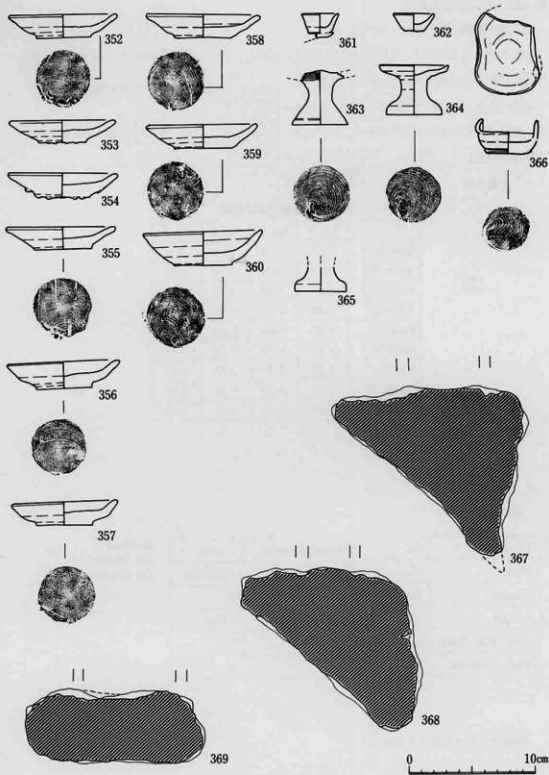
第43图 3号窟出土遗物实测图 (15)



第44图 3号窟出土遗物实测图 06



第45图 3号窟出土遗物实测图 (17)



第46图 3号窟出土遗物实测图 (10)

第3節 自然科学的調査

第1項 遺物の胎土分析（第47図、第8表）

出土遺物の胎土分析は、岐阜県陶磁器試験場に依頼し、平成6年1月17日付、陶試第3号の600で試験結果の通知を受けた。分析は、他窯出土の製品の胎土との比較を求めたためのものである。抽出試料は右表のとおりであり、以下に示す結果を得た。

No. 1	矢戸上野2号窯灰原出土椀
No. 2	同上
No. 3	矢戸上野3号窯灰原出土椀
No. 4	同上

1、定量分析

第8表 定量分析の結果

	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4
SiO ₂ (%)	71.7	71.3	72.4	72.9
Al ₂ O ₃ (%)	20.9	20.8	19.9	19.6
Fe ₂ O ₃ (%)	1.57	1.62	1.49	1.46
TiO ₂ (%)	0.82	0.78	0.78	0.74
CaO(%)	0.01	trace	trace	trace
MgO(%)	0.61	0.65	0.53	0.54
K ₂ O(%)	3.23	3.16	2.87	2.85
Na ₂ O(%)	0.11	0.12	0.10	0.12
Ig. Loss(%)	0.38	0.40	1.41	0.69

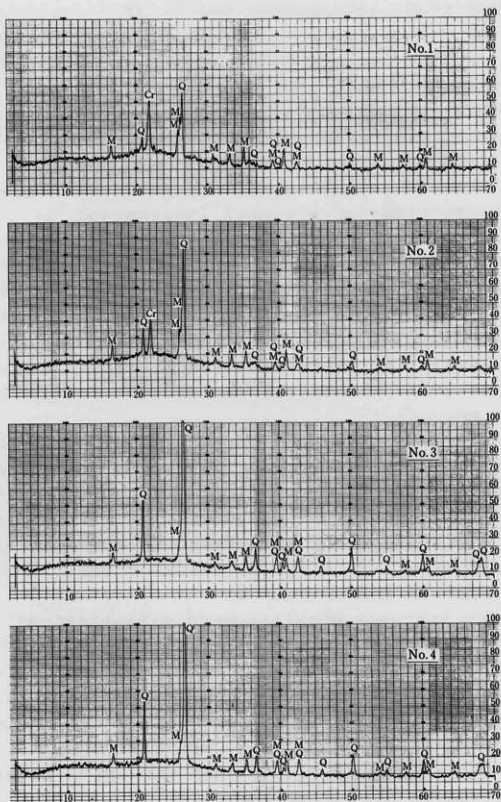
2、X線回折

回折データ

Target	Cu	Scanning Speed	4°/min.
Filter	Ni	Chat Speed	4 cm/min.
Voltage	40KV	Divergency Slit	1°
Current	20mA	Receiving Slit	0.8mm
Count Full Scale	2,000cps.	Detector	P.C.
Time Constant	1 sec.	Date	6. 1. 17

Q : Quartz
M : Mullite
Cr : Crystobalite

回折グラフは次頁のとおり



第47図 X線回折グラフ

はじめに

磁石になることができる物質を磁性体という。全ての磁性体は、加熱され温度が上昇すると、それぞれの磁性体に固有の温度で磁性(磁石になる性質)を失い、非磁性になる。この温度をキュリー点と呼ぶ。この反応は可逆的で、高温の非磁性の状態から冷却されて温度が下がると、キュリー点の温度を通過した途端に、再び磁性体にもどる。このときに獲得する磁化の方向は、その場所に作用している磁場の方向に一致したものになる。この磁化を熱残留磁化という。

土の中には、磁鉄鉱(Fe_3O_4)や赤鉄鉱(Fe_2O_3)などの鉄の酸化物、鉄酸化物に少量のチタンが混じったチタン磁鉄鉱($(\text{Fe}, \text{Ti})_3\text{O}_4$)など、磁性体の鉱物(磁性鉱物)が少量含まれている。古窯跡の窯体を造っている土の中にも、当然このような磁性鉱物が入っているので、窯体は焼成中にキュリー点以上に熱せられ、焼成が終わった後の冷却中に、その時に作用している地球磁場(地磁気)によって磁化され、地磁気の方向と一致した向きの熱残留磁化を獲得する。したがって、窯体全体が窯を使用していた当時の地磁気の方向を記憶していることになる。この磁化は非常に安定なものが多く、再び加熱されることがなければ、何百万年経ってもその磁化方向と強度を保ち続ける。

三次元ベクトルである地球磁場の方向は、水平面に投影した水平分力の真北からの振れの角である偏角(Declination)と、水平面からの傾斜角である伏角(Inclination)で表わす。地球磁場の方向(偏角と伏角)は、年々ほんの少しずつではあるが変わっており、数十年、百年という年数が経つと結構大きな変化となる。これを地磁気永年変化という。窯の使用された年代が異なれば、地球磁場の方向は違っているから、異なる方向の残留磁化を獲得する。即ち、窯跡は使用された年代に特有の磁化方向を持っており、その方向の違いから窯跡の年代を推定することができる。このような方法を考古地磁気年代推定法という。

日本では、弥生時代中期中頃以降の西南日本各地の遺跡に残る焼土遺構の考古地磁気測定によって、過去2000年間にわたる地磁気の方向の変化の様子(考古地磁気永年変化)が明らかになっている(Hirooka, 1971; 広岡, 1977)ので、測定によって得た焼土遺構の熱残留磁化の方向を、この考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、古窯跡などの焼土遺構の年代を推定することができるのである。本稿では、矢戸上野2・3号窯から採取した焼土試料の考古地磁気測定結果について述べる。

可見市内の考古地磁気測定については、大森奥山古窯跡群(広岡他, 1985)や久々利奥磯山4号窯・下切兎田古窯(広岡他, 1988)の報告がある。

試料の採取

矢戸上野2号窯では、窯中央部中軸線沿いの床から11個(試料番号CG 1181~1192)、3号窯でも同様に床中央部床面から13個(CG 1201~1213)の測定試料を採取した。両床面の焼土を石膏で固め、方位を特製クリノメーター(Hirooka, 1971)を用いて測ってから、試料として採取した。

試料採取に際しては、最終焼成以降に動いた形跡の無い、できるだけよく焼けたところを選ぶように心掛けた。また、窯尻や焚口あるいは壁際などは、焼成時に窯体自身が既に持っている磁化のために、窯体内の地磁気が歪んでいる可能性のあることが指摘されている(Hirooka, 1971)ので、できるだけ窯中央部の中軸線に近い床面の、正しく焼成当時の地磁気を記録していると思われる部分でサンプリングを行った。

遺跡現場での測定試料の採取は次のような手順で行う。

- 1) 焼成後に動いた形跡がなく、よく焼けた部分を選び、動かないように注意しながら、数cm角の焼土の周りに深さ数cmの溝を掘り、こぶし大の焼土を削りだす。
- 2) 削りだした焼土全体に薄目にといた石膏をかけて固める。
- 3) 濃くとした石膏を試料表面にのせ、アルミ板を押し付けて平面を作る。
- 4) 石膏が固まると、アルミ板をはがし、石膏平面の最大傾斜線の方位と傾斜角を特製クリノメーターで測定し、方位を示すマークを試料表面の平面上に記入する。このときの方位測定の精度が年代に大きく響くので、できるだけ精密に測らなければならない。
- 5) 石膏で固めた焼土試料を遺構から切り離し、切り離れた試料の表面も石膏で覆って補強してから、紙に包んで研究室に持ち帰る。

このような試料を通常1遺構から10~15個採取する。こうして遺跡現場で採取した試料は、方位を測定した平面をもった不定形をしているので、磁力計で測定できるように整形する。研究室でダイヤモンド・カッターを用いて、34mm幅で、方位の測定を行った平面の両側を切断し、切断面をうすい石膏で覆う。次いで、平面の上下も34mm幅で切断し石膏で覆う。34mmの厚さにして平面の裏側も切断、石膏をかけて、34mm×34mm×34mmの石膏で覆われた立方体に整形する。

磁化の測定

残留磁化の測定は、夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計(SMM-85型)を用いて、6回おき直して行った。

残留磁化測定は次のような手順で行う。

- 1) 最初に、全ての試料の自然残留磁化(Natural Remanent Magnetization、略してNRM)を測定して、磁化方向のまとめり具合や磁化強度を知る。
- 2) NRMの磁化方向のまとめり具合と磁化強度から、不安定な磁化成分を除去するための段階

交流消磁の消磁磁場の強さを決める。今回は、3号窯の磁化の強度が弱かったので、25 Oe の段階から消磁することにした。

- 3) 25 Oe で交流消磁実験を行なう。
- 4) 25 Oe 交流消磁後、再度、磁化測定を行い、磁化方向のまとまり具合や磁化強度の減少の程度を見て、50 Oe で消磁を行うか否かの判断の資料とする。
- 5) 25 Oe で消磁してもまとまり具合に大きな改善が見られなかったか、あるいは、改善が認められるが、より高い磁場で消磁すれば、更に改善されそうな窯跡については、50 Oe で消磁し、磁化測定を行なう。
- 6) 同様の手順で、消磁結果から 75 Oe で消磁するか否かを判断する。今回は、75 Oe の段階まで消磁することにした。
- 7) 75 Oe 段階の消磁後の磁化測定を行う。

このようにして得られた、NRM についての測定結果は第 9、13 表に、25 Oe 消磁結果は第 10、14 表に、50 Oe 消磁結果は第 11、15 表に、75 Oe 消磁結果は第 12、16 表に示されている。

2号窯の磁化強度は 10^{-3} ~ 10^{-4} emu/g の値となっており、1個の試料 (CG 1187) を除いては磁化方向のまとまりもいいため、考古地磁学的には信頼性の高いデータが得られた。これに対して、3号窯では磁化強度が小さく、磁化方向のばらつきが大きい。これは、焼成時の温度があまり高くにまで上がっていないことを示している。このような磁化方向が大ききはずれた試料は、地磁気の正しい記録とは考えられないので、床ごとに求める平均磁化方向の統計計算の際には、除外して計算を行った。第 9~16 表の表中で * 印が付した試料は、地磁気の記録とは考えにくいので除外したものである。3号窯では除外したものが 6 個にのぼる。

表の磁化方向のデータから、フィッシャーの統計法 (Fisher, 1953) を用いて計算した平均磁化方向 (平均偏角および、平均伏角) およびフィッシャーの信頼角、フィッシャーの精度係数、平均磁化強度は第 9 表のようになる。交流消磁によって、少しではあるが磁化方向のまとまりが改善されたので、75 Oe の消磁後の結果を考古地磁気データとして採用した。

考古地磁気推定年代

第 9 表で考古地磁気データとして採用した両窯の平均磁化方向と α_{95} を西南日本の考古地磁気永年変化曲線 (広岡, 1977) に記入したのが第 48 図である。白丸が 50 年毎の地磁気の方向を表している。各窯の平均磁化方向は黒丸印で表されており、2号窯、3号窯の磁化方向には、それぞれ、2、3の符号がつけてある。黒丸を囲む円が α_{95} の範囲を示している。永年変化曲線の、黒丸に最も近い部分の年代が、考古地磁学的に推定される年代である。推定年代値の年代幅は、 α_{95} の円が覆う永年変化曲線の線分の長さで与えられる。

考古地磁気年代は、第48図の考古地磁気永年変化曲線が正しく過去の地磁気の変化を表している、という前提で推定をおこなう。推定される各窯の年代は、

2号窯 A.D. 1205年 ± 10年

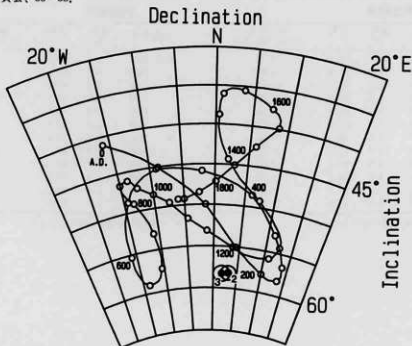
3号窯 A.D. 1200年 ± 15年

となる。

ただし、先にも述べたように、3号窯ではばらつきが大きく、平均磁化方向を求める計算の際に除外した試料の個数が多いので、推定年代の信頼度は少し低くなる。

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
 Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.
 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, vol. 15, 200-203.
 広岡公夫、大崎瑞恵、榊木威保、酒井英男 (1985) 大森奥山古窯跡群の考古地磁気年代, 「大森奥山古窯跡群」, 『桜ヶ丘ハイツ』宅地造成第4次工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 岐阜県可見市教育委員会, 110-114.
 広岡公夫、岡田宗、吉村勝之 (1988) 久々利奥磯山4号窯および下切見田古窯の考古地磁気測定, 「久々利奥磯山4号窯」富士カントリー美濃コース造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 岐阜県可見市教育委員会, 35-38.



第48図 過去2000年の西南日本の考古地磁気永年変化(広岡、1997)と矢戸上野

2・3号窯の考古地磁気測定結果

2:2号窯、3:3号窯

Declination: 偏角、Inclination: 伏角。

第9表 矢戸上野2号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1181	4.5	56.9	4.86
1182	2.6	59.1	8.73
1183	2.3	57.1	10.1
1184	2.2	55.8	6.12
1185	6.1	58.8	6.67
1186	8.2	56.7	6.3
* 1187	-3.9	54.7	6.02
1188	4.6	56.4	13.1
1189	3.8	59.0	6.63
1190	2.6	58.3	5.32
1191	1.1	59.3	9.41
1192	1.4	59.9	11.3

* : 統計計算の際に除外したもの。

第10表 矢戸上野2号窯の250e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1181	5.1	57.3	4.79
1182	2.2	59.4	8.65
1183	2.4	56.8	10.1
1184	1.5	56.0	6.05
1185	4.9	58.9	6.59
1186	7.1	56.5	6.11
* 1187	-3.8	54.8	5.92
1188	3.5	57.1	12.8
1189	3.5	59.3	6.55
1190	2.9	57.7	5.23
1191	-0.1	59.5	9.28
1192	-0.7	60.1	11.2

* : 統計計算の際に除外したもの。

第11表 矢戸上野2号窯の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1181	4.8	56.9	4.74
1182	2.0	59.2	8.60
1183	2.5	57.1	9.98
1184	0.9	56.5	6.00
1185	5.7	58.9	6.45
1186	7.1	57.4	6.01
* 1187	-4.0	54.3	5.96
1188	3.6	57.2	12.5
1189	3.3	59.5	6.51
1190	2.7	58.1	5.19
1191	-0.6	59.1	9.25
1192	0.5	59.6	11.1

* : 統計計算の際に除外したもの。

第12表 矢戸上野2号窯の750e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1181	4.5	56.6	4.67
1182	2.6	59.5	8.48
1183	2.4	57.2	9.83
1184	1.6	56.4	5.9
1185	5.4	59.0	6.36
1186	5.7	57.6	5.79
* 1187	-3.3	55.0	5.88
1188	4.3	57.1	12.2
1189	3.7	59.3	6.43
1190	2.5	58.5	5.08
1191	1.1	59.5	9.07
1192	1.6	59.7	10.8

* : 統計計算の際に除外したもの。

第13表 矢戸上野3号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1201	0.5	59.6	5.43
* 1202	4.0	62.7	0.540
* 1202	1.7	62.6	0.535
* 1203	11.7	54.0	0.670
1204	13.1	66.5	1.51
1205	4.3	57.0	1.93
1206	2.8	57.8	1.97
* 1207	6.6	45.2	2.00
1208	2.0	58.1	1.13
1209	5.9	59.7	1.05
* 1210	13.0	-16.6	0.0422
1211	7.8	59.4	0.513
* 1213	-3.6	58.9	0.737

*: 統計計算の際に除外したもの。

第14表 矢戸上野3号窯の250e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1201	0.4	59.4	5.36
* 1202	-0.6	63.8	0.500
* 1203	9.8	53.9	0.614
* 1204	11.0	67.1	1.45
1205	4.0	57.4	1.83
1206	2.2	57.9	1.92
* 1207	6.8	44.6	1.96
1208	1.4	57.9	1.11
1209	2.7	59.9	1.00
* 1210	40.7	4.2	0.0547
1211	1.8	59.7	0.460
* 1213	-4.5	59.3	0.652

*: 統計計算の際に除外したもの。

第15表 矢戸上野3号窯の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1201	0.3	59.6	5.31
* 1202	-4.8	63.3	0.422
* 1203	13.7	52.3	0.541
* 1204	12.6	67.0	1.35
* 1205	4.1	55.6	1.67
1206	2.8	57.4	1.76
* 1207	7.6	43.2	1.88
1208	2.1	58.4	1.07
1209	3.2	58.7	0.879
* 1210	59.0	-2.6	0.0375
1211	1.5	57.3	0.368
1213	-2.1	57.6	0.449

*: 統計計算の際に除外したもの。

第16表 矢戸上野3号窯の750e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
C G 1201	0.4	59.4	5.11
* 1202	6.0	64.8	0.323
* 1203	16.3	52.0	0.443
* 1204	14.5	66.9	1.22
* 1205	10.9	57.2	0.675
1206	2.0	57.7	1.50
* 1207	7.6	41.8	1.71
1208	1.8	58.7	0.977
1209	3.8	59.0	0.722
* 1210	39.5	1.8	0.0413
1211	3.0	57.5	0.280
1213	-0.0	57.6	0.276

*: 統計計算の際に除外したもの。

第17表 矢戸上野2・3号窯の考古地磁気測定結果

遺構名	N	D (°E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
(2号窯 NRM)	11	3.6	58.0	1.01	2031.3	8.05
(2号窯 250e)	11	3.0	58.1	1.05	1897.5	7.94
(2号窯 500e)	11	3.0	58.2	0.94	2344.8	7.85
2号窯 750e	11	3.2	58.2	0.85	2863.4	7.69
(3号窯 NRM)	6	3.8	58.6	1.47	2077.6	1.89
(3号窯 250e)	6	2.1	58.7	1.04	4138.0	1.84
(3号窯 500e)	6	1.3	58.2	1.13	3491.8	1.64
3号窯 750e	6	1.8	58.3	0.93	5222.0	1.48

N: 試料個数、D: 平均偏角、I: 平均伏角、 α_{95} : フィッシャーの信頼角、K: フィッシャーの精度パラメータ。

()は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。

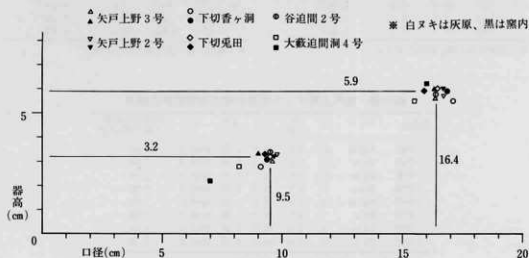
第4章 考察とまとめ

矢戸上野2・3号窯の時期（第49図、第18・19表）

各々の遺物の項でもみてきたように、椀や小皿Ⅰの示す法量分布や法量の平均値、及びその器種構成は、昭和53年調査の谷迫間2号窯や昭和59年調査の下切兎田古窯、本2号窯の直前に調査した下切香ヶ洞古窯のそれに近似するものであり、美濃山茶椀編年の谷迫間2号窯期に属するとみてよい。谷迫間2号窯期は、編年上は平安時代末期（12世紀前半）に比定され、窯体の大型化（大量生産指向）を引き起こす時期であり、当地方においては一つの画期を求め得る。大量生産指向とともに、遺物面においても粗雑化や簡略化が進み、小皿においては、高台がつく最後の窯期である。今回の調査においては、これらの指向や傾向がより一層明らかになり、遺物になお残る白堊の要素と、定着し始めた山茶椀の要素の両極が混在する状況が、より把握できた。

考古地磁気測定の結果は、2号窯、1205±10年、3号窯1200±15年を示しており、少なくとも50年程は編年観とズレている。このズレは、今後の課題となる。

さて、今回の調査においては、3号窯に接して築窯途中で放棄（おそらく掘削中の崩落により）された未完窯が発見された。この窯も、その床面の傾斜角度等から、谷迫間2号窯期の範囲で把握できる。また、前庭部端における土層の横断面の観察から、3号窯放棄後、一定期間を経てからこの未完窯の掘削が為されたことが判明している。但し、2号窯との関係は考古学的には明らかにできなかった。ところで、2号窯と3号窯の窯体構造は、第18表等に示すように酷似しており、寸法や平面構造、傾斜角度等が、ほぼ一致している。その主観的印象は、同一人物（集団）が築



第49図 谷迫間2号窯期の椀と小皿の法量

（小皿はⅠの平均、大蔵迫間洞4号窯の窯内遺物は浅間窯下1号窯期）

窯したのではないかと疑いたくなる程である。やや薄手の柄の作りや器種構成(特に小型仏器)等、遺物の面からみても、極めて酷似する。

2号窯と3号窯、未完窯の3者の関係を、色々なケースを想定して考えてみたが、次の3つのうちのいずれかには違いない。(1)2号窯と3号窯は同時稼働、未完窯は3号窯廃絶後一定期間において築かれるも失敗、他所に築窯した。(2)2号窯→3号窯の順で稼働し、(あとは(1)と同じ)。(3)3号窯廃絶後、他所で窯を築き活動していたが、同所へ戻り未完窯を掘削、これに失敗し離接する場所に2号窯を築き直した。

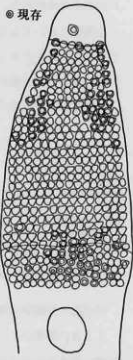
(1)のケースは、谷迫間2号窯期には他に例をみない。一つの集団が複数の窯の稼働させるには、この窯期としては今だ時期尚早かも知れない。また、焚木等燃料の面で不便な点は否めない。(2)のケースでは、2号窯と3号窯の間の空白期間、3号窯と未完窯の間の空白期間を考慮せねばならない。2号窯から未完窯に至るまでに、かなりの時間幅が予想され、これが谷迫間2号窯期中に収まるかどうか疑問である。(3)のケースでは、伐採された雑木の回復を待って同じ場所へ戻るまでの空白期間と未完窯掘削排土下の自然流土の堆積時間の符合、及び築窯に失敗してすぐ近くに築き直すという行為が、他のケースに比べて自然である。2号窯と3号窯の遺物を比べても、型的には前後関係を指摘できないことが弱点ではあるが、(3)のケースを想像している。

焼成回数・生産量(第50図)

2号窯において、最終焼成時に使用され遺棄されたと考えられる焼台は、窯内出土の294個体である。第50図に示すように、机上でその配置を復原すれば、32列390個の焼台が配置可能とみられる。ところで、灰原から出土した焼台は422個体を推定するが、この中には最終焼成時に使用されたもの96個体(390-294個)も含まれていると考えてよいから、焼成回数を割り出すには、 $(422-96) \div 390$ + 最終焼成分1回 ≈ 1.84 となり、2回の焼成が推定できる。同様の方法により、下切兎田古窯と下切香ヶ洞古窯では各5回を割り出しているが、本2号窯における2回という数値は、更に短期作業を示すものである。尚、分焰柱の観察からは2回以上、焼成室床断面の観察からは2-3回の焼成回数を推定し得た。

また、灰原出土の柄と小皿Ⅰの焙着資料には、少なくとも8段積み重ねの重ね焼きを示すものがある。仮に本窯では10段の重ね焼きが行われたとして、1回当たりの生産量を計算すると、焼台390個×10段=3,900個の製品が焼成可能となる。

3号窯においては、窯内から焼台の出土はみられなかった。机上



第50図 2号窯の焼台配置復原図

での復原によれば、27列338個の焼台設置が推定できた。2号窯と同様の方法により焼成回数を算出すれば、灰原出土焼台数1,337個÷338個≒3.96となり、4回の焼成が考えられよう。これを裏付けるように、分焰柱の断面観察からは4回、焼成室床断面からは2回以上の補修が確認されている。また、灰原出土の椀には11段積み、小皿Ⅰには少なくとも10段積みの焼成を示す熔着資料がある。仮に、3号窯における焼成が全て11段積みで為されたものとすれば、1回当たりの生産量は、焼台338個×11段=3,718個、との算出が可能である。

さて、次に、器種ごとの構成比率や失敗品の割合を、遺棄されたものの個体数から算出してみる。

2号窯においては、椀71.8%、小皿類25.8%、その他2.4%となり、椀と小皿の比率は、およそ7:3と推定できよう。これは、下切香ヶ洞古窯でみた割合ともほぼ一致する。尚、10段に積まれたもののうち最上位のものは、当初から失敗品となることを覚悟しているふしがある。それは、第3表の()内の数値からも読みとれる。これまでに推定した、焼成回数や1回当たりの生産量から、失敗品の割合を算出すれば、最終焼成時15%〈(椀510+小皿類94)個÷3,900〉、これ以前の焼成時90%〈(椀2,509+小皿類989)個÷3,900〉となる。失敗品率90%とは異常な数値であり、最終焼成分も灰原の方へかなり廃棄されている、とみるのが妥当であろう。灰原出土のものが、ほとんど半焼け、といったような特殊な状況はみられない。また、失敗品を覚悟の品(10段積みでは10%)の数を見込めば、即ち最上段焼成品の数を差し引いて考えれば、最終焼成時12%、それ以前の焼成時76%、2回の平均44%の値を得ることができる(偶発的失敗率)。

3号窯においても同様に、椀77.9%、小皿Ⅰ・Ⅱ21.4%、その他0.7%の組成であり、椀と小皿の比率は、およそ8:2と考えられる。4回の焼成における失敗品の割合は、(椀4,659+小皿類1,280)個÷(3,718個×4回)≒0.399であり、約40%、失敗覚悟の品を差し引けば約33%となる。

下切香ヶ洞古窯等の結果も合わせてまとめれば、次のようになる。

項目 窯名	1回当たりの 推定生産量	器種構成推定割合			推定焼 成回数	失敗品の割合		偶発的失敗率	
		椀	小皿類	その他		最終焼成時	その他の平均	最終焼成時	その他の平均
矢戸上野2号窯	3,900個	71.8%	25.8%	2.4%	2回	15%	90%	12%	76%
矢戸上野3号窯	3,718個	77.9%	21.4%	0.7%	4回	40%		33%	
下切香ヶ洞古窯	3,150個	68.7%	30.9%	0.4%	5回	21%	37%	29%	
下切兎田古窯	2,728個	72.8%	26.9%	0.3%	5回	15%	37%	未調査	

※下切兎田古窯の数値は、改めて検討を加えたので、報告書とは一致しない。小皿類は、小皿Ⅰ・Ⅱをいう。

谷迫間2号窯期の窯体構造と遺物(第49～52図、第18表)

本2号窯の調査により、これまでに美濃窯において発掘調査された山茶椀窯のうち、谷迫間2号窯期に属するものは6例を数えることになった。窯体構造については第18表にまとめ、『下切香ヶ洞古窯』1994においても述べたので、その要約のみを記すこととする。

- (1) 遺物の特徴から（後述）、当該期を前半と後半に区分する。
- (2) 窯体は、前段階の西坂1号窯期に比べて飛躍的に大型化し、谷迫間2号窯期の中においても、前半から後半へ大型指向がよみとれる。但し、1回当たりの生産量には必ずしも反映されていない。
- (3) 分焰柱は、床が平坦な部分に設置され、ここを燃焼室と焼成室の境とする。分焰柱は、主に地山掘り残しにより築かれる。
- (4) 分焰柱から奥の焼成室の大部分は、地山をトンネル状に掘り抜いたもので、地下式窯窟と言ってよい。
- (5) 窯体の床面幅は、焼成室下半部で最大値をとる。焼成室の床面積は約12㎡、焼成室床面の平均傾斜角度は41度程度を測り、山茶椀窯の中では最も急傾斜である。
- (6) 煙道部は、床面がほぼ水平になった後、垂直に近い傾斜で立ち上る。炎はその後地を這う。
- (7) 焼台の配置数の平均は348個、1回焼成当たりの平均生産量は約3,500個になる。前窯期と比べて、飛躍的に大量生産が実現されていることは明白である。
- (8) 焚口には段が設けられ、燃焼室の床が若干低くなるのが一般的である。

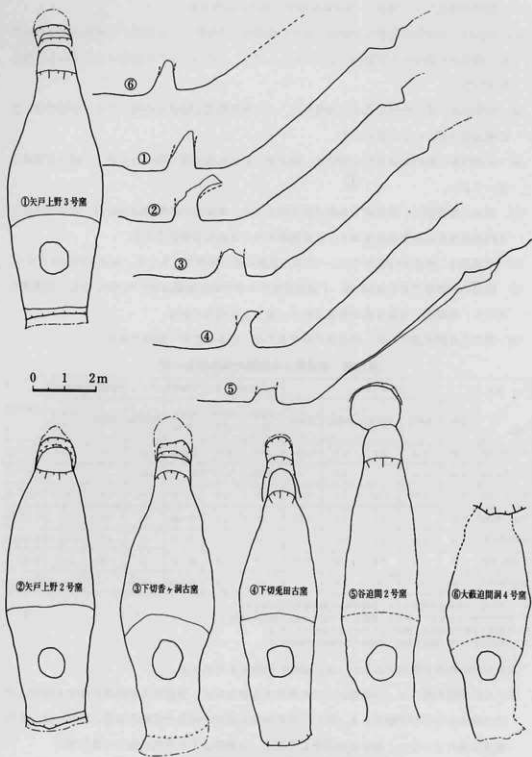
第18表 谷迫間2号窯期の窯体構造一覧

項目 窯名	主軸長 (m)					窯体幅(床面) (m)		傾斜角 (°)		床面積(㎡)		比高(m)	主軸方位
	全長	燃焼室	焼成室	平坦部	煙道部	焼成室最大	分焰柱中央	焼成室斜面	斜面平均	焼成室	焚口～先端		
矢戸上野3号窯	9.45	2.6	5.4	0.9	1.45	3.05	2.55	35~44	40	13	4.75	N-89°-E	
矢戸上野未定窯	(5.8)	1.9	—	1.0	—	3.15	1.95	(31~45)	(40)	—	—	N-81°-E	
矢戸上野2号窯	9.2	2.6	5.55	1.2	1.05	2.8	2.2	36~44	41	13	4.5	N-140°-E	
下切香ヶ洞古窯	9.85	3.6	5.4	0.8	0.85	3.0	2.2	36~45	40	12	4.5	N-11°-E	
下切兎田古窯	9.75	3.15	4.9	0.95	1.7	2.45	2.1	39~46	43	9.5	4.4	N-124°-E	
谷迫間2号窯	9.95	1.8	5.9	0.95	2.25	2.4	2.05	40~44	42	12	4.95	N-102°-E	
大森迫間洞4号窯	(7.24)	2.7	—	0.6	—	2.6	1.7	(31~38)	(34)	—	—	N-58°-E	

- ※ 「平坦部」は焼成室平坦部のこと。分焰柱奥から焼成室斜面部の境まで。
 ※ 焼台の有無にかかわらず、便宜上「焼成室」は分焰柱の奥から煙道部の境まで。
 ※ 谷迫間2号窯の煙道部は、貼床によりかなり長く改修されている。
 ※ 大森迫間洞4号窯の最終焼成は、浅間窯下1号窯期に比定される。

以上が窯体構造の概略であるが、次に遺物の特徴をまとめておく。

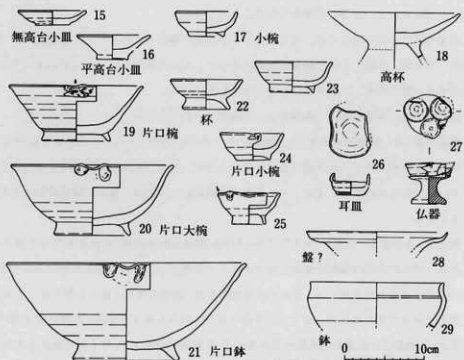
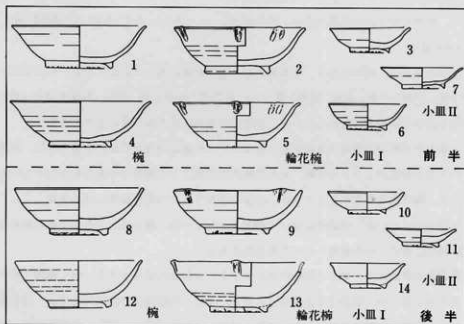
- (1) 主に器壁の厚さと、口縁部近くでの外反する度合から、谷迫間2号窯期を前半と後半に分けて考えることが可能である。但し、考古地磁気測定の結果や遺物の法量、組成には、その変化は表れていない。前半は器厚がより薄く、口縁部近くの外反が強い（第52図）。
- (2) 前半には矢戸上野2・3号窯を、後半には下切香ヶ洞古窯と下切兎田古窯、谷迫間2号窯、大森迫間洞4号窯を充てて考えている。



第51図 谷迫間2号窟期の窟体構造

- (3) 当該期における碗と小皿類の推定構成比率は、7～8：3～2である。第49図から読みとれる、碗と小皿Ⅰの法量平均値は、碗—器高5.9cm、口径16.4cm、小皿Ⅰ—器高3.2cm、口径9.5cmである。
- (4) 遺物の組成は、碗や小皿Ⅰ、小皿Ⅱの他、若干の輪花碗や片口碗、小碗、片口小碗、無高台小皿、平高台小皿、耳皿、高杯、盤(?)、片口鉢、小型仏器、瓶類、陶鍾を含む(第52図)。前半と後半では組成は変わらないが、前半は輪花碗の量が少し多いようである。
- (5) 小皿Ⅰとの区分が明確には線引きできないが、小皿Ⅱが存在する。小皿ⅠとⅡ、無高台小皿の3者3要素がミックスされ、次の段階の浅間窯下1号窯期の小皿を生み出すものと考えている。輪花碗や耳皿などととも、白瓷の名残りはこの期を最後に消え去る。
- (6) 一般的ではないが、焼成時において窯道具としての蓋(碗と同じであるが重ね焼きの最上段に伏位に置く)が少数用いられた可能性がある。
- (7) 碗の内面底部には、ロクロ回転の中心にできた突起状の盛り上りを、軽く指頭でナデた痕(スリケシ痕)が、後半に多少見受けられる。また、外面底部の高台内側では、回転糸切痕を後半ほど多く観察できるが、これに加えて2～3条の平行する圧痕(板目状圧痕、或いはスノコ状圧痕)を、前半の段階からみることができている。
- (8) 通常の碗や小皿の高台には、全てにモミガラ圧痕が観察される。但し、輪花碗の多くや片口碗、片口鉢、小碗、片口小碗等にはみられない。高台の断面形は、つぶれたものや台形状を呈する一部を除き、三角形をなすものが一般的である。
- (9) 輪花施文は、少量の碗にのみ施され、5輪花が一般的である。
- (10) 製品の胎土は、緻密ではあるが、当窯期の前・後の山茶碗にみられるそれよりも砂っぽく、ザラツとした感がある。当該期における窯の分布が、限定された狭い範囲であることと関係しているのかも知れない。また、ごく少数の特殊品においては、極めて緻密な胎土を有するようである。
- (11) 焼台は、多少湿った状態において、1.5～2.0kg(焼成室斜面部用)を計る大型のものである。これは、窯体の床面の傾斜が極めて急であることに関係し、安定を図るための工夫である。片口鉢のような大型品用には、そのみ特別な位置(煙道部等)に焼台を配することができる。
- (12) 矢戸上野3号窯と未完窯、そして2号窯において推測した工人集団の移動が的を得ているとすれば、燃料となる雑木の成長時間を考えて、3号窯の稼働4年(年1回の焼成とすると)+空白期間20年?(雑木の成長と3号窯遺物層上の自然流土)+未完窯の掘削と2号窯の稼働2年(年1回の焼成とすると)=26年?、という算出ができる(当該期の前半)。

以上、谷迫間2号窯期の特徴をみてきたが、当該期の窯の分布と生産集団の意義づけについては、別稿に譲ることにし、まとめにかえる。



第52図 谷迫間2号窯期の器種構成

矢戸上野3号窯(1~3·15·19·20·23·25·26)
 矢戸上野2号窯(4~7·21·27·28)
 下切香ヶ洞古窯(8~11·16·17)
 下切兎田古窯(12~14·18)
 大藏迫間洞4号窯(22·24·29)

第19表 美濃白瓷・山茶碗編年表

西暦	時代	陶器	窯体	窯式	調査した市内の古窯（考古地磁気推定年代）	
900	平安	白瓷	窖	1	光ヶ丘 1	
				2	大原 2	
1000				3	虎溪山 1	
				4	丸石 2	Y-1 (1085±30)
				5	明和 27	
1100	鎌倉	山茶碗	窖	1	西坂 1	
				2	谷迫間 2	YU-3 (1200±15) SKO (1190±25) YU-2 (1205±10) Y-2 (1170±30) USA (1200±20)
				3	浅間窯下 1	
1200				4	丸石 3	OO-2 (1220±15) OO-4 (1225±15) OO-5 (1190±20) OO-6 (1210±25)
				5	窯洞 1	
1300	南北朝	室町	プレ大窯	6	白土原 1	KA-1 (1350±30) OO-3 (1200±10)
				7	明和 1	KO-4 (1250±20)
				8	大畑大洞 4	
1400				9	大洞東 1	
				10	脇之島 3	
				11	生田 2	
1500						

(本表は、多治見市教委『明和36号窯発掘調査報告書』1993を参考にした。)

Y：谷迫間、YU：矢戸上野、SKO：下切香ヶ洞、USA：下切兔田

OO：大森奥山、KA：柿下、KO：久々利奥磯山

参考・実測図出典文献

可見町教育委員会『谷迫間2号窯発掘調査報告書』1978

可見市教育委員会『下切兎田古窯』1985

可見市教育委員会『下切香ヶ洞古窯』1994

多治見市教育委員会『大藪迫間洞古窯跡群発掘調査報告書』1989

多治見市教育委員会『美濃窯の焼物』1993

多治見市教育委員会『赤坂1号窯発掘調査報告書』1985

2号窯 焼等計測表(2)

〔表上段〕は焼成時の產品位置

測号	種類・段数	位置 (cm)		口部温度 焼成率 (%)	仕上場所	焼上段 O/F	備考	測号	測号	種類・段数	位置 (cm)		口部温度 焼成率 (%)	仕上場所	焼上段 O/F	備考
		口部	製品								口部	製品				
97		15.7	5.6	7.8	30			145		145	17.3	5.3	8.7	30		
98		15.2	6.3	7.2	30			146		146	16.3	5.8	8.0	30	○	
99		17.3	5.8	7.7	20			147		147	18.1	6.1	8.3	50		
100	29	17.3	5.5	7.9	70			148		148	18.0	5.4	7.9	20	○	
101		16.2	5.4	8.0	30			149		149	16.7	5.2	7.3	40	○	
102		19.3	5.1	8.0	20			150		150	16.0	6.4	8.5	30		
103		15.7	5.3	7.9	30			151		151	16.0	6.2	7.8	30		
104	30	16.5	5.2	7.4	40			152		152	16.0	5.0	8.0	30		
105		16.1	4.8	8.1	30	○		153		153	17.6	5.3	7.8	20		
106		16.4	5.3	8.0	20	○		154		154	16.4	5.8	8.0	30		
107		16.5	5.8	7.2	30			155		155	16.0	5.8	8.2	40	○	
108		16.5	5.8	7.2	30			156		156	16.1	6.2	8.4	30		
109		16.3	5.4	7.7	20			157		157	16.2	5.9	7.9	20		
110		16.3	5.4	7.5	20	○		158		158	17.0	5.8	8.2	30		
111		16.8	5.7	7.4	20			159		159	16.7	6.0	7.5	30		
112	31	16.9	6.9	7.3	40			160		160	16.6	5.8	8.1	70		
113		17.0	6.9	8.0	20			161		161	17.0	5.7	8.0	30		
114	32	16.7	5.6	8.4	40			162		162	16.6	5.4	8.2	30		
115	33	17.3	5.7	8.3	30			163		163	16.6	5.7	8.2	30		
116		16.7	5.6	8.3	30			164		164	15.9	5.8	7.8	30		
117		16.2	6.1	8.1	30	○		165		165	16.3	6.1	8.5	30		
118	34	17.0	5.1	7.5	30			166		166	17.1	6.4	8.4	30		
119		16.4	5.2	8.8	30	○		167		167	15.7	6.3	8.5	30	○	
120	35	16.4	4.5	8.0	40			168		168	16.3	6.0	8.6	30		
121	36	17.0	5.9	8.7	40			169		169	16.0	6.4	7.2	30		
122	37	17.2	5.7	8.2	70			170		170	15.8	5.0	7.2	30		
123	38	16.6	6.3	7.8	30			171		171	15.8	5.2	7.4	30		
124	39	16.6	5.8	7.6	30			172		172	16.3	6.3	8.2	30		
125	40	15.6	5.5	7.3	30			173		173	15.9	5.9	7.0	20		
126		15.6	5.5	7.3	30			174		174	15.6	5.4	7.9	30		
127	41	17.0	5.7	8.3	20			175		175	15.6	5.0	7.8	30		
128		15.5	5.6	8.2	30			176		176	16.4	5.2	7.9	20		
129	42	16.0	6.1	8.2	40			177		177	16.6	5.5	8.0	30		
130		17.4	5.8	8.3	30			178		178	16.2	5.1	8.5	30		
131		17.7	5.6	7.7	40			179		179	16.6	5.5	8.1	30		
132		17.0	5.9	8.1	30			180		180	17.0	4.7	7.3	30		
133		16.5	5.6	7.6	30			181		181	16.8	5.4	8.1	40		
134		17.6	5.2	8.3	30			182		182	16.4	5.3	8.0	30		
135		16.3	5.6	8.4	30			183		183	16.0	5.5	8.1	30		
136		16.0	5.7	7.8	30			184		184	15.5	5.3	8.5	30		
137		17.7	5.6	8.7	30	○		185		185	15.6	5.6	8.2	30		
138		17.0	5.3	7.8	20	○		186		186	15.8	5.4	7.4	30		
139		16.1	6.1	7.8	30			187		187	15.8	5.4	7.4	30		
140		17.0	6.3	7.8	30			188		188	17.0	5.2	7.2	30		
141		16.7	6.1	7.6	30			189		189	17.3	5.5	8.0	30		
142		17.4	5.8	8.5	40			190		190	17.2	5.4	7.9	30		
143		16.4	6.0	7.4	30	○		191		191	17.2	5.4	7.9	30		
144		16.4	5.7	8.0	30			192		192	16.7	5.2	7.8	20		

2号黨 概算計測表(3)

〔表上段〕は建設時の量山位置

建物 番号	神宮・国医 番号	口幅部 残存率 (%)		法 量 (cm)		口幅部 残存率 (%)	地上残存 量 (kg)	地上残存 率 (%)	口幅部 残存率 (%)	地上残存 率 (%)	建設 時 量 山 位置	備 考
		口 径	高 度	口 径	高 度							
193		16.0	5.1	30		15.8	6.3	8.2	20			
194		16.5	4.7	7.3	30	16.2	6.1	8.2	70			
195		16.5	5.4	7.4	10	16.3	6.1	8.3	20			
196		17.1	5.4	8.4	30	16.2	6.2	8.4	10			
197		16.7	5.1	8.8	30	16.5	6.2	7.7	20			
198		16.4	5.5	7.7	40	17.6	5.4	7.7	10			
199		16.3	4.7	7.5	30	16.5	6.4	8.2	20			
200		16.2	4.9	7.7	30	16.2	5.5	7.8	10			
201		15.3	6.0	8.0	20	17.4	6.0	7.8	10			
202		17.5	5.4	8.0	10	16.7	6.1	7.8	20			
203		17.1	4.9	8.1	10	16.5	6.6	7.8	20			
204	51	15.8	5.4	7.8	80	17.1	6.0	7.5	10			
205	152	17.7	5.5	7.8	10	17.1	6.0	7.5	10			
206	153	16.3	5.8	7.4	10	16.7	6.1	8.0	20			
207	154	16.3	5.0	7.2	20	16.3	6.1	8.1	10			
208	155	15.2	5.5	7.4	40	16.3	5.8	8.2	20			
209	156	16.0	5.7	7.0	30	17.3	5.6	8.1	40			
210	157	17.4	5.0	7.5	50	16.4	6.1	8.0	20			
211	158	16.7	5.5	7.7	30	17.1	5.6	7.9	60			
212	159	16.8	6.1	8.1	60	17.1	5.6	7.9	60			
213	52	16.5	6.0	8.0	60	16.8	6.2	8.3	20			
214		15.8	6.3	8.1	10	17.0	5.4	8.6	10			
215	53	16.7	6.1	7.6	50	16.7	5.8	8.1	20			
216		15.9	6.1	7.8	30	15.7	6.1	7.9	40			
217		15.6	6.6	7.8	30	17.1	6.0	8.3	10			
218		16.0	6.2	7.6	10	17.0	5.9	8.0	20			
219		16.4	6.1	7.8	20	17.0	6.0	8.0	10			
220		16.5	5.9	8.2	10	16.8	5.7	8.0	10			
221		15.2	6.3	8.0	10	15.3	5.7	8.0	20			
222	54	15.3	6.3	7.9	40	16.5	6.0	7.8	20			
223		16.7	6.4	8.1	30	16.4	6.2	8.1	30			
224		16.0	5.3	7.7	10	16.8	5.8	7.7	10			
225		16.3	6.1	8.0	10	16.0	6.6	8.2	40			
226		16.0	6.2	7.7	30	16.5	5.9	8.2	20			
227	55	17.3	6.0	8.2	40	17.0	5.8	7.5	20			
228		17.3	5.9	7.8	10	16.4	6.1	7.9	20			
229		17.3	6.3	8.5	30	16.1	6.1	8.0	20			
230		17.7	6.1	8.6	20	16.4	6.2	7.4	20			
231	56	17.2	6.0	7.8	50	16.7	5.9	7.8	30			
232		17.2	5.8	7.9	20	16.4	5.6	7.8	40			
233	57	17.1	6.2	8.1	50	16.1	6.1	8.8	30			
234	58	16.0	6.2	8.1	50	16.3	5.9	7.8	20			
235		16.0	6.1	7.8	10	15.6	6.2	7.9	20			
236		16.8	6.1	7.8	20	16.0	5.9	8.2	30			
237		17.3	6.1	7.8	20	17.3	5.9	8.2	30			
238		16.5	6.1	7.7	20	16.1	6.1	7.8	10			
239		16.5	6.1	8.1	40	16.6	5.6	8.3	10			
240		16.1	5.6	7.7	20	17.7	6.0	8.0	10			

2号窯 検査計測表(4)

(最上段)は焼成時の測定位置

焼物 番号	神位・回線 番号	法 量 (cm)			窯上段 O/P	窯 考	窯上場所 窯口右側部	窯上段 O/P	窯 考
		口 径	脚 高	筒 高					
2989	70	17.0	5.8	8.0					
2990		16.5	5.9	7.9					
2991	71	17.6	6.0	8.2					
2992	72	17.3	6.0	8.2					
2993	73	17.3	6.0	8.2					
2994		16.7	6.3	7.6					
2995		17.1	5.6	7.7					
2996		16.9	5.9	7.9					
2997		16.5	6.2	8.2					
2998		15.0	5.9	7.9					
2999		16.3	5.8	8.2					
3000		17.0	5.8	8.2					
3001		16.6	6.1	7.8					
3002	74	16.7	6.3	7.8					
3003	75	16.3	6.3	7.8					
3004		17.7	5.1	7.6					
3005	76	16.7	6.2	7.9					
3006		16.5	6.1	7.9					
3007	77	17.3	6.3	7.8					
3008		16.9	5.9	7.7					
3009	78	17.3	6.2	8.0					
3100		17.5	6.2	7.8					
3101		16.8	5.7	7.9					
3102		17.1	6.0	8.7					
3103		17.3	6.0	8.1					
3104		16.2	6.0	7.7					
3105		16.3	6.1	8.1					
3106		16.6	6.0	8.0					
3107		16.4	6.4	7.9					
3108		15.9	6.3	8.2					
3109		16.6	5.6	8.0					
3110		16.1	6.1	8.2					
3111		16.7	5.8	7.9					
3112		17.1	6.2	8.1					
3113		16.3	5.9	8.3					
3114	148	16.9	6.1	8.0					
3115		17.3	6.2	8.7					
3116		16.3	6.3	7.8					
3117		16.6	6.2	8.1					
3118		16.5	6.2	8.1					
3119		16.5	5.6	7.9					
3120		16.1	6.2	8.1					
3121		16.7	5.8	7.9					
3122		17.1	6.2	8.1					
3123		16.3	5.9	8.3					
3124		16.9	6.1	8.0					
3125		17.3	6.2	8.7					
3126		16.3	6.3	7.8					
3127		16.6	6.2	8.1					
3128		16.5	5.6	7.9					
3129		16.1	6.2	8.1					
3130		16.6	6.2	7.9					
3131		16.5	6.1	8.4					
3132		17.4	6.2	8.0					
3133		16.7	6.2	8.7					
3134		17.7	6.0	7.9					
3205		18.2	5.3	7.5					
3306		16.7	6.0	7.8					

2号窯 荷等計測表(5)

(縦上段) 口縁部の高さ位置

遺物番号	林区・段取番号	注 量 (mm)		口縁部 残存率 (%)	出土場所	縦上段 O10	備 考	遺物 番号	林区・段取 番号	注 量 (mm)		口縁部 残存率 (%)	出土場所	縦上段 O10	備 考
		口 径	高 度							口 径	高 度				
2055	97	16.2	6.4	80	窯 内			433		16.7	6.3	8.2	20		
2056	98	17.5	5.5	80				434		16.0	6.0	7.8	20		遺 7
2057	99	16.1	6.1	70				435		17.9	5.7	8.0	20		
2058	100	16.9	6.2	50				436		16.8	5.5	8.1	20		
2059	101	16.7	5.5	8.3	70			437	1333	17.0	6.3	7.5	60		
2060	102	16.3	6.3	7.9	80			438	1384	16.2	5.9	8.0	100		255.7g 413.4g
2061	103	16.2	5.5	7.9	20			439	1385	18.0	5.9	8.0	100		(284.7g)
2062	103	16.9	6.0	8.0	90		(385.9g)	440	1386	17.4	6.0	8.2	90		(280.3g)
2063	104	15.5	6.4	8.1	90		(201.7g)	441	1377	16.1	5.7	8.0	80		(280.3g)
2064	105	16.3	6.0	7.7	90			442	1388	17.6	6.1	8.0	90		408.4g
2065	106	16.3	6.1	8.5	90			443	1389	15.2	6.2	8.2	100		(286.5g)
2066	107	16.7	6.3	7.9	50			444	1400	16.8	5.8	8.3	90		403.1g
2067	108	17.5	5.9	7.8	20			445	1411	16.2	6.3	8.5	100		(273.9g)
2068	109	16.5	5.5	8.1	40			446	1422	17.2	6.7	8.6	90		421.2g
2069	109	16.5	5.7	7.9	40			447	1433	17.6	6.4	8.8	100		(246.3g)
4000	110	16.0	6.5	8.2	60			448	1444	17.0	5.4	8.5	90		(280.3g)
4002	110	16.5	5.7	8.1	70			449	1455	16.9	6.2	7.9	90		(401.3g)
4003	111	16.0	6.0	8.2	70			450	1466	16.5	6.2	7.5	100		278.9g
4004	112	17.5	6.3	7.7	80			451	1477	16.6	6.1	7.7	90		(401.3g)
4005	113	16.5	6.3	7.6	90			452	1488	18.4	5.8	8.2	80		
4006	114	18.0	6.1	7.9	70			453	1499	18.9	5.7	8.4	30		
4007	115	17.2	6.2	7.7	80			454	1510	16.3	6.6	7.8	70		
4008	116	16.6	5.9	8.2	70			455	1521	19.0	5.2	8.8	20		
4009	117	17.1	6.5	9.2	90			456	1532	19.0	5.2	8.8	20		
4010	117	16.1	6.0	8.4	70			457	1543	19.0	5.2	8.8	20		
4011	118	17.0	6.3	7.5	50			458	1554	19.0	5.2	8.8	20		
4012	119	15.1	6.1	7.8	40			459	1565	19.0	5.2	8.8	20		
4013	120	15.8	6.3	7.8	50			460	1576	19.0	5.2	8.8	20		
4014	121	16.6	5.8	8.1	60			461	1587	19.0	5.2	8.8	20		
4015	122	16.0	6.1	7.9	50			462	1598	19.0	5.2	8.8	20		
4016	123	17.0	6.2	8.6	80			463	1609	19.0	5.2	8.8	20		
4017	124	18.2	6.0	8.3	10			464	1620	19.0	5.2	8.8	20		
4018	124	17.7	6.3	8.0	40			465	1631	19.0	5.2	8.8	20		
4019	125	17.1	5.7	7.6	70			466	1642	19.0	5.2	8.8	20		
4020	126	15.4	6.1	7.7	30			467	1653	19.0	5.2	8.8	20		
4021	126	16.5	6.2	8.0	30			468	1664	19.0	5.2	8.8	20		
4022	127	16.6	6.2	8.2	50			469	1675	19.0	5.2	8.8	20		
4023	127	16.1	6.3	7.9	40			470	1686	19.0	5.2	8.8	20		
4024	128	17.3	6.3	8.2	80			471	1697	19.0	5.2	8.8	20		
4025	128	16.7	5.4	8.4	70			472	1708	19.0	5.2	8.8	20		
4026	129	16.3	6.7	8.3	70			473	1719	19.0	5.2	8.8	20		
4027	129	16.7	5.8	8.1	50			474	1730	19.0	5.2	8.8	20		
4028	130	17.7	5.9	7.6	40			475	1741	19.0	5.2	8.8	20		
4029	130	16.2	6.0	7.8	40			476	1752	19.0	5.2	8.8	20		
4030	131	15.5	6.4	8.4	40			477	1763	19.0	5.2	8.8	20		
4031	131	17.3	6.2	8.0	40			478	1774	19.0	5.2	8.8	20		
4032	132	16.3	6.2	7.5	80			479	1785	19.0	5.2	8.8	20		

2号黨 小血類等計測表(3)

〔養分〕 血液成分の推定値

動物 番号	種別・性別 番号	法 量 (mg)			口飼部 残存率 (%)		血上層 O ₂	貯 留 率
		口 徑	高 度	飼 養	飼 養	口 口		
649		9.6	2.4	5.2	50			I
650		8.7	3.1	5.0	20			I
651	206	9.5	2.8	4.9	70	*		I
652		10.0	3.1	5.4	30	*	○	I
653		8.9	2.9	4.7	70	*		I
654		9.7	3.1	5.4	10	*	○	II
655		8.7	3.0	4.9	50	*		I
656	207	9.8	3.2	5.2	80	*		I
657	208	10.0	3.1	5.1	90	*		I (126.4g)
658	209	9.8	2.8	5.1	80	*		I
659		9.4	2.8	5.0	20	*		II
660		10.3	3.2	5.5	40	*		I
661		10.4	3.5	5.4	20	*		I
662	210	9.7	3.2	5.0	80	*	○	I
663	211	9.8	3.4	5.0	70	*		I
664		9.4	3.0	4.8	100	*	○	II (125.4g)
665	212	9.5	2.8	5.1	100	*		I
666	213	10.1	3.1	5.3	90	*	○	I
667	214	10.4	3.2	5.2	100	*	○	I
668	215	9.7	3.2	5.7	70	*		I
669	216	9.9	3.4	4.8	70	*		I
670	217	9.9	3.3	5.0	80	*	○	I
671	218	9.8	3.0	4.7	70	*		I
672	219	8.8	3.0	4.7	90	*		I (91.0g)
673	220	9.7	2.9	5.2	90	*		I
674	221	10.1	3.4	5.1	70	*	○	I (106.4g)
675	222	9.0	3.0	4.7	70	*		I
676	223	9.9	3.1	4.8	100	*	○	I
677	224	9.6	3.3	5.0	100	*		I
678	225	9.3	3.2	5.2	90	*		I
679	226	9.9	3.1	5.0	100	*	○	I
680	227	9.5	3.1	4.4	100	*		I
681	228	9.5	3.1	4.4	*			I
682	229	9.5	3.1	4.4	*			I
683	230	17.8						残 存
684	164	12.2						口 口
685	164	30.5			80			口 口
686	234	5.2			4.4			口 口

付表3 3号窯 焼等計画表(1)

(表上段)は焼成時の位置

焼物 番号	林区・区級 番号	口 法		口線率 焼成率(%)	口 法		口線率 焼成率(%)	口 法		口線率 焼成率(%)	地上場所 位置記号	地上段 O/P	備 考
		口	法		口	法		口	法				
1		15.7	5.8	2.4	10	16.2	5.8	6.7	10				
2		16.8	5.3	6.0	50	16.2	5.3	8.4	10				
3	1	13.9	4.8	2.2	20	15.3	6.0	7.0	10				
4		17.0	5.4	2.8	30	16.4	5.6	2.7	20				
5		17.3	5.9	8.1	30	15.5	5.9	7.3	20				
6		16.9	5.9	2.2	40	15.8	5.9	2.5	30				
7		16.5	5.1	2.1	40	16.0	5.3	8.2	10				
8		18.6	5.0	8.1	10	17.0	5.5	8.5	40				
9		17.0	5.8	8.3	40	14.9	6.4	7.5	10				
10		16.6	6.0	7.4	10	16.1	5.4	7.9	30				
11		14.0	5.3	6.7	20	14.6	4.1	2.4	30				
12		14.7	5.7	2.4	20	15.7	5.2	7.8	30				
13		15.6	5.7	2.5	10	18.5	5.6	7.9	10				
14		17.0	4.1	7.6	20	16.7	6.1	8.0	20				
15		17.2	5.1	7.7	30	16.4	4.8	7.0	40				
16		16.0	5.8	7.3	20	16.2	5.6	7.5	60				
17		16.9	5.9	7.8	30	15.7	5.8	8.3	80				
18		13.5	5.0	6.9	30	15.7	6.1	7.8	10				
19	2	16.3	3.2	2.5	70	17.2	5.2	6.7	20				
20		15.7	5.8	7.3	20	16.9	6.4	7.6	20				
21		15.5	4.5	2.9	10	17.0	5.7	7.5	30				
22		15.0	5.1	7.7	30	17.0	5.4	7.6	10				
23		16.0	5.0	2.9	40	16.9	5.5	8.1	10				
24		14.3	6.2	7.6	30	17.0	5.6	7.8	40				
25		16.8	5.6	8.5	40	16.7	5.4	7.8	30				
26		15.4	5.6	6.8	30	17.2	5.4	8.5	30				
27		17.6	6.1	7.4	10	15.4	5.8	7.9	10				
28		15.1	5.6	8.0	30	16.2	5.1	7.6	90				
29		13.1	6.0	8.1	10	16.8	5.1	6.8	20				
30		15.7	5.6	7.6	50	16.7	5.3	7.3	20				
31		16.7	6.0	8.3	40	16.3	5.4	7.2	30				
32		15.4	6.2	8.1	10	16.7	5.7	7.4	30				
33		16.5	5.6	8.3	50	14.9	5.4	8.1	30				
34	3	16.0	6.2	8.8	30	16.0	5.7	7.5	30				
35		16.1	6.4	8.4	40	16.3	7.1	8.6	10				
36	4	16.6	5.3	7.1	50	16.2	5.2	8.1	50				
37		14.8	5.5	6.9	10	16.1	5.0	7.3	70				
38		16.5	5.7	7.3	10	17.2	5.4	7.7	10				
39		16.0	5.3	7.8	40	15.7	6.1	7.6	10				
40		16.7	6.1	7.9	40	14.1	5.3	7.3	50				
41		16.8	5.2	7.3	10	16.3	5.9	8.1	40				
42		16.5	5.6	7.0	40	17.8	6.1	7.8	40				
43		16.1	5.1	8.4	60	15.9	6.6	7.3	20				
44		16.7	5.4	8.7	30	16.0	6.0	8.0	30				
45		15.0	5.3	7.8	50	17.0	6.0	7.9	30				
46		16.8	5.7	7.7	30	17.0	6.2	8.0	30				
47		15.9	5.7	8.0	10	15.3	5.7	7.5	30				
48		17.4	5.9	7.8	10	15.3	5.8	7.7	60				

3号薫 桧等計測表(2)

「樹上段」は電気的測定位置

建物番号	神位・段位番号	距離 (cm)		口部部積存率 (%)	樹上段出火位置	備考	建物番号	神位・段位番号	距離 (cm)		口部部積存率 (%)	樹上段出火位置	備考
		口部	樹上						口部	樹上			
37		17.2	5.9	8.1			145	24	17.0	5.8	6.3		
38		17.3	6.2	8.0			146		17.7	5.8	8.5		
39		17.3	6.2	7.5			147		17.0	5.4	7.5		
100		17.0	6.1	7.4			148		17.0	5.5	7.7		
101		17.1	6.0	8.3			149		16.3	4.9	8.3		
102		14.6	5.8	7.9			150		16.5	5.6	8.1		
103		17.8	5.5	7.8			151		16.1	6.1	7.2		
104		17.0	5.5	8.1			152		15.8	5.9	7.9		
105		18.1	5.7	7.9			153		16.9	5.4	6.5		
106		16.3	5.7	8.5			154		16.9	5.3	7.4		
107		15.9	5.8	8.5			155		16.2	6.1	7.9		
108		17.7	6.0	8.6			156		17.1	5.8	8.2		
109		16.7	6.2	8.2			157		18.1	5.6	8.2		
110		18.8	6.2	8.1			158		16.1	5.7	8.0		
111	15	16.7	5.1	7.9			159		17.7	5.5	8.1		
112	15	17.0	5.7	8.0			160		17.2	5.8	7.8		
113	16	16.9	5.7	7.7			161		16.0	4.9	6.0		
114		12.2	6.0	8.4			162		16.6	5.1	7.3		
115		16.8	5.4	7.6			163		16.1	5.5	8.9		
116	17	16.6	6.0	8.5			164		17.2	6.1	8.1		
117		12.5	5.4	7.1			165	25	16.6	6.6	7.5		
118		16.7	5.4	7.9			166		16.1	6.1	6.4		
119	18	16.5	5.4	8.5			167		17.2	6.0	8.5		
120	19	16.8	5.6	7.6			168		17.2	5.6	7.2		
121		17.6	5.7	7.2			169		16.4	5.0	8.5		
122		15.2	5.1	7.8			170		16.0	5.8	7.7		
123		16.2	5.0	7.7			171		16.1	5.8	8.6		
124		15.6	5.3	7.3			172		15.9	5.5	7.4		
125		16.6	5.6	7.3			173		17.3	5.4	7.4		
126		13.9	5.9	8.3			174		17.2	6.2	8.2		
127		16.2	6.0	7.8			175		16.0	5.9	7.2		
128		16.2	6.1	7.8			176		17.8	5.4	8.0		
129		16.2	6.1	7.8			177		14.7	5.3	6.0		
130		16.2	6.1	7.8			178	26	17.3	5.6	8.3		
131		15.2	5.6	7.5			179		17.1	5.5	7.7		
132		15.6	5.6	7.9			180		18.1	5.1	7.5		
133		16.8	5.4	7.4			181		15.6	5.5	7.8		
134		17.0	5.4	8.0			182		15.9	6.0	7.5		
135		16.2	6.2	8.1			183		16.8	6.1	7.5		
136		16.8	6.2	7.9			184		16.6	5.8	8.4		
137		16.3	5.8	7.8			185		16.7	5.8	8.0		
138	21	16.0	5.7	8.2			186		17.0	5.4	8.0		
139	22	16.1	5.6	8.3			187	27	17.0	5.7	8.0		
140		16.2	5.6	8.3			188		16.9	5.8	7.9		
141		16.5	5.9	7.7			189		15.5	5.5	8.0		
142		17.3	5.9	8.1			190		16.5	5.7	7.8		
143	23	15.0	6.0	8.9			191		15.5	5.4	8.0		
144		16.6	5.0	8.0			192		17.4	8.5	7.9		

3 号麻 検定計測表(3)

〔麻上段〕: 口維部分の測定位置

遺物 番号	検区-図区 番号	法 量 (mm)		口維部 残存率 (%)	麻上段 残存率 (%)	麻上段 OHP	備 考	検区-図区 番号	遺物 番号	検区-図区 番号	法 量 (mm)		口維部 残存率 (%)	麻上段 残存率 (%)	麻上段 OHP	備 考
		口 径	筒 高								口 径	筒 高				
193		16.8	6.1	8.6	30			341			16.8	5.3	7.9	20		
194		17.0	6.2	7.8	10			342			16.9	5.6	7.7	10		
195		17.6	5.0	7.2	30			343			16.4	6.1	8.2	30		
196		16.5	5.4	7.8	10			344			16.4	5.5	7.7	20		
197		16.2	5.8	8.1	10			345			16.1	5.1	7.6	20		
198		15.8	5.3	7.7	30			346			16.1	5.4	7.6	30		
199		16.6	5.1	7.5	40			347			17.7	5.0	8.0	50		
200		15.9	5.9	7.7	40			348			16.1	5.6	7.8	20		
201		16.2	4.9	7.6	20			349	35		15.6	5.7	7.0	70		
202		16.5	5.9	7.8	20			250			17.6	5.2	8.6	10		
203		17.1	5.1	7.4	20			251			15.0	5.3	8.0	30		○
204		16.1	6.4	7.0	50			252			16.5	5.4	7.6	40		
205		17.2	5.4	8.2	10			253	36		16.0	5.2	8.0	70		
206		16.1	5.3	7.6	40			254	37		16.0	5.5	7.6	50		
207		14.5	5.8	7.7	40			255			16.9	5.5	8.6	10		
208	38	16.1	5.8	8.1	20			256			16.2	5.4	8.0	30		○
209		16.6	5.8	7.8	20			257			16.3	5.4	7.9	20		
210		16.3	5.4	7.6	10			258			16.9	5.1	7.7	20		○
211		16.8	5.6	8.0	40			259	38		17.0	5.4	8.2	70		○
212	29	15.5	5.4	7.4	40			260			17.6	5.4	8.3	10		
213		16.0	5.9	8.1	20			261			16.0	6.1	7.8	10		
214		17.0	5.4	8.0	10			262			15.5	5.4	6.8	10		
215	30	16.8	6.3	6.8	20			263		小根群 (196.8.8)	15.9	5.6	8.0	10		
216	31	16.5	5.5	7.6	90			264			16.4	5.8	8.1	10		
217		15.2	5.6	7.3	20			265			16.7	6.5	8.1	10		
218		16.4	5.8	7.6	10			266			16.9	5.6	7.6	40		○
219		16.7	6.2	8.2	70			267			15.8	5.6	8.3	30		
220		14.9	5.5	7.2	10			268			16.3	5.6	8.5	20		
221		17.1	5.7	7.8	20			269			16.3	5.6	7.9	30		○
222		14.5	5.9	7.6	10			270			16.7	5.4	7.5	20		○
223		15.5	6.2	7.7	20			271			16.8	5.8	7.7	20		○
224		15.0	5.6	7.8	20			272			16.0	4.9	7.0	10		○
225		16.0	6.1	8.0	30			273			16.0	6.3	7.7	20		
226		14.9	5.6	8.1	10			274			16.2	5.6	7.8	20		
227	32	15.4	5.9	7.4	40			275			15.1	6.0	7.7	20		
228		16.3	5.8	7.9	20			276			16.6	5.6	7.0	20		
229	34	17.7	5.3	7.4	20			277			16.0	6.1	8.0	30		
230		17.2	4.8	8.2	30		○	278			15.2	5.2	7.5	20		
231		17.6	6.1	8.3	30			279			17.0	4.9	7.7	20		○
232		16.3	5.7	8.1	20			280			17.4	5.8	7.7	20		○
233		14.9	5.8	7.7	10			281			17.2	5.7	7.8	10		○
234		16.6	6.1	9.0	20			282			15.3	6.0	7.9	20		○
235		15.5	5.8	8.2	30			283			16.0	5.6	7.7	20		
236		16.2	5.4	8.3	50			284			16.6	5.4	8.2	10		
237		16.9	5.1	7.5	10			285	39		17.4	5.5	8.0	50		○
238		17.0	6.1	8.5	30			286			16.0	5.6	6.8	40		○
239		16.2	6.2	7.4	30			287			17.2	5.0	7.5	30		○
240		17.2	5.8	8.0	30			288			15.1	5.6	7.9	20		○

3号黨 梳等計測表(4)

(船上段)は機成時の測定位置

測物 番号	時刻・区間 番号	距 離 (m)			口網部 割合率 (%)	船上段 OHP	備考 (279.3 号)	測物 番号	時刻・区間 番号	距 離 (m)			口網部 割合率 (%)	船上段 OHP	備考
		口 徑	距 高	口 徑						距 高	口 徑	距 高			
289		17.1	6.3	6.0	90		337			16.3	6.0	7.6			
290		17.0	5.4	7.3	70		338			16.3	4.8	7.0			
291		16.2	5.6	7.2	10		339			15.8	5.4	7.7			
292		16.3	6.2	7.8	20		340			17.1	5.8	8.4			
293		16.7	6.1	7.6	10		341			16.5	5.7	8.1			
294		16.5	5.5	7.8	10		342			16.3	5.9	8.2			
295		17.8	5.7	8.0	10		343			16.9	5.6	8.8			
296		16.5	5.2	6.9	20		344	47		15.8	5.8	7.6		小形口網部線	
297		15.3	5.5	7.4	30		345			17.3	5.6	7.8			
298		16.7	4.1	7.9	40		346			16.0	6.2	7.4			
299		16.3	5.2	7.7	10		347	48		16.0	5.1	7.5			
300		17.0	5.8	7.5	10		348			16.7	5.1	7.8			
301		17.7	5.0	8.3	10		349			16.7	5.4	7.7			
302		16.6	5.6	7.4	30		350			16.8	5.2	7.9			
303		17.6	5.5	9.1	10		351	49		16.7	5.8	8.4			
304		16.3	6.1	7.9	20		352			16.4	5.7	7.9			
305		17.7	5.1	7.8	10		353			17.0	5.1	7.5			
306		17.2	5.2	7.8	10		354			16.3	5.0	7.2			
307	40	15.0	5.0	7.6	50		355			17.5	5.1	8.1			
308		16.6	5.4	7.4	50		356			17.4	5.4	7.8			
309		16.8	5.6	8.1	20		357			16.5	5.2	7.3			
310		17.0	5.6	7.2	20		358			16.8	5.8	7.8			
311		17.0	5.6	8.3	30		359	50		16.8	5.9	7.8			
312	42	16.0	5.6	8.1	40		360			17.2	5.4	7.6			
313		16.0	5.4	7.5	40		361			17.0	5.7	7.8			
314		17.0	5.9	7.6	30		362	52		16.1	4.9	8.3			
315		16.7	5.8	8.7	30		363	53		16.5	5.5	8.0			
316		17.0	5.6	7.0	20		364			15.7	6.0	7.7			
317		17.2	5.9	7.6	30		365			16.6	5.9	7.3			
318		15.7	5.9	7.9	20		366			16.6	5.6	7.7			
319		16.0	5.9	7.2	20		367			16.9	5.6	7.4			
320		16.4	5.6	7.2	40		368			17.8	5.2	7.9			
321	44	17.2	5.7	7.4	50		369			18.5	5.0	8.2			
322		16.9	6.1	8.0	10		370	54		16.0	5.7	8.5			
323		16.5	5.1	7.1	20		371			16.0	5.7	7.5			
324		15.3	5.0	7.6	10		372			16.3	5.8	7.6			
325		15.5	5.1	7.1	30		373			17.6	5.6	6.9			
326		16.0	5.6	7.6	40		374			16.9	5.7	8.1			
327		16.0	6.1	7.8	20		375			16.1	5.5	7.7			
328		16.6	5.1	7.2	20		376	55		16.9	5.5	8.2			
329		16.3	5.1	7.8	30		377			16.7	5.9	8.2			
330	45	15.8	5.6	7.8	40		378			16.4	5.5	8.3			
331		16.8	6.1	7.6	30		379			17.4	5.3	8.5			
332		16.0	5.8	8.3	10		380			15.9	6.1	7.8			
333		16.3	5.4	7.3	10		381			17.3	5.5	7.4			
334		16.0	5.5	7.5	30		382			16.8	4.9	8.0			
335		15.2	5.0	8.0	30		383			16.9	5.4	7.1			
336	46	13.3	5.1	7.2	50		384			18.0	5.3	7.8			

3号黨 梳等計測表(6)

〔表上段〕は風速時の風向位置

建物 番号	棟号・区画 番号	棟上段 OHP	備考	建物 番号	棟号・区画 番号	法 量 (m)		口縁部 傾斜率 (%)	地上基準 位置	地上基準 位置	棟上段 OHP	備考
						口 径	高 度					
481						16.3	5.6	7.3	10			
482				529	529	16.3	5.6	8.0	20			
483				530	530	16.5	5.5	7.5	40			
484				531	531	16.5	5.2	7.4	20			
485				532	532	16.3	6.1	7.5	30			
486				533	533	16.0	5.6	7.5	60			
487				534	534	17.1	5.8	8.0	10			
488				535	535	16.4	5.7	7.4	10			
489				536	536	17.5	5.8	7.3	70			
490				537	537	15.5	5.6	8.0	40			
491				538	538	15.0	5.5	7.5	20			
492				539	539	17.0	5.8	7.9	10			
493				540	540	16.9	5.4	7.8	10			
494				541	541	15.5	5.7	7.5	30			
495				542	542	15.5	4.8	7.2	10			
496				543	543	16.1	5.6	7.4	60			
497				544	544	15.8	5.5	7.7	60			
498				545	545	17.9	5.3	7.5	10			
499				546	546	15.5	6.2	7.7	30			
500				547	547	17.2	5.3	8.1	10			
501				548	548	16.7	4.6	7.5	30			
502				549	549	16.0	5.5	7.8	30			
503				550	550	15.3	5.4	7.0	10			
504				551	551	16.9	5.7	7.4	20			
505				552	552	16.2	6.1	7.9	50			
506				553	553	16.7	6.0	7.7	50			
507				554	554	16.7	5.5	7.4	30			
508				555	555	16.4	5.3	7.8	30			
509				556	556	16.5	5.3	7.9	70			
510				557	557	17.0	4.5	8.0	10			
511				558	558	16.4	5.3	7.6	70			
512				559	559	15.8	6.0	7.3	10			
513				560	560	16.1	5.8	8.0	60			
514				561	561	17.3	5.8	8.6	30			
515				562	562	16.3	5.3	7.9	60			
516				563	563	16.6	5.4	8.1	60			
517				564	564	16.0	5.4	7.5	10			
518				565	565	17.5	6.0	8.2	50			
519				566	566	14.9	5.7	8.1	30			
520				567	567	16.5	5.4	8.6	10			
521				568	568	15.5	5.2	7.8	60			
522				569	569	16.9	5.0	7.1	100			
523				570	570	15.2	4.9	8.0	20			
524				571	571	15.9	5.4	7.8	40			
525				572	572	16.9	5.2	6.9	40			
526				573	573	17.0	5.8	8.0	70			
527				574	574	16.3	5.6	7.1	50			
528				575	575	14.9	5.2	7.3	90			
529				576	576	17.5	5.3	7.8	60			

〔表上段〕は風速時の風向位置

〔表上段〕は風速時の風向位置

〔表上段〕は風速時の風向位置

〔表上段〕は風速時の風向位置

3号窠 桫欏等計測表(8)

〔録上段〕口縁部の高心位置

遺物 番号	神位・図取 番号	法 量 (cm)			口縁部 残存率 (%)	出土場所 坑室位置	録上段 OpP	備 考	遺物 番号	神位・図取 番号	法 量 (cm)			口縁部 残存率 (%)	出土場所 坑室位置	録上段 OpP	備 考
		口 径	口 縁 高	高心位置							口 径	口 縁 高	高心位置				
673		17.7	5.6	8.3	30			721		15.8	5.4	7.4	20				
674		15.6	4.6	7.5	10			722	146	16.5	5.9	8.0	70				
675		16.2	6.0	7.9	30	♀		723		16.4	6.1	8.0	20				
676		17.0	5.5	7.7	20	♀		724	147	15.1	5.1	7.8	80				
677		16.6	6.0	8.2	20	♀		725		18.0	5.4	7.6	10				
678		17.2	5.5	7.8	30	♀		726	148	17.5	5.4	8.2	60				
679		17.8	5.8	8.5	30	♀		727	149	15.4	5.2	8.1	60				
680		17.0	6.3	8.2	10	♀		728	150	16.4	5.6	8.0	70				
681	135	16.2	5.7	7.8	60	♀		729		16.5	4.5	7.6	30				
682		15.1	5.7	7.6	30	♀		730	151	15.4	6.1	7.7	50				
683		16.6	5.1	7.9	30	♀	○	731	152	16.7	5.3	8.0	80				
684		15.7	6.4	8.1	50	♀		732	153	16.3	6.2	7.5	80				
685		14.6	5.4	6.9	30	♀		733		16.0	5.5	8.4	30				
686		15.4	6.0	8.1	40	♀		734		16.0	5.1	7.7	40				
687		17.6	6.0	7.7	30	♀		735		16.3	5.6	7.8	10			○	
688	136	17.0	5.8	7.5	60	♀		736		15.8	5.8	7.3	20				
689	137	16.2	5.5	7.8	60	♀		737		16.0	5.6	7.6	20			○	
690		15.8	5.4	7.6	70	♀		738		17.3	5.3	8.6	20				
691		15.0	5.8	7.4	10	♀		739		17.0	5.4	7.2	20				
692		16.0	5.7	8.0	40	♀		740		16.7	5.6	7.5	20			○	
693	138	16.3	5.9	7.3	50	♀		741		16.0	5.9	8.0	20				
694		16.7	5.0	7.8	20	♀		742		15.7	5.1	7.3	30			○	
695		15.6	5.1	7.6	20	♀		743		17.0	5.6	7.8	10				
696		17.2	6.1	7.3	20	♀		744		17.0	5.4	8.1	30				
697		16.5	5.9	7.5	10	♀		745		16.1	5.9	8.3	30				
698		16.8	5.8	7.1	10	♀		746		17.4	6.2	7.8	20				
699		15.0	5.7	7.6	50	♀		747		16.2	5.5	8.4	30				
700	139	16.1	5.0	7.7	80	♀		748		16.8	5.7	7.7	10				
701		15.8	5.8	7.4	50	♀		749		17.0	6.4	8.7	20			○	
702	140	16.4	5.9	7.2	60	♀		750		17.0	5.5	7.8	10				
703	141	16.3	5.5	8.0	100	♀	200.0 g	751	154	15.9	5.5	8.2	50				
704		15.2	5.0	8.0	20	♀		752	155	17.1	6.5	8.1	40				
705		17.4	5.2	7.6	10	♀		753		16.6	5.2	7.9	30				
706		17.4	5.8	7.5	10	♀		754		16.7	5.8	8.0	50				
707	142	16.4	6.4	8.0	70	♀		755	156	16.0	5.8	7.7	50				
708	143	17.0	5.8	7.8	70	♀		756		17.1	5.2	8.1	40				
709		17.4	5.7	7.8	40	♀		757	157	16.4	6.3	7.7	60			○	
710	144	15.5	5.4	7.5	50	♀		758		16.9	5.1	7.8	60				
711	145	17.7	6.0	8.0	50	♀		759	158	17.1	5.5	7.4	60				
712		16.4	5.2	7.8	30	♀		760	159	15.7	5.3	7.3	100				
713		16.6	6.3	7.3	20	♀		761	161	16.3	5.5	7.9	60				
714		16.5	6.1	7.7	10	♀		762	160	16.0	5.5	8.0	50			○	
715		16.3	5.8	7.2	20	♀		763		16.6	6.0	8.2	100				
716		16.8	6.1	8.1	30	♀		764	162	16.0	6.2	8.4	60				
717		14.8	5.4	7.8	10	♀		765		16.5	6.0	7.6	100				
718		16.0	5.6	7.7	30	♀		766		15.8	6.3	7.5	50				
719		16.6	5.0	7.2	30	♀		767		16.0	5.6	7.7	30				
720		16.6	5.7	7.4	30	♀		768		15.5	4.9	8.5	30			200.0 g	

3号黨 候補計測表(10)

(欄上段)は候補時の推計位置

建物 番号	種別・区画 番号	口数	面積 (㎡)	口数/面積 (%)	出立率	欄上段 O/D	備考	建物 番号	種別・区画 番号	口数	面積 (㎡)	口数/面積 (%)	出立率	欄上段 O/D	備考
605		16.9	5.4	7.8	20			913		15.0	6.3	7.8			
606		17.1	5.8	7.8	19			914		17.5	6.0	8.1			
607		16.1	6.0	8.1	30			915		15.7	5.2	7.4			
608		17.0	6.0	8.3	40			916		17.6	5.7	8.8			
609		16.2	5.4	7.7	30			917		15.9	6.0	7.9			
610		15.9	5.1	8.0	50			918		16.4	6.4	8.0			
611	187	16.8	5.2	7.8	40		遺?	919		16.4	4.8	7.2			
612		15.9	5.8	7.9	50			920		16.4	5.6	8.5			
613		16.5	5.8	8.2	19			921		16.2	5.8	8.2			
614		16.8	6.7	7.5	30			922		17.1	6.0	8.6			
615		16.7	5.7	8.0	30			923	208	15.7	6.0	7.6			
616		17.9	5.8	7.6	10			924		18.1	5.8	7.3			
617		17.8	6.1	7.4	40			925	212	17.0	5.0	7.2			
618		17.2	5.8	7.2	60			926	212	17.1	5.7	7.9			
619		17.7	5.2	6.9	30			927	214	17.9	6.2	8.0			
620		16.9	5.4	7.8	30			928	215	17.2	5.8	7.9			
621		16.9	5.5	7.5	40			929	216	16.3	5.7	7.8			
622	106	15.7	6.1	8.4	100		311.2g	930	213	16.3	5.8	7.7			
623	180	17.0	5.7	7.6	80			931	217	16.4	5.9	8.1			
624		17.7	5.6	9.5	30			932	269	16.2	5.4	7.5			
625		16.8	5.8	8.0	30			933	210	16.0	5.3	7.9			
626	100	16.6	5.6	7.9	30			934	211	16.8	5.7	8.4			
627	191	17.1	5.2	8.5	70			935							
628	192	17.0	6.1	8.0	80										
629	193	16.5	4.3	7.6	70										
630	194	16.6	5.8	7.8	80										
631		16.0	5.6	7.6	30										
632		16.2	4.8	8.0	30										
633		16.1	5.4	7.8	30										
634	195	17.7	6.1	8.7	70										
635	196	16.3	6.3	7.8	30										
636	197	16.4	6.0	7.7	80										
637	198	16.2	5.7	7.2	80										
638	199	15.9	6.2	7.3	80										
639	200	15.9	5.9	7.8	80										
640	201	16.9	5.9	7.2	100										
641	202	16.2	5.6	7.2	100										
642		16.1	5.3	8.0	30										
643		16.8	5.9	8.1	70										
644		17.1	5.4	7.3	80										
645		17.6	5.1	8.6	80										
646	203	16.6	5.7	7.1	70										
647		16.9	5.8	7.2	80										
648	204	16.3	5.4	7.2	80										
649	205	16.7	5.4	7.4	70										
650		16.3	5.6	7.2	50										
651		16.9	5.5	8.5	80										
652		17.8	5.7	8.9	80										

付表 4 3号黨 小血類等計測表(1)

遺物 番号	神位・位階 番号	法 量 (mm)		口輪部 有骨率 (%)	出土地層 風乾位置	墓上段 OHP	修 葬 等	遺物 番号	神位・位階 番号	法 量 (mm)		口輪部 有骨率 (%)	出土地層 風乾位置	墓上段 OHP	修 葬 等
		口 徑	高 度							口 徑	高 度				
940		10.2	2.8	5.2	40	○	1	968		10.7	3.1	70	○	1	
941		9.5	3.0	5.3	40	○	1	980	238	9.2	2.8	6.7	70	○	1
942	225	9.4	2.0	4.9	30	○	1	990		9.2	2.9	4.9	50	○	1
943		10.8	2.8	5.5	50	○	1	991		10.6	3.4	4.8	50	○	1
944		9.7	2.6	5.1	60	○	1	992		9.9	3.1	5.2	80	○	1
945		9.9	3.2	5.5	50	○	1	993	239	9.3	3.0	5.2	70	○	1
946	226	10.0	3.0	4.7	80	○	1	994		9.8	3.1	5.3	90	○	1
947		10.2	2.8	5.1	30	○	1	995		9.7	2.9	5.4	80	○	1
948		9.6	2.8	5.2	40	○	1	996	240	9.5	2.2	5.5	80	○	1
949	227	9.7	2.9	4.8	100	○	1	997		9.7	2.8	5.5	40	○	1
950		10.3	3.3	5.2	50	○	1	998		9.8	3.0	5.4	40	○	1
951		9.5	3.0	4.8	60	○	1	999		10.0	2.5	5.4	80	○	1
952		9.6	3.2	5.0	60	○	1	1000	241	8.7	2.6	5.0	80	○	1
953		9.5	2.7	5.2	50	○	1	1001	242	9.4	3.1	5.5	90	○	1
954		9.4	2.5	5.1	30	○	1	1002		9.5	3.2	5.0	90	○	1
955		10.2	2.9	5.2	50	○	1	1003		9.5	2.9	5.7	60	○	1
956		9.5	2.9	5.3	50	○	1	1004		9.8	2.8	5.1	80	○	1
957		9.6	3.0	5.2	60	○	1	1005	243	9.9	2.8	5.2	60	○	1
958		8.7	2.8	4.6	50	○	1	1006		9.4	2.9	5.0	70	○	1
959		9.5	2.7	5.2	50	○	1	1007	244	9.5	2.9	5.0	80	○	1
960	228	9.3	3.0	4.6	80	○	1	1008	245	9.9	3.1	5.0	70	○	1
961		9.8	2.8	4.6	50	○	1	1009		9.8	2.9	5.0	50	○	1
962		9.7	2.8	5.3	40	○	1	1010		9.8	3.1	5.2	80	○	1
963		9.6	3.0	5.1	90	○	1	1011		9.8	3.1	5.2	80	○	1
964	229	10.2	2.2	3.5	70	○	1	1012	246	9.4	3.3	5.4	80	○	1
965		10.2	3.1	5.2	40	○	1	1013		9.8	2.6	5.3	70	○	1
966	230	9.7	3.1	5.1	70	○	1	1014		9.5	2.9	5.0	40	○	1
967		9.7	3.0	5.3	40	○	1	1015		9.4	2.8	4.7	80	○	1
968	232	9.4	2.5	5.2	90	○	1	1016	247	10.3	3.6	5.7	70	○	1
969		9.6	3.2	4.8	80	○	1	1017		10.3	2.6	5.2	60	○	1
970	231	9.4	2.9	4.8	80	○	1	1018	248	9.6	3.1	5.2	60	○	1
971		9.7	2.8	4.9	70	○	1	1019		9.9	2.9	5.1	30	○	1
972	232	9.7	2.2	5.5	60	○	1	1020		9.7	3.1	5.0	60	○	1
973		9.7	2.2	5.5	60	○	1	1021		9.9	2.9	5.0	60	○	1
974	233	9.4	2.8	4.9	80	○	1	1022	249	9.2	2.9	4.9	70	○	1
975		9.8	3.0	5.2	80	○	1	1023		10.1	2.8	4.9	50	○	1
976		10.1	3.1	5.2	90	○	1	1024		10.4	3.5	5.1	80	○	1
977		9.5	2.9	4.8	60	○	1	1025		10.4	2.6	5.3	60	○	1
978		9.8	2.9	5.2	70	○	1	1026		9.6	2.4	5.3	60	○	1
979	234	10.8	2.3	5.4	70	○	1	1027		10.1	2.8	5.4	90	○	1
980	235	9.3	2.9	4.8	80	○	1	1028		9.5	2.9	5.2	60	○	1
981		9.2	2.4	5.2	40	○	1	1029		8.9	2.7	5.2	40	○	1
982		10.3	3.6	5.0	60	○	1	1030		9.5	3.4	4.9	50	○	1
983	238	10.3	3.6	5.0	60	○	1	1031	250	9.0	2.8	4.7	70	○	1
984	237	10.0	3.1	5.3	70	○	1	1032		8.8	2.8	5.0	90	○	1
985		10.2	2.8	5.0	70	○	1	1033		9.0	2.7	5.1	40	○	1
986		10.4	2.0	5.2	80	○	1	1034	252	9.6	3.0	5.2	70	○	1
987		10.1	2.9	5.2	70	○	1	1035	253	8.6	2.7	5.5	70	○	1

【墓上段】は風乾時の墓上位置

3号黨 小皿類等計測表(2)

「種上段」は種成時の種名位置

種物 番号	種別・種名 番号	口 徑	法 量 (cm)	口 徑	種 高	口 鉢 類 種別率 (%)	種上層所 灰質含量	種上段 ChP	種 号	種物・種名 番号	口 徑	法 量 (cm)	口 鉢 類 種別率 (%)	種上層所 灰質含量	種上段 ChP	種 号	種物・種名 番号	口 鉢 類 種別率 (%)	種上層所 灰質含量	種上段 ChP	種 号	種物・種名 番号	
1006		10.9	3.2	4.8		50			1	1084	9.2	2.1	5.1				1084	50					
1007		10.9	3.0	5.0	40				1	1085	9.2	2.1	5.2				1085	40					
1008		10.9	3.0	4.8	40				1	1086	9.1	2.2	4.9				1086	40					
1009	254	3.6	2.9	4.8	70				1	1087	8.9	2.0	4.8				1087	70					
1010		3.5	3.0	5.2	70				1	1088	8.4	2.0	4.8				1088	70					
1011	255	4.7	2.6	4.9	40				1	1089	8.4	2.0	4.9				1089	40					
1012		3.9	2.7	5.2	60				1	1090	8.4	1.6	4.9				1090	60					
1013		10.9	3.8	5.1	30				1	1091	8.8	1.6	3.8				1091	30					
1014	256	3.5	3.8	5.2	70				1	1092	8.7	1.2	4.1				1092	70					
1015		3.5	2.2	5.2	30				1	1093	8.6	1.2	4.1				1093	30					
1016	257	2.2	2.8	4.6	70				1	1094	8.6	1.9	4.3				1094	70					
1017		3.5	3.3	5.3	40				1	1095	8.4	1.5	4.4				1095	40					
1018	258	3.0	3.6	5.4	40				1	1096	9.0	1.6	4.4				1096	40					
1019		3.8	3.1	5.3	30				1	1097	8.8	1.6	4.4				1097	30					
1020		3.8	3.0	5.2	30				1	1098	8.8	1.8	4.4				1098	30					
1021		3.6	3.2	5.2	30				1	1099	8.8	1.8	4.4				1099	30					
1022		3.9	3.2	5.2	30				1	1100	8.8	1.8	4.4				1100	30					
1023	259	3.9	3.5	5.2	70				1	1101	9.4	3.1	5.0				1101	70					
1024		3.9	3.5	5.2	70				1	1102	9.4	3.1	5.0				1102	70					
1025		3.6	3.2	5.3	40				1	1103	9.3	3.0	5.2				1103	40					
1026	260	3.2	2.6	5.3	40				1	1104	9.8	3.7	5.0				1104	40					
1027	261	3.6	3.1	5.2	30				1	1105	9.1	2.9	4.8				1105	30					
1028		3.6	2.9	4.2	30				1	1106	10.0	3.1	5.0				1106	30					
1029	262	3.0	3.2	5.0	70				1	1107	9.3	2.8	5.1				1107	70					
1030		3.8	2.6	4.4	70				1	1108	9.6	3.1	5.3				1108	70					
1031	264	4.8	2.7	4.7	70				1	1109	10.1	3.2	5.3				1109	70					
1032		4.6	2.9	4.6	40				1	1110	9.3	2.8	5.0				1110	40					
1033		5.0	2.8	4.6	70				1	1111	9.3	3.0	5.1				1111	70					
1034		4.2	2.4	4.8	50				1	1112	10.1	3.1	5.1				1112	50					
1035	331	4.7	2.7	4.9	70				1	1113	9.2	3.1	4.9				1113	70					
1036		3.5	3.8	4.9	70				1	1114	9.7	3.0	5.2				1114	70					
1037		3.7	2.7	4.9	30				1	1115	9.5	3.1	5.1				1115	30					
1038	334	3.7	3.3	4.7	70				1	1116	9.7	3.0	4.8				1116	70					
1039		3.0	2.9	5.3	40				1	1117	9.8	2.6	5.8				1117	40					
1040		3.2	2.9	5.3	40				1	1118	8.9	3.1	4.9				1118	40					
1041	335	3.2	2.8	5.0	70				1	1119	9.6	3.4	5.8				1119	70					
1042		3.9	2.9	5.1	40				1	1120	9.7	3.2	5.0				1120	40					
1043		3.7	2.6	4.7	40				1	1121	9.4	3.2	5.0				1121	40					
1044	336	3.7	2.6	4.7	40				1	1122	9.4	3.2	5.1				1122	40					
1045		3.0	2.8	5.4	30				1	1123	9.6	2.9	5.4				1123	30					
1046	339	3.0	2.7	4.7	80				1	1124	9.1	2.9	5.1				1124	80					
1047		3.8	4.0	4.0	60				1	1125	9.5	3.2	5.0				1125	60					
1048	263	2.8	3.6	4.0	90				1	1126	9.3	2.6	5.9				1126	90					
1049		4.1	3.9	4.2	70				1	1127	9.7	3.1	5.4				1127	70					
1050		4.0	3.6	4.0	30				1	1128	9.2	3.2	5.2				1128	30					
1051		4.0	3.6	4.0	30				1	1129	9.1	3.1	5.2				1129	30					
1052	262	4.3	3.4	4.0	70				1	1130	9.5	3.2	5.3				1130	70					
1053		3.7	3.8	5.4	40				1	1131	8.9	2.8	5.7				1131	40					

3号黨 小血類等計測表(3)

〔船上段〕 江船或船内重山位置

遺物 番号	林区・区別 番号	法 量 (cm)		口 径 口径部 幅(巻率) (%)	船上段 O印	船上段所 位置(古羅)	遺物 番号	林区・区別 番号	法 量 (cm)		口 径 口径部 幅(巻率) (%)	船上段所 位置(古羅)
		口 径	巻 高						口 径	巻 高		
1332		8.9	2.8	5.2			1180	207	9.5	2.9	5.2	
1333		9.5	2.9	5.4	○		1181		9.6	3.1	4.9	○
1334		9.4	3.2	5.0	○		1182	208	9.9	3.0	5.8	○
1335		9.6	3.1	5.3	○		1183	209	9.3	2.8	5.0	○
1336	276	9.5	2.8	5.2	○		1184		10.0	3.0	5.5	○
1337		10.0	2.9	5.0	○		1185	300	9.4	2.1	5.0	○
1338	277	10.0	2.9	5.4	○		1186		9.7	2.9	5.0	○
1339	278	10.5	3.3	5.3	○		1187	301	9.3	2.4	5.0	○
1340	279	10.0	3.4	5.3	○		1188		9.6	2.7	5.3	○
1341	280	9.4	3.2	5.3	○		1189	302	8.8	3.3	5.4	○
1342		9.8	2.9	5.4	○		1190		9.2	3.0	5.4	○
1343		9.7	3.0	5.3	○		1191	303	9.0	3.0	4.7	○
1344		9.6	3.0	5.5	○		1192	304	8.7	2.8	4.4	○
1345	281	9.5	3.2	5.0	○		1193	305	9.3	3.1	5.3	○
1346		9.0	3.1	5.4	○		1194		9.8	2.9	5.6	○
1347	282	9.5	3.1	5.2	○		1195		9.9	2.0	5.4	○
1348	283	9.3	2.8	4.9	○		1196		8.9	3.1	5.3	○
1349		9.8	2.7	5.2	○		1197		9.4	3.3	5.4	○
1350	284	8.9	2.9	4.9	○		1198		10.0	3.1	4.5	○
1351		10.0	2.8	5.6	○		1199		9.5	2.9	5.2	○
1352	285	8.5	2.8	4.7	○		1200		9.2	3.1	5.5	○
1353		9.9	3.1	5.5	○		1201		8.9	3.0	4.9	○
1354	286	9.6	3.0	5.0	○		1202		9.7	2.9	5.0	○
1355	287	9.7	3.1	5.5	○		1203		9.7	2.9	5.1	○
1356	288	9.5	3.0	5.0	○		1204		9.7	3.0	5.2	○
1357	289	9.5	3.1	5.0	○		1205		9.4	2.2	5.1	○
1358		9.8	2.9	5.5	○		1206		9.7	2.4	4.9	○
1359	290	10.2	3.1	5.4	○		1207		10.0	3.0	5.4	○
1360	291	9.4	3.3	4.7	○		1208		10.2	3.1	5.2	○
1361	292	9.0	2.8	5.0	○		1209		10.3	3.4	5.2	○
1362		9.2	2.9	5.3	○		1210	306	9.8	3.2	5.6	○
1363	293	9.7	5.2	5.4	○		1211	307	10.2	3.4	5.3	○
1364		9.5	3.1	5.0	○		1212		10.0	3.0	5.3	○
1365		9.4	3.1	4.9	○		1213	309	9.0	3.0	5.0	○
1366		8.8	2.8	4.8	○		1214		9.1	2.8	5.0	○
1367		8.9	3.0	5.1	○		1215		9.5	3.2	5.5	○
1368		9.7	3.2	5.3	○		1216		9.1	2.5	4.8	○
1369		10.0	3.1	5.4	○		1217	308	9.3	3.1	5.4	○
1370		9.5	2.6	5.1	○		1218		9.6	2.8	5.2	○
1371		9.4	3.0	5.0	○		1219		10.0	2.8	5.4	○
1372		9.7	2.9	5.5	○		1220		9.2	2.7	5.2	○
1373		10.7	3.1	5.2	○		1221	310	10.6	2.9	5.3	○
1374		9.2	3.3	5.4	○		1222	311	9.5	3.9	5.4	○
1375		9.1	3.2	5.0	○		1223		10.1	3.1	5.5	○
1376	294	9.7	3.3	5.8	○		1224	312	9.0	3.0	5.4	○
1377		8.9	3.0	5.4	○		1225		9.7	2.6	5.8	○
1378	295	9.5	3.0	5.0	○		1226		9.6	3.0	5.2	○
1379	296	9.2	3.1	5.3	○		1227	313	9.7	2.9	5.5	○

3号案 小血續等計測表(4)

「最上段」は最端時の値を記載

観測 番号	林区・区段 番号	口径 mm	径 mm	高 mm	口縁部 残存率(%)	最上段 O円	部玉等	観測 番号	林区・区段 番号	口径 mm	径 mm	高 mm	口縁部 残存率(%)	最上段 O円	部玉等
1229		9.1	3.2	5.2	50			1276		9.4	2.7	4.7	50		
1229		8.8	3.0	4.7	50			1277		9.5	3.0	5.4	60		
1230	314	8.8	3.0	5.3	60			1278		9.5	3.0	5.0	50		
1231		9.6	2.8	5.0	100			1279		8.9	2.8	5.1	50		
1232	315	9.7	2.8	5.4	60		115.1#	1280		9.4	3.1	5.4	50		
1233		9.3	3.2	5.5	40			1281		9.1	2.6	4.9	20		
1234	316	9.4	3.1	5.7	80			1282		9.0	2.8	5.2	50		
1235	317	9.8	3.0	5.4	80			1283		9.3	2.7	4.8	50		
1236	318	9.2	3.4	4.7	90			1284		10.0	3.2	5.2	50		
1237		9.5	3.3	4.8	60			1285		9.3	2.9	5.3	10		
1238		10.0	3.0	5.5	50			1286		8.6	3.1	4.7	50		
1239		9.1	2.8	5.3	50			1287		8.7	2.7	4.8	50		
1240		9.4	2.7	4.7	80			1288	326	8.5	2.5	5.2	60		
1241		9.8	3.0	5.2	40			1289	327	8.7	2.9	4.8	60		
1242		9.4	3.0	5.2	50			1290	328	9.1	2.8	4.7	80		
1243		9.1	2.9	4.7	50			1291		9.5	3.1	5.1	40		
1244	319	9.5	2.9	4.9	90		131.1#	1292		9.2	2.8	4.9	100		
1245		9.9	3.4	5.2	100			1293		9.9	3.1	5.2	90		
1246	320	9.3	3.2	5.4	90			1294	341	9.0	2.6	4.6	100		
1247		9.4	3.0	5.2	40			1295		10.0	2.8	4.7	80		
1248	321	9.2	3.0	4.6	90			1296		9.8	2.8	5.1	80		
1249		9.1	3.2	5.3	70			1297		9.0	2.8	4.9	50		
1250		9.7	2.9	5.6	80			1298		10.2	2.7	5.2	60		
1251	322	9.5	3.2	5.4	70			1299		9.9	2.7	4.7	70		
1252	323	9.2	2.8	4.8	90			1300	342	9.4	2.6	4.8	90		
1253	340	10.0	3.1	5.0	90			1301	343	9.8	2.6	5.0	60		
1254		10.0	2.9	5.2	90			1302	344	9.7	3.0	5.0	90		
1255		10.4	3.1	5.4	50			1303	345	9.8	2.9	4.7	100		
1256		9.1	3.3	5.5	90			1304	346	9.3	2.9	4.7	90		
1257		9.5	3.0	5.0	80			1305	360	9.4	2.9	4.7	90		
1258	324	9.7	3.1	5.5	80			1306	331	8.8	3.4	5.5	10		
1259		9.1	2.6	4.7	90			1307	363	8.8	3.4	4.4	10		
1260	325	9.1	2.9	4.8	90			1308	364	8.8	3.4	4.4	10		
1261		8.6	2.7	4.7	90			1309	365	8.8	3.4	4.4	10		
1262		9.7	3.1	4.8	90			1310	361	8.8	3.4	4.4	10		
1263		9.6	2.9	5.3	70			1311	362	8.8	3.4	4.4	10		
1264		9.9	2.6	5.2	90			1312	330	9.1	2.7	4.8	60		
1265		10.3	3.0	5.3	90										
1266		9.5	3.1	5.5	60										
1267		9.5	3.4	5.4	50										
1268		9.3	2.6	5.2	50										
1269		9.9	2.7	5.0	50										
1270		9.4	3.0	5.2	40										
1271		9.5	3.3	5.2	40										
1272		10.2	3.1	5.4	50										
1273		9.4	2.7	4.7	50										
1274		10.1	2.7	5.0	50										
1275		10.1	3.1	4.5	50										

圖 版

図版1 2号窯遺構(1)

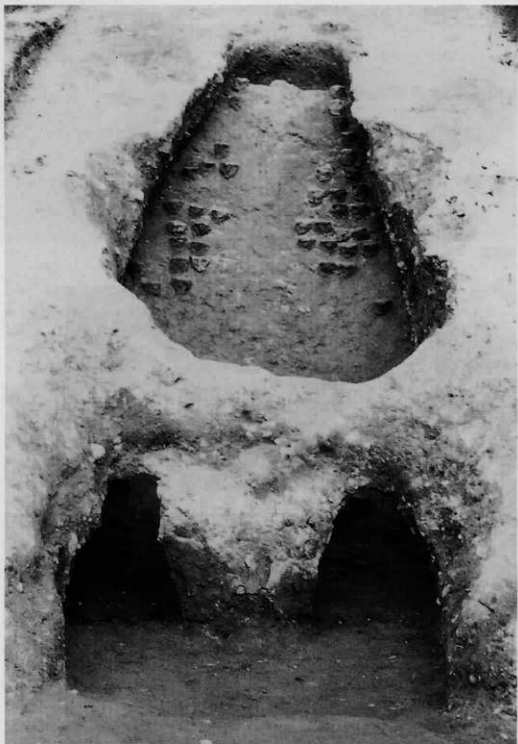


調査前全景



窯体上面プラン検出

图版 2 2号窟遗構(2)



窟体近景

図版3 2号窯遺構(3)



煙道部



窯体 (上から)



分焰柱 (中から)



窯体上部

図版4 2号窯遺構(4)



焼台の配置



窯体断ち割り

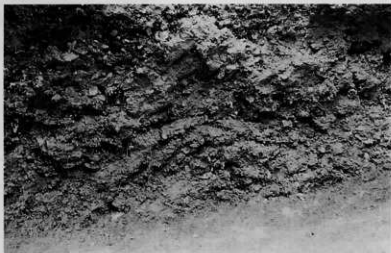


分焰柱断面



分焰柱の木芯痕（アーチ部分）

図版5 2号窯遺構(5)



窯壁（焼成室左）



調査区全景



前庭部

図版 6 2号窯出土遺物(1)



32. 椀 (灰原)



105. 椀 (窯内)



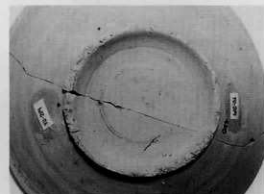
51. 椀 (灰原)



146. 椀 (窯内)



86. 椀 (焚口右袖部)



146. 椀の付高台



椀の重ね焼き状況、8段以上 (灰原)



椀の内面に残る小型仏器の焼成痕 (灰原)

※番号は、実測図番号に一致

図版 7 2号窯出土遺物(2)



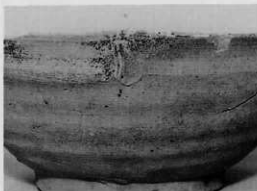
163. 輪花椀 (窯内)



161. 輪花椀 (焚口)



158. 輪花椀の高台 (灰原)



161. 輪花技法



164. 片口鉢 (窯内～前底部)



223. 小皿 I (窯内)



225. 小皿 I (窯内)

※番号は、実測図番号に一致

図版 8 2号窯出土遺物(3)



165. 小皿Ⅰ (灰原)



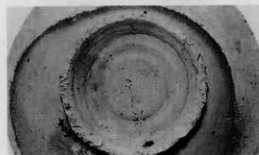
167. 小皿Ⅰ (灰原)



226. 小皿Ⅱ (灰原)



168. 有稜小皿 (灰原)



226. 小皿Ⅱの高台



229. 無高台小皿 (灰原)



204. 小皿Ⅰの高台装着 (焚口右袖部)

※番号は、実測図番号に一致

図版 9 2号窯出土遺物(4)



小皿 I の重ね焼き状況、8 段以上 (灰原)



232. 小型仏器 (灰原)



235. 鉢用焼台 (窯内、煙道部)



233. 小型仏器 (灰原)



237. 椀用焼台 (焼成室斜面部)



236. 椀用焼台 (焼成室平担部)

*番号は、実測図番号に一致

図版10 3号窯・未完窯遺構(1)



調査前全景



調査後全景



3号窟近景

图版12 3号窟·未完窟遺構(3)



未完窟



3号窟煙道部



3号窟窟体上部



3号窟分焰柱検出状況

図版13 3号窯・未完窯遺構(4)



3号窯分焰柱 (中から)

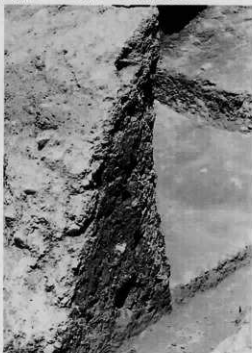


3号窯分焰柱左側 (中から)



3号窯分焰柱右側 (中から)

図版14 3号窯・未完窯遺構(5)



3号窯分焰柱断面



3号窯窯体(上から)



灰原断面(上から未完窯盛土一流土-3号窯遺物-3号窯盛土)

図版15 3号窯出土遺物(1)



19. 椀 (灰原右側)



141. 椀 (灰原左側)



53. 椀の内面 (灰原右側)



159. 椀 (灰原左側)



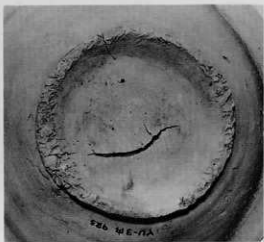
53. 椀



206. 椀 (窯内)



25. 椀の高台付装着 (灰原右側)



206. 椀の付高台

※番号は、実測図番号に一致

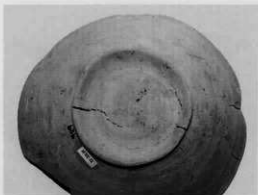
図版16 3号窯出土遺物(2)



216. 輪花碗 (灰原左側)



219. 片口大碗 (灰原左側)



216. 輪花碗の付高台と外面



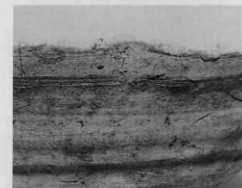
219. 片口部分



214. 輪花碗 (灰原左側)



218. 片口碗 (灰原左側)



214. 輪花技法



碗内面の小型仏器焼成痕 (灰原左側)

※番号は、実測図番号に一致

図版17 3号窯出土遺物(3)



267. 小皿Ⅰ (灰原左側)



336. 小皿Ⅱ (灰原右側)



267. 小皿Ⅰの付高台と外面



339. 小皿Ⅱ (灰原右側)



280. 小皿Ⅰ (灰原左側)



356. 無高台小皿 (灰原左側)



331. 小皿Ⅰ・有稜 (窯内)



366. 耳皿 (灰原右側)

361~365. 小型仏器 (灰原)



*番号は、実測図番号に一致

図版18 3号窯出土遺物(4)



223. 小椀 (灰原左側)



224. 鉢 (灰原左側)



222. 片口小椀 (灰原左側)



椀の重ね焼き状況、
10段以上 (灰原左側)

小皿Iの重ね焼き状況、
10段以上 (灰原右側)



221. 片口小椀の付高台 (灰原左側)



369. 椀用焼台・斜面部用 (灰原右側)



368. 小皿用焼台・斜面部用 (灰原右側)



367. 椀用焼台・平坦部用 (灰原右側)

*番号は、実測図番号に一致

矢戸上野2・3号窯発掘調査報告書

平成6年3月31日 発行

編集・発行 可見市教育委員会
岐阜県可見市広見1-1
☎(0574) 62-1111
印刷所 株式会社 太洋社